吾家文庫第七編

美文散文

閑雲野鶴

東京　大學館發兌

閑雲野鶴

200

序

傳へ聞く、マコーレー卿はあらゆる富と、あらゆる名と、あらゆる才とによりて得らるべきほどの、あらゆる幸をも受けつくしゝかど、卿が讀書よりえつる幸は、うれ等のすべての幸にもとえさと。我は今この閑雲野鶴をみづからと友となす讀書の人々よりハ、寧ろとゝにをさむる先覺の筆の、うの功利の外のたうときいはゞを得わきまへざるやゝらよ、強ひて此書をすゝめて、富と、名と、才と拔のみ人の世の價あるものとまぞへる彼等に、少しく悟ると

ところあらしめんところ望むなれ。さて也、さも
あらせてんよは、まづこの書の總振假名なら
でやた。

三十二年十一月

夕村舍風葉

例言

一本書は當代諸家の述作に係る、散文、韻文、紀行、論說等、多趣多樣の好文字を撰みたるもの、讀者宜しく文の妙趣を味へば、各家獨特の詩想紙上躍々たらん、

一本書の順序は敢て意あるに非ず、唯讀者の便を計りたるのみ、各家幸に恕せられよ、

一本書編纂の當初、諸家の承認を與ふるに吝おらざりしのみならず、進んで其舊稿又は新作を寄せられたり爰に於て本書の光彩陸離として擧る、謹んで諸家の厚意を多謝す、

巳亥十月中旬

編者謹識

閑雲野鶴　目次

◎讀書と修養……（一）……松村介石
◎三文日記……（四）……巖谷小波
◎羽田捕鴨場に遊ぶの記……（九）……田口鼎軒
◎文章道……（一三）……巖本善次
◎白露の夢……（一七）……破蓮
◎山蔭集……（二三）……佐々木信綱
◎骨堂に有限を觀ず……（三九）……星野天知
◎夏の嵐山……（四九）……生田葵山
◎初霞……（六五）……太田玉茗
◎想海漫渉……（七二）……馬場孤蝶
◎湘南の新夏……（八三）……川崎紫山
◎淨窓明几……（九一）……

●暮秋……近衛忠熙
●夕菊……蜂須賀茂昭
●籬菊……鍋島直大
●閑居友……長谷信篤
●曉紅葉……東久世通禧
●曉雁……津輕承昭
●海邊秋風……久我建通
●夜聞虫……長岡護美
●曉更月……下田歌子
◎賴三樹遺骨改葬始末……(九四)……末松青萍
◎賴三樹遺骨改葬始末讀記……(一〇六)……仝人
◎丙申秋扈從……(一一五)……三島中洲

◎蚊やり火物語……(一一七)……小島烏水
◎附鳳攀麟……(一三〇)……小松綠
◎賴襄を論す……(一三七)……山路愛山
◎頑執妄排の弊……(一六六)……北村透谷
◎人生の意義……(一七二)……仝人
◎賤事業辨……(一七九)……仝人
◎向井去來……(一八三)……正岡子規
◎千代の句集を讀みて……(一八七)……星野天知
◎桃山宇治……(一九五)……石井露月
◎早瀨の月……(一九九)……田岡嶺雲
◎別路……(二〇〇)……河井醉茗
◎大淀三千風……(二〇二)……久保天隨
◎青葉若葉……(二二五)……みをつくし

◎豊太閤と能樂……(二六一)……大和田建樹
◎夜雨莊を訪ふ記……(一七九)……無量
◎女詩人班婕妤……(二八二)……白河鯉洋
◎新体詩押韻の事……(二八七)……越智處之助
◎人生の風流を懷ふ……(三〇一)……枇杷坊
◎春夜彈琴を聞きて……(三〇二)……小東祥子

閑雲野鶴 目次終

美文 載文

閑雲野鶴

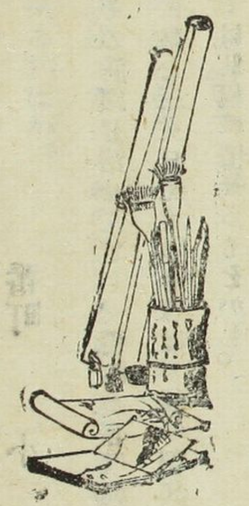
讀書と修養

松村介石

讀書を重んずるものは、修養を怠り、修養を重んずるものは讀書を輕んず、二者の弊察せざるべからず、予一日勝先生を問ふ、先生何んの教ゆる處ありてか、突如として予に言て曰く學者は馱目、讀書何の用ぞ、秀吉に何の學ありしぞ、信長何の書を讀みしぞ、而かも彼れが如くそれ偉ありと。予即ち答へて曰く、然則先生は無學者か、予れ之を氷川清話に聽く、先生の學を好むや、幼時より甚しく、衣食にすら窮するの時、猶且つ書肆の檐頭に立ち、密かに諸書を窃讀するを常とせりと、學者にして學を詈る、予の服せざる處あり、信長は無學ありし、あゝを以て其放心を治むる事能はず、終に光秀の爲めに害せらる、秀吉は無學ありし、こゝを以て天下を子孫に傳ふる能はずして亡びたり、北條は君を弑して起るもの、而かも其學を重ん

ずるに及んでや九代泰平の治を致せり、家康は劍を以て天下を征服したるものに外あらず、而かも羅山天海の徒を引て顧問とあし、文を以て其治を圖りたるの結果や、遂に十有餘代の運命を全ふせり、學豈輕視すべけんや、蓋し先生予を以て世上一般の空學者とおし、言のおゝに及べるあるべし。於此乎先生頷諾、直ちに婢に命じて大部の書二三卷を齎らさしむ、披き見れば是れ先生の手寫にかゝる、和蘭解譯の字典あり、字數幾十萬と云ふを知らず、小字塡充、宛然群蟻の匍ふが如く然り、先生の學に於ける勉めたりと云ふべし。他日又た先生を訪ひ、談偶々百難に處する心事に及ぶ、先生の曰く夫れ只だ平心かと、予の曰くあれ陽明の簡易、孔明が靜、大鹽の太虛、小楠の自然かと、先生の曰く識らず、唯り予は予に在るものを知るのみと、是れ即ち大悟眞悟のある處あり、然れども先生は讀書なき人にはあらず、儒に入り佛に出で、朱王の學に於て、大に究むる處あるの人あり。予此に於てか云はんとす、當今世上一般の儒佛基敎の徒は妄りに書を讀み、道を講じ、說を演べ、敎を爲すに於て頗る巧あるものありと雖ども、多くは皆務博誇多の賣學者俗學者のみ、

是れ予の取らざる處あり、然れども是れ學の罪にはあらず、又讀書の罪にもあらず、之に加ふるに修養を以てせざるものゝ罪たるのみ、古へより修養あるものは皆讀書の人にあらざるはなし、讀んで且つ思ひ、思ふて且つ讀む之を眞の修養と云ふ、只だそれ學問讀書をのみ是れ重んず、おゝを以て口頭の禪となり、訓話記誦の學となり、空しく講壇の說敎者とのみ化成し去る、而かも亦た讀書を輕んずるの弊や、昏迷不移の輩となり、自讃の徒となり、狹隘頑愚、拘々徑々の人となりて止む、察せざるべけんや。



三文日記

番町　小波

●牛門の葉子は烟霞療養にその神經を治せんとし、番町の吾は朝起療養をもて、あはれ胃病を醫せんとす。玆に是を三文日記と題せるは、彼の朝起の德を稱へし例の諺によれるものから、やがては此稿に價せるもをかし。

秋高く馬肥えて吾朝寐せず

●八幡(市谷)の太鼓五時を報する頃、やをら枕を離れて、冷水に全身を拭ひ、ほかく〳〵と心地好きに乘じて、ステッキ片手のふらり門を出づ。

朝露の門や乳屋と入れ違ふ

●此處彼處歩きめぐりて、昨夜より藥の外は入らぬ腹の、頻りに物欲しう覺ゆる頃、再び家に入れば、其間に書齋は清められて、次の間には膳部の設けあり。

秋もやゝ朝飯うまき葉月かな

●紀尾井町ある甥の昨夜遊びに來りて、歸りは母の背に正体無く、金筋入りたる陸軍帽の、其儘長押に忘れられたり、心付きて散歩の序に持て行けば、さしも早起と聞えし家の、仍奥に聲も無きに、思へば今日は日曜なりき。

朝貌に日曜の窓閉ざしたり

●名に負ふ土手の邊を過ぎて、坐ろに杖を停むれば、まだ青き草葉の未につらぬき止めぬ露の玉、ろを玉の緒の虫の數々、一つらに聲を絞りて、朝の樂を奏づる所、身は塵境にあるを覺えず。あはれ吾がフラネルの裳その露に濡してんと、二歩三歩進みよりしが、白き物塗りたる札に、例のいかめしき文字見ゆるに、南無三寶と足も疎みぬ。

露霜に制札朽ちぬ恨かな

●四谷門の升形はまだ取拂の厄を免れて、松に尙千秋の色あり。おゝは山の手の要の地とて、市谷赤坂に比ぶれば、常に人馬の繁かるに、取分朝の猶多きは、ろれよ四谷の西の端に新宿と云ふ所あればか。

後朝の瞼や霧の重げなる

●近く一年餘り住みて、其朝夕の太鼓は聞けど、まだ親しく詣でゝは見ぬに、或朝思立ちて罷りしは、彼の市谷の八幡社あり。思ひしよりは境内清らに、眺望も流石にて、堀を隔てゝ番町の家並、呼ばゝ應に應ふべきに、

立ち出でゝ霧に失ふ吾家かな

●春はさころと思はるゝ老木の櫻の落葉を踏み、戰捷紀念の札立てる稚木の梅の枝振を賞めて、其處此處を逍遙するに、彼方の女坂より、三々五々隊を爲して、裏門へと拔け行く若者の群あり、何れも着流しの帽も被らず、怪しげなる兵子帶〆めて、顏の色も艶々しからぬが、左の腋に小き包み挾みて、小走のさも忙しげなり。初は何者とも解せざりしが、やがてけたゝましき滝笛を聞いて、思へば此裏の加賀町に秀英舍の工場はありける、

朝霧に職工急ぐ滝笛かな

●一日清水谷に大久保公を吊ふ。露は芝生は濕して、旭未だ梢に及ばず、一鳥聲無く人稀なる所、轉々感慨に堪えざるものあり。實に公が遭難の頃は、此地は俗に紀

州の原と云ひて、藪高く沼深く、茅、蘆、木賊など生ひ茂りて、晝も狐狸のさまよふ程なりき。其頃吾は八九才、友と屢々此處に來りて、蛙を追ひ、蜻蛉を捕へ、日も足らず遊び狂ひしに、爾來二十年の星霜を經て、其地此如、吾亦如此。

名所の霧よ往時を夢みけり

●其歸途は故らに市街に入りて、只ある牛乳屋を見出し、まづコーヒ入の一杯を命せしが、吾を開口の客と覺しく、卓上の新聞折目も亂れぬに、南無三手元狂ひて、まだ新らしきテエブルクロースの一隅大分汚したり。

牛乳の沸く間をもてなす寵馬かな

●元園町の坂の上、例の醍醐侯の門前にて、女の新聞配達を見る。思ふに良人の助手なるべし。太り肉の三十五六許なるが　洗ひざらしの單衣の裾高く、髪は流石に圓く結へど、下は素足に草鞋の効々しく、只在る長屋の窓下に立ちて、赤きを一枚渡せしに、其腕の伸びし機か、あれよ茄子の坊一個、袂より躍り出でゝ、坂路をゝろ〳〵。

秋茄子燥が袂を轉げ出ぬ

●麹町の通り、十丁目より一丁目までと思ひ立ちて、七丁目まで來かゝりしに、只ある花屋を見付けて、好心の去り難く、立寄りて二種三種購ひ、其まゝ家に歸りて、常より早きを訝る妻に、あれ見よと誇る折から、あれも日課を同うせる二番町の友の來りて、塀の窓より「まだ出ぬか」と言ふ。「もう濟した」と言へば、さうかと立去る氣勢に、急ぎ門まで出づれば、はや姿も見えず。彼は勝れて足の長き男ありき。

もう友の霧に取られてしまひけり

(をはり)

羽田捕鴨場に遊ぶの記

田口鼎軒

今茲一月十日友人風祭靜堂と共に羽田に遊ふ、此地捕鴨場あり、余等嘗て規模廣大にして府下共に比すべきものなき事を聞くを以て場に入りて一覽せんことを求む、主人之を諾し余等を誘ふて一茅屋の中に入る、壁上に小孔あり、之を偷視するに忽然一池あるを見る、形方圓にして廣約一萬坪もあるべし、數所に引堀と稱せる支池あり、池水之に通ず、池中鴨數千羽あり、家鴨と共に水上に遊泳せり、主人曰く、いま試みに鴨を呼致さん」と、即ち香餌を壁の内外に通せる管中に投し以て池中に散布せり、家鴨其の音を聽き群を爲して我芽屋の下に蒐る、而して鴨亦之と共に來りて爭ふて香餌に食し、毫も余等か壁間より偷視するを知らざるなり、余主人に問ふて曰く、如何にして能く鴨を獲る乎、曰く家鴨は僕之を養ふ事久し、僕之を右せんと欲せは右すべく、左せんと欲せば左すべし、故に之と共に鴨を引堀の中に陷れて之を獲るあり、今請ふ君の爲に之を示さん」と、則ち余等を誘ふて引堀の方に赴

き香餌を散布する事初めの如し、暫くして家鴨と鴨と群を爲して引堀の中に入る、忽にして引堀の口鎖されたり、鴨其の歸る能はざるを視て、飛ひて去らんとす、主人之れを見て網を以て之れを打つ、鴨の頸細く、網目の中に入りて動く能はさるあり、主人一擧數羽を獲て余等に示して曰く、捕鴨の法他の奇あし、單に此の如きのみ」と、

余是に於て靜堂に語りて曰く、僕捕鴨の方法を見て轉々帝國議會の近況に感あきを得ず、抑も帝國議會中彼の家鴨と同一なるもの極めて多し、純潔の議員香餌の那處より落ち來るを知らずして、之と共に遊泳し、之と共に笑樂し、終に引堀の中に投するに至るもの果して幾人ぞや、今や物價騰貴し、八百圓の歳費も殆んと一半を減したるに均し、此時に當りて意外の香餌天外より來る、議員たるもの豈に之を歡迎する事彼の鴨の如きものあきを期せんや、自由黨國民協會の近況何ぞ其の騷然たるや、豈に夫れ宛然たる一捕鴨場にあらずや、靜堂曰く、帝國議會果して此の如き乎、子亦何ぞ香餌與せざる、余曰く、僕若し香餌を喫するを得ば、豈に此言を爲さん

や、唯々僕に與ふるものあきを如何せん」と、相視て一笑す、主人曰く、本日蒐まる所の鴨は大約狡黠あるものあり、彼れ久く此場にあり數々引堀の中に入りて危險を免かれたり、故に決して深く引堀の中に入らず、唯々單に池中の香餌を食するものあり、此輩眞に處し難きものとす、靜堂之に和して曰く、鼎軒も亦此類の鴨にあらずや」と、

余主人に問ふて曰く、僕家鴨を見るに肅然として一笑せず、能く鴨と遊ぶ、是れ亦一技なり、抑も如何にして家鴨を養ふ乎、主人曰く、家鴨は少者を可とす、少あるもの其欲食にあり、是を以て香餌を與ふれば爭ふて之を獲んと欲して喧噪す、是れ用ふべきあり、其壯あるに至りては、其欲食にあらずして色にあり、是を以て香餌を投ずるも顧みずして唯々鴨等と戲れんと欲す、是れ却て害あり、故に家鴨の老いたるものは大約之を殺して肉とあし以て市に鬻ぐあり、是れ亦非常の利あり」と、

余曰く、嗚呼之あるかな、余亦年老いて老家鴨と運命を同うせるものを見る事少あからず、人生此の如きは眞に憐むべきかあ、思ふに今後帝國議會亦多く此般の人を

出さんのみ」と、

此日主人に請ふて鴨數羽を購ひ靜堂と共に泉館に投じて之を喫せり、其味太だ美なりき、然れども是れ則ち家鴨の爲に誤まられたる純潔の鴨たる事を思へば、私に憫憐に堪へざりき、歌あり以て證とおすべし、

鴨よ、吾はあらじ、家鴨よ、吾は得あらじ、
羽田の池の、餌をば食はずも、吾はあらなむ、

又

家鴨や羽田の池の上に國の樣をも吾見つる鴨

文章道

近年最とも驚ろく可き進歩を成したる者、文學に優れるは他にあらじとおそ思はれ。試みに、明治二十年以前の時文を取りて、之を現今世に現わるゝ日々の文章に比ぶる時は、無味冷寒おる宣告文を讀みて後ち、雅情津々たる小說躰に接するの心地す。蠟を嚙みて、而して蜜を嘗むると言はんか、石を抱きて、而して花を挿すと爲さんか。前後感觸の相ひ違ふと、實に霄壤の比ひにはあらず。

余深く文運の進歩を祝すると共に、尙ほ大ひに慊らずとする所ろのものあり。左に、所感を記して、文士雅人の一考を要めんと欲す。

古より、巧言令色は君子の惡む所とおす。これ、其の眞情誠意の言色に適わず、巧みに外面を令くして、衷心を飾るが故おるべし。德おくして、德を裝ほふは僞善とす。僞善は、愛の人、基督すら之を寬假するとおし。僞は短弱おるよりも野卑おり、否お、野卑おるよりも醜惡なりとす。誰か之を嫌ひ、嘔吐して之を度外に棄てざ

るものかあらん。然るに、文章に於て、巧言令色を斥ぞけざるは何の故ぞや。

夫れ、文章は、人心の像なり。之に波瀾あるは、心臓鼓動の名殘にして、之に變化あるは、五情哀樂の跡形なり。左れば、態軀に風采の顯わるゝが如く、文章にも亦た神韻を出し、言語に聲ある如く、之にも亦た音調を寓す。皆共もに、靈宮神奥の心より發する影響にあらざるはなし。左れば、文章は心の像を形わし、其眞の態に似て、眞實あらずんばある可らす、誠正あらずんばある可らず。

此故に、文章の高潔なるは、先づ道念の高潔なるによる。文章の崇重偉大なるは、所感所念の先づ崇重偉大なるによる。もし讀者をして讀んで神仙と接するが如くならしめんと欲せば、筆者先づ心を仙界に逍遙遠遊せしめ、思を六合に馳せて、超然、幽聖玄妙の地に呼吸せずんはある可らす。もし讀者をして、美麗妙雅の風流を味わしめんと欲せば、筆者亦先づ、邪氣を洗ひ、胸塵を拂ひ、心慾を清め、潔然、美の觀念を純清にして、以て、歌の神の温乎として指ざす所ろを直覺せずんばある可らず。凡そ、筆者の心先づ斯の如くにして、而して、之に應ずるの文章成る。故に巷

處に文章の美を求めんと欲せば、先づ此處に其泉源を清めざる可らず。彼は響あり、此は聲あり。第一に、中心深く修養する所あくんば、斷じて誠正僞はるとあきの眞文章を得可らず。

此を以て、文字を記し、例證を考へ、躰趣を工風するが如きとは、作文道に於て末事とあす。作文の道は、亦一種の道にして、其規純然たる道德なりとす。先づ、不僞至誠を念とするの修養に得る所あらずんば、千篇を成すとも、必竟娼婦が巧言、俳優が令色と異あるとあけん。文章はあれ千古の事、君子、道を載するの業あり。豈に輕々に附すべきものあらんや。

余は、此の文章道あるものに於て、深く今の才子雅人に惜しむ所ろあり。滔々たる文士、末に走りて本に反らず、文の器械に掛念して、其道に意を注ぐ者なし。之れ實に聖代の一大恨事にあらずや。

彼の巧言令色の徒、美目眄たり、巧笑倩たりと雖ども、其の人を動かすや、必竟朴者が澁面吶辯にだも及ばず。既に及ばずとせば、巧令の僞はりも遂に何の効かある

。文章の巧にして眞なきもの、亦た之れに同じ。千言万語、遂に眞摯なる一句に及ばず。

故に、謹しみて世の文士に告げ、亦掲げて吾黨社中の戒と爲さん。作文の人は、先づ作心の人たらざる可らず、修辞の士は、先づ脩德の士たらざる可らず。嚴然として謹愼覺念し、情清く、氣澄み、邪氣遠く散じ、聖意大ひに湧きて、而して後ち、潔白の紙に向ひ、肅然として筆鋒を下し、萬古磨滅す可からざるの印刻を遺すべし。

昔し紀の貫之が日記を物したる國に漫遊中

故の坂本龍馬が住み家の今は客舍となれる

東端の一室に深夜孤燈をかゝげ

巖本善次記

白露の夢

破蓮

法雲深くたゝびいては月の破れに面白味を知り、情雨しげく濺いでは花のもろいが誠に妙〳〵、泣てみたりおゝッて見たり笑ふてもみる浮世三界、滔々と打ちくる世の潮をも呑みつくさんず丈夫のあら膽すら一滴の涙に身を投て惜まぬ習ひ、まして纖弱き花の心、脆い所に風情あり散らねば人にもおしまれど、咲た櫻にあせ駒つゝぐと小言をいふは青い〳〵、烈しかれとは祈らぬと花に世話やく年寄り朝臣は、さすがに浮世の男あり、床に侘助は利休も雅でげすがと、悲しや、作り花用ひて壽命を誇りし鳴滸の者もありしとかや、すねてあまへてゞれても見たり、思ひだしては、羞かしがる、おゝが可憐き相場あるべしと、何かわからぬ事つぶやいて獨りおかしがる男ありけり。或日蓮華のひらく聲に夢破られて慌たゞしく寐ぼれ出でしが、葉に湛えたる露の清さにおもしろがりて拾はんと足ふみかけしに、をゝや、葉はび〳〵に破れ身は池水に陷りて始めて目覺めながら大笑ひに笑ひしよし、あれより

此男破蓮坊と名づけて漸く霖ぼれずありしとかや。きる程に此男尙ほ懲づまに又露を野べに打たんとて、或夕べうか〳〵と立出でぬ。

花にはあまじ同伴は邪魔よとひとり杖を曳きてさまよい出るに、もとより定家の骨をさぐるあとも能くせず杜子が方寸に入るの妙も得ねば、たゞ羅(うすもの)の身を風にまかしてそゝはかとあく往く程に、月は峯の松が枝にきらめき出でゝ風情いふばかりあし、心づきて見れば人里すでに遠く、心やゝ慌たゞしく　往けども〳〵人の家あし、あやにくに梟のあゝさへおそろしげに聽きゆ、樹々の聲〳〵幽にひゞきて向ふの森かげに怪しげある家の屋根ほの見えたり。捨た身も雪の降る日は寒くあそあれといふたは尤も、地獄破りの極樂道中に足踏みならす破蓮坊も、さては地獄に佛を拜む氣になりたりと、嬉しき足を急かせて近づき見れば、荒れたる門の忍ぶ草茂りてたとえんかたあく小暗きまでに古びし無住の古院めきたり。霧も深くて露けく、幽靈には相應せねど鬼あど居らば斯る處に取り合せ妙ならん、野には伏すとも宿借るあ破れ障子に韓紅ゐあどいへど、それは昔しの物語りあれは今の行きがゝり足もくた

びれて歩くはいやあり、まゝよ、到る所は青山よ飢餓い時にまづい物あし、とは言ふものゝ、もし饑じい鬼奴あど居らば此破蓮の骨でもせしめられてはたまらじ、たゞあゝが何にも言はす風流〳〵、一足踏みだしては不退が男、どうあるものかと喞きて、破れ戸押し開き進み入れば、さすがは氣味よろしからず、きしむ床板もたゞあらぬに、喚べば山彦の答ふる聲やすらん、半ば破れ落たる板戸を潜り入れば、西の臺ある方に當りて、怪しとも怪し、火影幽かに漏れ來る。すばあそ何ものか巣をくうあれ、茂林寺の毛和尙か、白浪山の石川某かと獨り定めかねて戸に立寄れば、意外とも、意外とも意外とも意外あり。さてもゝ、これは何じや。

風にゆらめく幽かある火影、淋しげに打向ふ一人の御姿、微笑む如く悲むおとき、しかも妙齡ある花の御姿あり、白き袷に淡紫のあよゝかあるを襲ねて華やかあらぬ御いでたちあれど、包むに餘る十八九の花の貌、あはれ品まさりして見惑ふまでに艶あり、やつれは頰のあたりに見えて力あげある趣きは雨に惱みて花いよ〳〵哀れある如く、水ぎは立ちし襟髪のあたりより鬢のほつれ匂やかに靡く風情は雲がゝり

て月の朧をゆかしむに似たり。必定あれたゞものあらじ、引捕へて本性を現はしくれんか、さりとて美くしや、思ふにこれ花の化物なるか、狐狸か、幽靈のわざあるか、さりとても美くしやと、始めは只管疑ひながら獨角觝に力身し破蓮も、あまりの美形に膽を消して、智惠も、分別も、意地も、疑惑も、何が何やら夢の如くにさらりつと忘れはて。　あれが鬼あら面白い、幽靈あらばます〳〵結構、男と生れし甲斐あつて、いでや此鬼に見參せんと、板戸に双手をかけながら一ィ二ゥ三ィと度胸を据て引きあくれば、きしみの響きを聞きながら見かへりもせぬ女の擧動、あれはいかにと又愕けども。蓮を破りし破蓮の本性、男はズンド斯したものよと、會釋もあくどつかと前にすわれば、女は始めて氣つきし如く呆れしようなれど遁んともせず、少し愕きしようあれどもわるびれても見えず、さもあらんと破蓮はおとあしく、あれは此あたりの律義男、至つて内氣の生れにて露を拾ひ花を打ちて遊ばんとて參りし事より、決して氣を置く者あらぬよしを述べて、偖其身は何のわけありて斯る所に獨り居給ふやと問ふ。見られまつりてげにおはづかしや、たゞ深きゆへあ

りて折〳〵此古院に獨り籠れるありといふ、はんべる言葉に先づ少したぢろぎながら一向ぬからぬ顔つき。籠もり居給ふて祈願にても立て給ふやといへば。たゞ此西の臺あつかしさに堪へねばといふ。あつかしと言ふは此室に居りし人にもやと言へば。さあり此室に宿りし人の事に侍るといふ。女か男かと問えば、目の縁さと赤らめて無粋やとつぶやく。あいつあか〳〵譯ありそうあり、花の露を探ぬる矢先きに聽捨てあらぬ一珍事、とはいへ野暮に問ひつめて困らするは情けを知らぬ唐變朴のあと、破蓮はそんな男でおし、嬉しく白狀さするあろ花あり實ある馨り男とあそ申すべけれと、早く思案して俯向きがちある御顔つく〳〵と見るに、前から見るは又た格別なり、目と鼻との置き所がどうだとか、口と眉とのふざけかたが斯だとか、怪しい白いものや赤いもの塗り散らして、美だとか艶たとかいふようあ、痴漢の迷ひに誑かさるゝ男ぢやあけれど、此女凄いまで情けの光り溢れ出で、荒膽拉ぐ妙術ありけん、もとよりあまめかしい野心あぞ枯れ果てゝ毛頭御座らぬ骨あれに女に恥かしがるあどいふふつゝかあ男にあらねど、怪しや耳ほてりて目の縁重く、胸さへ

どきつく言ひ甲斐おさ、修行若いと心に叱りて口の渇きに唾を呑みおめば、いつしか吾身は膽のひしやげしように覺えし。

袖ふりあふも他生の縁とやら、斯る怪しい所に出で逢ふも何かの深き因縁にやおど いへば、女やうやく口を開きて。えにしと申せば、えにし程不思議のものは侍らず、蝶の羽風に脆く散る花もあれば水に落ちて流れぬ花もあり、雨や風のおくもあらば花とてもさまで脆くはあるまじきにと怨ずるようにいふ。 それは又何の事よと笑えば、少し打解けたるようにて額おしに見あげおがら。殿御は罪深きものよ、雨と成り風とおりて何おもしろとや花を吹き給ふらん、女子の罪が明けの鴉に侍らば殿御の罪は逢ふ日の長坐客にや侍らんかしといふ。 おかしき事言はるゝ御方よ、罪はいづれが重いやら知らねど、迷はすといふ美しい看板は罪のそも〳〵に在さずや、浮氣と申すもの孰れにかといへば、まおとに言ひにくけれど男子おらぬ方に多し、腹は立たれお、無粋じやぞえといへば。 御念のいりたる事よとほゝ笑む、おかしいやら悲しいやら涼しい眼尾に露を浮べて。いえ〳〵浮くも沈むも、春の空にす

るも秋の空にするも、そちらの御心次第と申すもの、花の色か濃とか淡いとか、散りぎわが脆いとか丈夫すぎるとか、さん〳〵おる品定めを列べ給ふて、さて此方より彼方へと花の撰好みに移り氣おそろしい蝶の悪性、ろうとは兼て思ひ知らぬにあらねど、そは風に染ぬ前のおと、羽風しみ〳〵身にしみては、よしや一時の春風と知るも散りて惜まぬは哀れに侍らずや、兎ても角ても果敢おびたるは女子の常に侍り、さるを知りつゝ、忍ばし給ふ袖の馨りに、おまじ眞實を見せ給えばおそ。月の心も暗ふ成り花の心も凋みおそすなり、憎みても憎らしき罪は殿御の方に極り侍り、三とせ斗りは心ざし厚く通ひ給ひし御方すら、果敢おき事に秋の風と吹き變はりし懼ろしさ、もはや雄松の影にたづさはらじ、たづさはるとも靡くまじと思ひ定めてしものを、憎くや又〳〵異おる蝶に垣間見られて、言ひがひなくも靡く夕べの風に……、といひさして心付きけん。ついうか〳〵と言はでもの事、許し給へやと羞かしげにほゝと笑ふ。這奴思ふにも似ぬ確かの者おり。一線繩の魂膽ものにあらず、さらば一本まいらんかと、破蓮はわざと空うろぶきて。夕べの風がどうせしやら

耳が遠くて聽えませぬ、思はせぶりの沈默は此身には些お門が違ふちやッと身の上お話しおされ、破蓮が粹の道中も打あかし申すべきに、さて〳〵そのよおな乙女氣にては男の眞情おどゝ申すものまだ〳〵分り給ふまじ、さても笑止の御事やと、嘆息をふとくつけば、女は少しせきおみたるやうにて膝を進ませ目をうるますもおかし。

あどけない顏に上氣の色ほと赤く、あまへるやうに身を捩て、妾に男の心中解せぬとや聽ずておらぬ御事也、年はまだ見給ふ如くおれど情けの苦勞は凡〳〵おらず爲し侍り、おあがましき身の上話しおど、申せと言はるれば難義くもあられど、そは詳しう書つけくれたるものあれば申すまでもおし、今見せ侍れば必ず笑ひ給ひぞよと、傍の文函より何やら書物一冊取り出すに、さらば聽くまでもおしと破蓮手を差出して取らんとすれば、先づ待ち給へと押とゞむ、何故と問へば、ちと申すおとがありといふ。

わらはが一生の中におそろしく思ひ侍りしは、男の浮きたる心と女子の嫉み心とおり、お羞かしき事なれど妾に男二人侍りし、始めの御方は果敢なき者の便りより不圖思はれまつりしに、三歳が程は末の松山變らじとの色見えしが、さる女子の嫉みおそろしくて、それよりうと〳〵しく別れ侍り、人の情けに誠實あらば嫉みも識もいかで妨げ得べきかわ、淺猿しき男おゝろやと世をも人をも果敢おみて、心には着る墨染の法衣、世にそむきてはおか〳〵心も安く、わざと見苦しき佗住ひに人目を忍びて、心の血も鎭まり罪も消ぬべく思ひしにまおとに殿御はお人の惡きものおり、心の漣波立ちそめて物思ひの種子ゆくりなく又かき乱さるゝようおりぬ、そは情け深き或御方の垣間見よりおり、おみ〳〵おらぬ情けに通はせ給ふ眞實に、怪しき因緣か、女子の果敢おき心よりにや、始めはそよ吹く檐端の風とも思はざりしに、何とおく其人を見る毎に恐ろしきやうに恥かしく覺へ始じめ、はては身にしみ〳〵と人知れぬ夢に枕を浸し、物思ふ氣色を人に見せじとよろづを謹む程に其御方にはわざと冷顏もておせどあやにくに人に見らるゝ心地つらく、されば逢ふも憂く見ぬも憂く、逢はで逢ひぬるすべもがおと、心強く頸そむけては又ゆかしげにろと振り、向

くあは〳〵しくも果敢なきは此際なるべし、女子は總じて裏の裏をも考へ、先きの先をも推量るものなれども、あうなりては僅かのすじも考へられぬものなり、ましてや妾は重〳〵しきかたの少き性なれば、人目なき所に談らはんといふ願ひ斗りに勵まされて、殿が誘ふまに〳〵忍び出で、殊更に人來まじき隱れ家もとめて終に此室に宿り侍り、嬉しさに付けても恐ろしき住ねなり、斯る有樣を見るにつけ思ひの他に怪しき心地はしながら、よろづの嘆き忘れはて〵、唯身も心も此君に參らせんとの心のみにて侍りぬ、慨び身に餘るに付けても殿御冥利の恐ろしく、分けてやりたき心はなけれど、さりとて獨りして奪ふようなる心地もするなり、情けには驅られ心には責められ、たゞ〳〵いつまで御傍らに添ひふして死なんとまで望みに滿ち侍り、此君にはあだの赤繩に結ばれたる御方もあるに、その人〳〵の御心を案しては、なか〳〵に口惜しさ思ひやらる、凡ろ人として恐ろしきものは光りと暗との境をたどる時にて侍るべし、光りに入れば光を忘れ暗に沒れば暗を忘るものなれど、境に立つ身なそ苦しきものなれ、一時の狂ひ覺めがてにつまを重ねし曉の風はおそ

ろしく身にしむものなり、先きの君に捨てられし身も破る心の操には心地死ぬべく思はれ、古院の夜ふかく閉して鬼や住むらん恐ろしく、たゞ一條の光りにすがりて身を嬉しきに添へながら思へば怨むる人の暗き心もいとど凄く、身は死にしようにて心地また死ぬべくなりぬ、身は極樂に置きながら心は地獄に臨むようにて、喜憂苦樂に打つ涙は胸のほむらに鬪ひそめぬ、なに心もなき差向ひに見る人苦しき有樣までに心深く打解け侍りし無量絶美の一刹那、おそろしとも恐ろしや、怪しげなる女の怨靈枕べに現はれ出で、身を聾ひ心をおそひて終に明暗にさまよふ妾が魂を喰ひ盡しぬ、さても此怨靈あろまあとに明暗の境に立づ心のさまなり、美の御神は五慾の汚れ六塵の果敢なき心にては容易美を懷かしめ給はずとかや。昔し某といふ人清き蓮華の池に天女の現はれ給ひしを見つ、天女頻りに招き給ひしかば吾身の汚れを忘れて歩み近づかんとするに恊はず、空しく池を廻り〳〵て心いらつまゝに終に水に陷りて溺れぬ、かくて汚れの重荷は身と共に脫捨しかば始めて天女のもとに至りつきしといふ、されば妾も身は相抱きながら眞の美を懷きて心飽くなとかなはず

、徒らに憂苦の暗に怯懼れてやゝもすれば濁り江に溺れあんとし侍り、明暗の爭ひに暗は終に怨靈に喰らひ盡され、ようやくにして微妙き美の境に到りつき侍りぬ、されど斯ありても唯あつかしく忘れ難きは其夜の袖の馨におそ、破連さま、女子の弱き心飽まで推し給ふてかと、いふ聲さへもうるみ濁りて拭ふ涙は無量の珠あり。さても觸らば落ちん花の風情、情け知らぬ山がつも花の影には息はんとおそ思おものとや、破蓮坊も死んだ男で御座らぬ、左樣然らばと權太夫殿の用談めきし挨拶ぶり斗りにては、情け冥加に盡きたる野暮天大王の擧動とや申すべし、斯も譯の分つた女に逢ふとは浮世もおか〳〵面白く成つて來たり、さても可愛やからかふても見たし、羞かしがらせてせも見たし、と言ふて泣かせては一大事、こう氣高く心淸き女あれば、何を言ふたとて汚れの心よと間違ふともあるまじ、兎角女は已惚れじや、情けあしを見すれば直我身に北山との早合點閉口あり、からかひ言葉に些と調子をはづせば夫婦にあれといふのじやとの當推量困つたものあり、話せる女は少いなに偖も嬉しき女よと思ひける。

さて〳〵面白い御物語り、おうらやま吹は咲かぬ昔しと思ふて堪へもせめ、さん〳〵の御のろけすじ、あまりお人が悪う御座る、ちと此方へお寄りなされて尙〳〵しげ〳〵と御物語り承りたく、其怨靈とやらに吾等も成りて、明暗にさまやう御膺をも、ちと喰ひつかし給はれかしと戯るゝに、女はさすが下を向きて御冗談ばかりといふ、あちらはいよ〳〵圖に乘りて、嬉しく膝を進ませズィと反身に得意を吹かして。さて此室にあつかしさを忍ぶ御方は今申されし垣間見の殿あるべし、其御方の心中だてはいかゞにや、苦しうあければ迷惑御かけ成されし償ひとして男おゝろを聽かせ給はるべしといふに、女は少し身を進ませて膝も崩るゝ斗りあり。どふせ殿御の眞實は分りませぬ妾あれば談りても甲斐あからんとすねる。這女頗るもの、すねてからかふて男を迷はす手練もあり、餘り乙女と見て失敗ッたりと思へば。あやまりました許して下されといふ、いゝえ許しませぬと俯向く。これ腹を立つもので御座らぬ、芳野山の上人樣に叱られますわと、其背を撫づるにいよ〳〵むづかる、あれ〳〵とすかせば身を投出してあちらの膝にもたれかゝる、あれは大

變と身を引かんとすれは。サア動きませぬ誰か來ても離れませぬと笑ひ出す。あれは人の悪いお嬢様あり、女といふ者はさうしたものでおし、厚顔しいのは女に禁物でといへば。されば女といふ者を御存じおきあとよ、耻かしがるは心のたしかに定らぬ前のあと、もう斯と思ひ込めば心も安く乱れ無げれば、はづかしおんどに躊躇ひ待らず、なまじ男の膽よりも餘程動かぬたしかおもの、嚮さには何と仰せられてか、サア膚を些と喰ひついて下されとたしおむ。破蓮仰天して得意の調子少しうろたえおがら、困ッたとと腋の下に汗をにじます。斯して居て下さらばお話しをして聞かせ侍らんといふ、始末にゆかぬと言はるゝと思えど今更何の言句も出ねば、唯はい〳〵白痴の返事にくだらぬ挨拶をするばかり、どうもおらぬと氣を勵まして。さても大事の〳〵殿の御心中はいかに、御話し成されいといへば、ろちのお義ましき粹菩提より先づ聽聞仕りたしとゆふ。いやそちらより。いえそもじ様より。それはどうも成りませぬ。さらば名殘おしけれど又の逢ふ夜に爲し侍らんか。それは餘りに情けおし、お話しおされとやりつ返しつする程に、ぞつと身にしむ風も襟もと

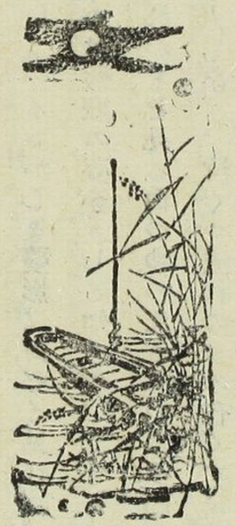
に寒く、思はず大の嚏一ッ、發句生。

あたりをいぶかりて見廻せばまだ初夜の頃おるべし、月は皎々と白くあがりて疊の上に松の影は見へぬ、障子にうつるおかしき蔓影は何ぞと見れば、あはれに憂おる檐端の夕顔おり、さては今のは假寐の夢おりしと知りぬ、てもさても憎からぬ花のふるまひかな、心あてにそれかとぞ見る白つゆの光さへたる夕顔の花とは、おれぞ夕顔の局が哀れの縁のろも〳〵おり、泣くや流れの身の行くすゑ悲しい宿りを此世にとりて、哀れの別れ、悲しい縁に、世を果敢おむ若ものも多からんに、いやおゆめを見たるものよ、あゝ〳〵浮世はこうかと力おき欠二ッ三ッして見かへれば、讀みさしたる源氏一卷あり、夢のお人が文函より取出せしものとも見えて哀れ深く、袖のうつり香忍びかねて讀みくだせば。

いかにわびしからんと見給ふ、おそろしきけもおぼえず、いとろうたげおるさまして、まだいさゝかかはりたる所おし、てをとらへて、我にいな一たびおゑをだにきかせたまへ、いかおる昔のちぎりにかありけん、しばしのほどに心をつくし

哀におぼみしを、うちすてゝまどはし給ふがいみじき事とおぼもをしまずおき給ふ事かぎりなし……

世は鳥部野の薄げむり別れといふもの何れ悲しからぬはなし、死しての別れに聲を呑み生きての別れに惻々たり、夢の面影あやなく目に殘るも哀れに、障子を開き檐端を見れば白き花びら心なく散りかゝりけり、と破蓮坊は申しける。



山陰集

佐々木信綱

暑さを避くとて大磯なる地獄谷のほとりに假の宿りをしめける時

あろばむに子らによろしく書よむにわれにによろしき山蔭の庵

近きわたりに清き泉あり日々其ほとりに物して

天地のかくろへおとをわが胸にさゝやくおとき水のおとかな

ちりの世のちりの都のうちにてはきくべくもあらぬ水の音哉

あらかねのつちの底ひのある事を語るが如きみづのおとかな

しばし語りて友の歸りし清れがもと又一人にも成にけるかな

山かげの水のひゝきにきゝ入りて我身われをもわすれつる哉

海のほとりにて

ほのくらき青葉が中の宿をいでてしのゝめの海を獨みるかな

いくそたびよせてはかへす白浪のあとなき跡をふみてゆく哉

數しらぬ濱の小石もろ〳〵におのが色あり己がかたちあり
かぎりおぎ大海原にむかひをればまさおに似たる我身也けり
あた丶けきまさおの上の一ねぶりさむれば涙のわが足を洗ふ
絶間おく浪はよするをいはがねのいつまでかたき心おるらむ
人はまだ通はぬ濱のまさおぢをわれあとつけてゆくあした哉
あら浪にもてあろばる丶浮海松のそれにも似たる人の宿世か
聲だかに語りあひつる舟と舟あひだ遠くなりて日は落にけり

浪を

荒獅子の其子とられていきどほりくるへる聲かあら涙のまを
み越路の春のやよひの雪おだれそれおもほゆる涙のいろかお
白駒のしろきたてがみ春風にみだる丶おしでなみ寄せかへる
旅の女身をなげしてふゆふべよりかせおみさわぐ七日七夜を
人の世のさかえおとろへよそにして涙は千とせの響おりけり

雲のいろのうす墨いろにおるまゝにいよ〳〵白し沖つしら涙
くづせ〳〵かゝる地球をあら浪よ荒れにあれたつ汝が力もて

家のうしろに筧の水おつ

かしましくさわぎしおらは夢に入りて晝間しづけき水の音哉

折にふれて

ひむがしの空ほがらかにしらめども山近き宿は今日も霧ふる
夕ぐれのをぐらき窓に書とぢてきえせぬふみの光をぞおもふ
小さおる地球のうへを離れかねて泣きみ笑ひみ世をや盡さむ
さるすべり花の盛のおがければはおのさかりをいふ人もなし
おのが身にあらむ限の聲たてゝおけどもひくき虫のおをかお
ひぐらしのおきからしたる聲きけば我身の果も悲しかりけり
禮順の親子のすがた山に入りてあを葉がくれのふだらくの聲
たま〳〵にもりくる日かげ命にて木かけの小草はお咲にけり

さそふらむ風の心はしらねどもさそふがまゝにちる木葉かな

ある夜地獄谷のおくに到る螢の飛ぶを見て

鬼の火の一つ飛び去つて地獄谷たに底もとのやみとなりぬる

花水橋にて

かまくらの若殿ばらが駒なべてゆきかひしけむろの橋朽ちぬ

大磯に物せる竹柏會の人々相つどひける折々に題を探りてよめる百合を

青雪をふみております神の手にとりもたしたる白ゆりのはな

山ゆりの幾千の花を折りあつめあつめし中にひと夜ねてしが

風を

大木そや小たその山の山おろしに千とせの老木空にあゝあり

山家を

わが山の門にかけたる丸本ばしわれより外のひとはわたらず

旅の心を

かすかなる海のひゞきをあとにしていよ〳〵深く入る山路哉

ゆくら〳〵ねぶりもよほす馬の上にみえてはきゆる故里の庭

行燈にかきすさびたるざれがきをふしながらよむ雨の夜半哉

赤ほしの光りまぢかき峯に立ちてふもとに起る雲をみるかな

はたお屋の屋のうへの草はな咲て古きうまや路あふ人もなし

海路送年といふことを

わたつみの涙路を常にゆきかひて舟も老にけり我も老にけり

女を

ひれふして身の罪くゆる少女子の黒髪のうへに蔦の紅葉ちる

さすらひて年ふる里に歸りくれば喜ぶうばの髪しろくなりぬ

ふくるまで糸車ひきて聖書よみてあほりの如き床に入るかな

相聞のこゝろを

おぼろ夜の影にきえゆく君のかげ我身もまのまゝ消よとぞ思ふ

よしや君いづちゆくとも我ばかり君思ふ人はあらじとぞ思ふ

東京にかへらむとしける日

明日よりはむなしき宿にかよふらむかけひの音よおみの響よ

（終）

風急天高猿嘯哀　渚清沙白鳥飛廻　無邊落木蕭蕭下
不盡長江滾滾來　萬里悲秋常作客　百年多病獨登臺
艱難苦恨繁霜鬢　潦倒新停濁酒杯（杜甫）

骨堂に有限を觀ず

天知

艶を衒ふ都の花に背きて、老ひ鶯も聲嗄れん哀れ〳〵の春の半ば、思ふ節あれば唯ひとり、はる〳〵紀の高野に分け登りて奥の院深くさまよい入りぬ。古びに聲ある幾千もとの墳墓に送られて、蓊鬱たる老杉晝おほ暗く蕭颯たる靈籟苔を吹くの處、忘れても酌みやしつらんと歌はれし玉川は、枯れまさる蛇柳に凄みを添ふて心さむけく、ちゝ母のしきりに戀ひしと悲みし故人の古碑を拂ふては、懈怠の罪に愕かされて人知れぬ涙を隱す、往き〳〵て終に陰鬼の愁々と泣くらん骨堂の前に佇めば、幻住の想ひたゞおちす、但見る八角寶形の堂に壘々たる骨やいかに、見れば見やれば何等の怪ぞ、幾百年の鬼氣しきりと膚を襲ふ。

徳川の流れに靡く七十餘州のゼルサレムたる昔えに於て、三千餘万の涙は恒河の水嵩と成りて此一堂に流れ込みけん、執着の露と涙のやる瀨なく、情けに焦れ想ひに死せし幾万の遺骨は、君よ妻よ子よ夫よ、かれ〳〵の聲に君樣まいる生命を刻みつ

、妄執の焔に逆巻く血しほは百年の枯骨に生氣づきて一本〳〵搖ぐが如し、戀に瘦せ戀に晒れながら生〳〵しくも永劫成佛し難く見ゆるは、深き恨みの花の影か悶へ苦しき情けの若木か、煩惱の極めまむ祖師の空擊を情けなしと恨めども、枯華微笑の奥の手見たく、天使とほのめかす大聖の情け深きに心を得たれど、三十年の粹の魂膽まず〳〵聽きたし、まことや白骨の哀れなる、あれぞ『有限』の墳墓にして『無限』を門出せしむる宿りにやあらん、色相の迷ひを嘲りては小町もあはめ〳〵の薄に有限の露を拂ふべく、實相の榮えを觀せしめては五十年の道場に無限眞如の月を悟らしむ。遮莫。寒月にはちすの骸骨を池に曝すを哀れがりては清き蓮華の露彈ぢく聲を忍び、秋に瘦細りしすゝきの招くを見ては春日野の花の姿にあくがれんを思ふは共に情けの常にあらずや。

そもや春の老ひ易き花の褪めやすき、さすが榮枯に世を果敢なみて不束にあはたゞしからぬも、姿の浮世は必ず情けの世なればや、おしき胡蝶の霞に消へゆく姿を見ては、偖もいかなる哀れを知るらん。

夫れ榮枯盛衰は『姿』てふ浮世の極致にして、情け爰に生ひ立ち浮世茲に宿る、仁といひ義といひ忠といひ孝といひ將た亦戀といふ、いづれか之れに由りて力を與えられざらめや、國破れし舊き山河の姿には漫ろ花にも涙を濺ぎ、城春にして草木の荒るゝに別れを恨みて空しく鳥にも心を驚かすは、杜子が情けの優なるに非ずや、野花一輪の姿もなほ摘むに餘るライン河の草の露、舊都荒原の枯草もなほ憤るに足るシベル灣の霧の雨は、バイロンが戀の情けの悶えに非ずや。さは言へ榮枯や盛衰や、『無限』の燈火に照らしては野邊に果敢なき陽炎にも似たるかな、共に之れ生死の一濤を及亘る漣波の高低に過ぐべきかわ。生死もげにや如露如電、メサセラ千歳の長きを言ひ彭祖六百年の壽きを誇れども、共に『無限』の火花のみ、不老不死の仙丹を捜りて西王母の桃をほしがり、反魂丹に憂き身やつして棚祭りに思ひを遣る、あれぞ有限に滿足し難く愛惜に驅られて無限を捜る人間の常なりとす。シラが棺中に自ら安坐を得たりとしアラリカスが川底に遺骨を隱さしめ、キ二の僞塚に果敢なきを頼み諏訪の湖に吾れを止めしと迷ひし孟德と信玄がわざくれは、之れぞ有限に

飽かぬ由ありて、有限の世界に無限を強ひたる人情の常なりとす。

人は到底『姿』の兒あらぬかわ、『無形』といふ搖籃には終生を滿足し難く『姿』てふ母の懷ろを探ねて只管安眠せんあとを望む、ゴッドや大日やシェホワや眞如や、誰か此『無形』の絶巨想をして安眠せしむるの懷ろたりしぞ、人世の悲慘に於て、永遠の命に於て、哲理に飽かぬ心に於て、耶や釋や豫言者や達摩や、共に此安心の懷ろを貸したるの姿に過ぎず、あれや人の偶像を好む所にして又執着する所にあらずや、豈獨りカーラエルの崇拜論を聽くを待たんや。一片の木のはし一塊の石きれ、共に戀人の心を打込み得て執着の面影あからずやわ、花に悲み月にあくがるゝは唯物の癖に非ずして無限の魂を戀ふればあり、郊外の美景に言ふ可らざる懷ひを注ぎてTh inknot any severing of onr loves! と叫びたるものは天魂の光に無限を見たるあり。姿に姿の致あり偶像にも偶像の妙あからずや、肉慾にも肉慾の極致あればや、あれが爲めに一身を捨てゝ吝まざるの人類あるに非ずや、

骨よ骨よ、汝は勢力ある涙の偶像あり、ろも生の姿か死の姿か、將た又生死の姿あるか、あれぞ人世の姿あるらん、死は『有限』の大恐懼にして骨は『有限』の大嘲笑あらずや。

骨よ、汝ありて涙を知り戀を知り、有限を知り無限を知る、さては汝は詩神の旅宿あり、更に惡魔の旅宿あり、迷や悟や共に汝が鬼の所爲あらずや、乾坤夫れ汝の一呑に任す、一生之れ汝の一吐に任す、汝に潜む百鬼羅刹皆出で來れ、滿山の花下に打集へて汝等が演ずるまに〳〵自在の劇を觀ん、吾れは汝等に靈魂の『無限』を喰はしめんか。

無限よ無限よ、そもImmortalityの文字あそおかしからぬものはおし、無限は無限の靈魂にあそ面白けれ、限りあるの情けには限りあるの榮枯の姿ぞゆかしきものぞ、あはれ昔しの幼き時を回想しつ端おく靈魂の無限を悟りしといふウォルヅヲースのすさびは聽けど、彼れも有限にうつゝをぬかして無限の境に逍遙ひしとかや、おかしきは有限ゆ、哀れは榮枯の姿ぞ、いでや榮枯有無の限姿をもちて、飽までゆかしき有無の限境に旅しつゝ、そぼ降る涙の雨にぬればや、いざさらは我れ人命の源な

る人情の海に悼さしてThankの笠に眞の雨を受けんとぞ思ふ、

Thanks to its tenderness, its joys, and fears,
To me meanest flower that blows can give
Thoghts that do often lie too deep for tears.
(Wordsworth)

げに名なき野の草花も斯くて涙を濺ぐに餘りあらずや、有限の骨、有限の骨、あゝ吾が白骨の上に歌はるゝを願はざるはそも何人か、骨に魂喚ぶ茶毘一縷の煙り、あゝ人生の間一髪、有限去て雲にや消へん、無限來つて霞にや散るらん、消えんと知れど爰に骨あり、散るらんと思へど爰に骨あり、骨よそも、誰かおん身を女と喚び男と唱へそめけん、誰かおん身を有限と悲み姿と憐みけん、浮世三界、眺め去り眺め來れば、眞相歴々此一莖の骨にや籠らん。

靈機不レ墮二有無一功　見色聞聲豈用レ聾
昨夜金烏飛ヲ入レ海　曉天依レ舊一輪紅ナリ

斯く喝破し來れば、有や無や共に時限に長短あるべからず、有限は必竟無限の致なるかな、有中に無あり無中に有あり、長中に短あり短中に長あり、而して人中に物あり物中に人あり、一片の枯葉五十年の命運を悟るに足らざらんや、一莖の白骨何ぞ浮世の眞相を觀るに難からんや、大騒中の閑味、悲涙中の樂味は何者か味ふを得ざるぞ、劇動中の至靜、塵世中の天籟は何者か無しと言ふぞ、之れを悟り之れを味ふの人に非ずんば到底詩趣を談るべからず。稚境の悲喜と苦樂や、小見地の褒貶と毀譽や、共に中天に漂ふ雲色のさま〳〵あるが如きか、黑雲群がり白雲集ふも多くは風の吹き廻しに由るのみ、黑白の往來共に一輪の紅日に是非あらんや、眞理の光りは一塵をも汚すを得ず、舊に依て曉天常に明きを見ん、さばれ悲喜や苦樂や毀譽や褒貶や、萬聲いづれか眞理の一音妙語あらずとせん、己れに若し金烏飛んで心海に入るものあらば「空を飛びゆく鳥を見ても我れに眞理を敎ふらん」と古聖の叫びを慕ふを得ん、迦陵嚬伽を靈境にのみ探り、天女の妙音を天外にのみ聽かんとするはいづれの鄕のたはれ男ぞや、吾れは爾ぢたはれ男を愍れむ、非情の白骨を憐むと共

に、爾ぢたはれ男の白骨を愍れむ、否〳〵、更に有情の白骨を愍れむ、爭奪の衢に鼠の肝を煎り蚊の臂を聳やかし「已れ」を鬪はして輕喜輕怒の人と成り、偏へに名利に驅られ毀譽に役せらるゝの有情白骨を悲しむ。爾ぢ有情の白骨よ、動くが故に、談るが故に、聽き得るが故に、食ひ得るが故に、爾ぢ何等の權理かある、必竟非情といひ有情といふも共に時間と空間との厄介物たるのみ、顯を叩くに依て爾ぢの智能を知るに非す、腕を振廻すに依て爾ちの强きを知るに非ず目の水を量りて悲みの度を知るに非ず、聲の響きを以て情けの深さを聽くに非ず、將た又動くに依て活きたる生命あると思はざるなり、僞君よ僞善よ吸血奴よ暗窟鬼よ貪利者よ賣舌漢よ、爾ぢの軟骨を拔き去りて惡鳥に喰はしめよ、爾ぢが腐腸を拔き出して天魔に投げ打てよ、爾ぢの靈魂は浮世の塵芥を積み纍ねて日々に重き惡風習と臭き肥料とを生命の首に堆かめゆくを知らずや、爾ぢ無情の白骨を嘲るとも爾ぢは之れに肉と血とを塗らしたる白骨たるを知らざるや。

涙といふ情けの水はいかなる女神の浴みせし溢水にやあらん、浮世に若し涙といふ

ものなくんば、人は到底時間と空間とに繫がるゝ死生の虜たる白骨のみ、拭へども拭へども拭ひ盡きせぬは眞葛が原にさわぐ習ひなり、靈魂の涙なくんば、靈魂の愛なくんば、吾れも是れ枯瘦醜怪の白骨たらんのみ、人生の戀しき靈魂の戀しき人の戀しき、偖も有限の戀しきやなぞ。時間と空間爾ぢは無限なり、爾ぢは無限といふ斷頭臺を宇宙に羅列して有限を亡ぼさんとはするなり、時間といふ餓鬼は紅顏の血と肉とを日々に吸耗して白骨に化せしめんとし、空間といふ妖魔は戀人の骨と皮とを時々に壓潰して墳墓の暗穴に移らしめんとわす、爾ぢは無殘なる哲學者なり、無慈悲なる宗教家なり、爾ぢに遇はゞ温容の人間も此白骨と何ぞ異ならん、されど見よ情けの水は滾々として爾ぢが汲み盡す所にあらず、天泉の流れ〳〵て人生を浸すの池は、能く此水をたゞへて白骨を浴みせしめ、枯骨能く肉づき死骨能く舞ふに至るを知るや、骨は舞ふの五十年間に興味深く、食は咽喉三寸の間に旨味あり、猥りに五十年の有限を輕んじて是れを嘲らんとする者は、尙ほ三寸を量りて食の味ひを定めんとするの人たらんのみ、無限を曉らんとせば何ぞ『有限の生命』を觀せざるぞ

、されば終日眼前に變化する万境に謳られ徒らに『己れ』の痴夢を作りて四大因圓の臭骨枯髏に安着し笑ふに堪へたる有限界の狂狗となりてんや。

高野山峯の嵐のはげしさに
　　おまば落すも後の世のため　熊坂長範

彼れ熊坂の無情おゝろも此骨堂に參來ては、さすがに齒を折りて菩提心を起せしとかや。詩寫たる骨堂に對して哀れのきわみ悲しさの限りを默せば、深山の聲幽かに老杉の梢にすり往くを聽くのみ。

夏の嵐山

生田葵山

北の國の人にまれ、南の國の人にまれ、あの名所舊跡に富むで居る西の都を巡禮したならば、街から西へ二里の處にある嵐山を見舞はずには置けまいと自分は思ふ、嵐山の景色の美しさ、とんと優い女神が半ば肌を顯しながら現心に夢を續けて居ると云ふ樣な趣の景色で、名高い花の吉野山や、梅の月ヶ瀬の里と並び稱へられて少しも見劣のせぬ計りか、一度此山の景色に接した人は、餘りと優い巧み、穩かな趣に打たれて、實の處一生涯此山懷に抱かれて眠りたい――あらぬ迄も此山の麓に庵を結むであらうとも、一生を送つて見度いと思ふ念が起る、而かも河幅の廣いあだらかな大堰川は、恰かも天津御空から湧て來たかと思はるゝ美しい水を湛えて、巖に激し、淵を造りながら恁うゆつたりとして、渡月橋下を潛り筏に囁きながら南へ南へと山の裾を繞て流るゝ狀態、只もう吾人の計り難き自然の廣大を感じて、沈默するより外はないのである」、自分は一歳の夏其處を訪問うた事がある、決して物數

寄にも花は春の振袖の化粧凝して乙女心にあつて都の人を招く景色を外にしたのではない、龍頭鷁首の舟に乗らん迄も、嘗て此山の下に花の香に醉ふて乙女の戀を思ふた事もあるのであるが、其時不圖世間は花は嵐山の春をのみ云ふが、此の美しい穩かな山水、青葉若葉の陰に小鳥の囀づる夏は嗟かしであらうと思ふたが、百餘里の山河遙て此行を爲さしめた所以である」、京の町端の停車場——家康が建築したと云ふ二條城の後にある停車場に出たのが晝過ぎて嵯峨へ着いたのは漸と午後の一時であつた、何處とて變らぬ喧いプラットホームが此處は至て靜で、一目に其と此村の穩かな事が知れる、一所に降りた人數は廿人足らずもあつたであらふが、嵐山の景色を譽稱へ樣と思つて來たのは自分獨りらしかつた、後は此村の人達が京の街へ買物に往つた歸途と、此村へ賣買の爲め入込む商人の群のみであつた、

停車場を出ると、太陽はもう容捨なく、お前が此村へ入込むで來るのを待設けて居たと云ふ鹽梅しきに、烈しく照り付けて、翳して居る傘も何もあつたものでなかつた、四邊は新に道普請したものらしく小砂利が一面に敷詰めてあつ

た、其が熱い日の光に燒けて、歩く度毎に發する物音、耳元に惡魔が嘲笑ふて居る樣な氣がして、身には殆んど室の中で蒸されて居る樣な心地がした、別段に客を呼ぶ樣な氣勢もなく、其の家の横に餘り美しからぬ伸か三四臺幷むで居たが、其すら曳手は見えない、大方何處か涼しい木陰の下に晝寐の夢を貪つて居る事であらふと自分は思つた、

十二三の男の子が蜻蛉の釣竿を持つて、つい眼の前の桑畑の中から走て出たかと思ふと、はた〳〵と忙しなう自分の前を通り過ぎて、ついと前方の横筋へそれて、仕舞と、拾六七の色の黑い田舍風をした乙女が手に草花を弄りながら大きい聲で歌を唱ひながら片側の納屋らしい大きい建物の中から出て來たが、自分の姿を見ると、何と思ふたものか、忙てゝ馳込むで、天井迄届く樣な大樽の後から半ば顏を出して見送つて居る、戸々の家はすつと奥迄見透しの大抵明放しで、いぎたない晝寐の姿がよく見える、黑い毛、むくぢやらの太い足が可愛い蠅除けの蚊帳の側に大の字なりにあつて居るかと思へば、うら若い女房が正體もなう髮を乱しながら俯向きて腹這

つて居るのも見える、が感心あのは老人達で、居睡をしながらも糸車を曳いて居るのが其處此處にも見えた、

這麼中を、自分は、未だ勞れあい足を運ばして、両側立の町并――櫛の齒の欠けた樣に建ち並むで居る町を、渡月橋の方へと志した、自分の前を歩むで行くのは、六十餘りの老爺で、麻の股曳に麻の筒袖を着て、澁色の日傘を翳しながら牛の歩む樣にのろ〳〵と念佛を唱へあがら歩いて行く、後から來るのは　今瀧車から降りた商人の一群で、互に見知つた顏と見えて聲高に話しあがらやつて來る、が其も道の二三町で、自分が渡月橋の方に近づくにつれて、何時の間に、か念佛の老爺も姿が見えずあり、後の人聲も、横町へと外れたものであろふ、聞えずあつて仕舞ふて、嵯峨の大通ともいふ可き清涼寺の前通へ出た時は、廣い街道に人の影を落して居るのは自分一人であつた、森閑として、物の氣配にも喧ましい市の聲を離れて、尊い神の御手に拵へた幽趣あ自然の景色に近づくのが知れた、家はありあがら両側の松並木が鬱然と茂り合ふて居て、清い風が、とんと今にも天の上から美い羽衣を降す樣に自然

の琴を奏づつて居た、

氣が何となう妙に靜にあつて來て、種々あ事が思ひ浮べられる、まるで今にも樂い事柄が、眼の前の地下のから自分の名を呼むで踊り出す樣に感せられ、嬉しさが胸に滿ちて、堪えられあかつた、嘗て一度は馴染むだ大堰川の水、奈何あに美い姿をして自分に見せるであらふ、兒が淵の水の色、音無ケ瀧の點滴、去歳の友達の自分を奈何な顏をして迎へるであらふと歩む目には、限りのあい美い幻影か浮び上る

這麼思をしあがら、足を早めて行くと、どつ〳〵とつ――と何處ともあしに、緩かあ調子の中にも太い聲を立てゝ居る物音が耳に這入つて來た、聽いた身は直ぐ何の音と知つた、限りのあい滿足と、嬉しさとが胸に湧き上つて來ると妙あもので、冷い風が液の下に戰ぐ樣に思はれる、定家鄕の小倉山を後に控えた天龍寺の門前をも過きて、清い松並木の下を通つて行くと、軈て懷(まくろよ)い渡月橋は、質朴あ風をして、恁う長う何處迄も何處迄も向方の岸へ手を届かさうとして居る樣あ趣を見せて、自分

の眼に這入て來た、大井川の流れも、流れ出した樣に美しい半身を見せた、

馳け出したと云ふ譯でもあしに、急いで橋の上に立つた、いやもう、何時見ても變らぬ優い景色、崇高な富士の趣はあくとも、鳥海　立山の莊嚴はあくとも、趣は却つて其れよりも深い自然の巧！、蜿蜒と延て、あだらかに　次第に彼方へと高う、松で包まれた奥山へと續く樣、春は彌生の花の衣を脱いで、今盛夏の欝然とした青葉に身を任して居る風情、只清い美い女神が、現心に夢を見ながら片手を延ばして、爰處に遊ぶ者の胸を搔き抱き柔い接吻を與へると思ふ外何の想も浮ばあい、せせらぎや丹波の奥から萩の下露の一滴〳〵を集めて此處へと落る保津川は、前方の山角に蔽はれて、名を桂川とも、大井川とも變へた後身の流は、俄に眼の前の地から湧き上る樣な姿を見せあがら、綠陰の中を、筏の懸てある下を、恁う緩つたりと流れて來て、橋の少し河上から、俄に早く、水同士互に、競ひ合ふ見えに流れ出して、ついと橋の下を潛り逸早く、橋下に顯はれ、川下半町計りの所に、横に長う手を擴げて居る堰をとんと騎馬武者が、功名を爭ふ樣に、勢い猛に白い水沫を立てあがら乘超

えて、別離をも惜まず、後から押されく〳〵あがら流れて行く、橋の北詰の西に寄つた方は、誰も知つて居る嵯峨の三軒茶屋――、三層に建築せられた旅店が三軒、つい足下の桂川に影を落して、眞向ひの嵐山と拮抗して居る樣な顏をしあがら、聳えて居る、春あれは此處等邊はもう、簀茶屋が數知れぬ程軒を並へて、赤毛布の小座敷には客の幾人、三弦や笛の音で騷がしいあれど、今は其も見られず、此處の花見時の名物の一に數へらるゝ畑のお嫗、――あの妙の島田髷を結ふて長い煙管を腰に狹み變な訛聲の言葉遣ひで、菓子を押賣する嫗の姿も見えず、只もう寂閑として汀に繫いである家形船が三四艘、だぶり〳〵と打寄せる浪に動いて居る斗てある、

東に寄た大橋の北畔は、直ぐ大秦、西の京と經て、京の街に續く京街道で、熱い日が勢能く小礫道を照り付けて居る片側は、材木の問屋やら、薪店やら、茶屋らしい家やら、其から、眼鏡を掛けた老婆樣が苧を紡みあがら商賣をして居るらしい荒物店やら、町並を造つて、前方へと續いて居る、水に沿ふた方には、無論筏が數知れぬ程懸つて居て、汀には、高慢らしい松が、枝を曲らしあがら水の面に手を屈かして居

る、風が靜かに渡つて枝を動かすと、葉がばら〳〵と零れる、隙さうな顏をしながら糸を垂れて居る人は見えなかつたが印袢天を着た若い男が、樹影に晝寐して居るのが能く眼に這入つた、

あゝ美い自然の景色！、都を僅か二里離れた斗りで、恁うした優い景色が眼に入るかと、思ふと自分は人知れず京都に住む人を羨む念を禁じ得なかつた、と思ふも何だか此景色は、京都の人情風俗が限り知られない自然の手に消化せられて、恁うして此處に自然の景色と變じて現はれたものであるまいかと思はれた、あゝ然うだ、其に違ひない、此景色が、崇高でもなく、嶮峻でもないのは、云はゞ京都の民が沈鬱でなくて、寧ろ來る人を嬉ばせる快活な氣風を示して居るのである、眼に入る水が寛つたりと流れるのは京都の民が生存競爭の烈い現世に立ちながら、何處となく閑雅で優嫻な趣を見せて居るのであると思はれた、

恁う思ふと、何だか妙に種々の幻想が胸に湧き上つて來た、今眼に入る嵐山の景色の中に、其處此處より集まつて來た精靈が動く樣に感しられた其から、あの又京の街て

眼を瞑いた人は、屹度大空高く消えて行く靈魂を此處に遊ばせて、此美しい自然の景色に一枝一片の趣を添へるであらふと感じられた、氣の行爲か、凝と眺めて居ると、幽靜な山水は、自分の此解釋と感じを滿足に受けたらしう、穩な眼を擧げて自分を眺める樣に思はれる、

這麼事を思ふて居る眼の前を質朴な村乙女が三四人、何處へ行くのか傘をも翳さず、背に恰好のよい草苅籠を背負ひ、小聲に鄙歌を唱ひながら自分の前を通つて、橋の前方へとずん〳〵渡つて行く、自分がヒョコリト欄下に靠り懸つて居るのを見て、珍らしさうに、穩かな眼を輝かして凝視たが、互に眼を見合し、何事をか囁いて、薄ひ微笑を頰に顯はしたが、其れ限りで回顧（ふりかへ）らうとはしなかつた、熱い日影が其後から、何の事はない網を投げた樣に、浴せ懸けた、

自分は不圖思ひ起して、何時迄一つ所に立て居るよりは向岸の樹蔭に入つたならば、今よりは一層の涼しさも得らるべく、景色の變つた趣も稱せられるであらふと乙女が橋を渡り終へた頃足を擧げた、

一段二段と別に急ぐともなく欄干を敲きながら歩む、流は青う澄むで橋の下を打て行く美い水――自分の瓜を暫時く浸して洗ふたならば、奈何なに白うなるであらふと思ふた、此水の點滴で溶いた口紅は奈何に艶やかに乙女の唇に匂ふであらふと思はれた、彼方を見此方を眺め、仕切りなしに瞳を動かして進むと、先刻迄は向方の岩鼻に隠れて仕切られた樣な川面は次第に打開けて來て、初めは家形船が三四艘容られる淵溜がある樣に見えたが、猶々進むに連れて奥の奥と、一曲り曲り屈ねつた流れの狀態も見ゆれば、牛の腹這うた樣な岩が河に突き出でるのも眼に這入て來る渡月橋の大橋とも云ふべき大きい方の橋を渡つて中の島とも云へる島、――あの背の低い小松や、丸う蹲踞んで居る茶の樹や、椿の樹やら、其から夏の呼吸の籠もつて居る草花と、美う植付けられてる小島をも過ぎ少さい橋に懸る、此橋の下は、今迄の樣な、自然――野放しの流れでなく云はゞ人の手に懷けた運河と云ふ樣な風である白帆の懸らぬ小舟が　幾艘となく汀に繫いであつて、荷物が半ば乘せられてあるのをも見受けられた、

橋の南には品のよい建方をした、云はゞ此の自然の風致を汚さぬい樣な巧緻を盡した茶店が二三軒並んで居て、氣の善ささうな女房さんが、眼むさうな眼を磨すりながら、自分の姿を見て、氣の無い聲でお掛なさいませと呼んだ、赤襷を掛けた年頃の乙女が、二三人忙しさうに立動らいて居るのは、大方自分と同じ樣な思ひを持て此山水を見舞ふた客があるのであらふと思ふた、

其處の前をも通り過ぎ足を早めて、誰も行くあの大悲閣へと通ずる危なそうな岨道――樹の根や岩角が所々出ていて、ともすれば足を捕らうとする岨道を迎て行く成、足下は直ぐ流で、此處にも筏が數知れぬ程懸つて居る亭々たる杉の樹や、嫋優な樅の樹や、老兵者の樣な松の樹やらが、我勝にと、枝、枝と延し合ふて、葉を茂り合すので下道は鬱然として暗ひ、其間に仇し心の若楓が、羞恥を含むだ樣な姿を繕ひながら、言寄らば默頭かんと云はん斗りに、水の面に枝を垂らして居る、物の音にも夏といふ事が直ぐ知れる、名の知れぬい小鳥が、潔い聲を振り立てゝ、樹から樹へ飛び移りながら囀ると奥の何處かでも、まるで其に合奏する樣な小鳥の歌が聞へる、

其聲が、奥の奥の何處ともなしに消えて行くかと思ふと、蚍が低へ迂鳴りを立てて、頻く頬の邊りを廻る、手を擧けて其を追ひ拂うと、少し香いでも氣が遠くなる樹の香――、靜かな深い森で無くては香へぬ夏の烈い樹の香が、其は〳〵鼻を拖き取る程薫つて來る、水氣に濕むだ草の香も」、自分は何時の間にか立佇まつて居た、不圖氣が付いて山に面いた左側の方を見ると、何だか昔の榮華を語つて、居る樣な鳥居が立つて居て、其處から細い小道――末は猪の洞穴へでも通ずるのであらふと思はるゝ細い小道が付いて居て、其が薄暗い谿谷に消えて居る其少し右の方に見上ぐれば見上ぐる程高く、嘗ては巍々と水を落したと思はるゝ、瀧の跡がある、稜々たる巖角の、もし頂上から一歩誤つて轉げたなら、其儘五躰は微塵に碎けるであろふに、音無の瀧よ……と思ふと何だか懷かしい思が湧いて來て、中古の詩人や歌人が、此下を徘徊ふて幽邃な感情や、美い句を得やうとした狀態が彷彿として浮むで來る、つ程能く見ると、岩が濕ふて居て頂上から落る水が、潤む樣に巖から巖へと傳ふて末の岩で、點滴〳〵ととんとあの大空に輝ひて居る星の粟の樣、美輝大にういて古か

澄むで居るかと思はるゝ下の泉に落ちる、下の泉は其を受けて思ふさま靜かな水面に輪を畫かせながら、一ばし漂す樣に沈ませて、其れから改めて浮ませて、せゝらぎや清う流れて、前の大井川に流れて居る、

自分は其から前方へ進むで行かうとは思はなんだ、傘も帽も投げ出して、此美い泉の側の柔い草を褥にして横になつた、いやもう靜かな事で、自分はとんと、此自然の山懷に抱かれて仕舞ふて、此穩な自然に化せられて仕舞ふと樣に感せられた涼しい風が何處ともなしに、そよ〳〵と吹いて來て、可愛若葉の枝を動かし、腰の低へ青草に囁き其からずつと一面に擴がり、末は何處ともなしに消えて行く其優しさてない其涼しさてない、何だか此風は太古から今迄別に取殘されてあつた物の樣に思はれた、然うだ其に違ひない、今初めて此汚穢い現世に接觸る涼しい風だと思ふと、何だか今現在此山の奥には、美い女神が女の童の天使と遊樂むで居られて、天使の一人が黄金の團扇を上げて煽いだ、其風が洩れて此處迄傳はつて來たのであると思はれた、氣の行爲で何處からともなしに尊い音樂が洩れて來る樣な氣がしてならなかつた、

之が夏であらふかと、不圖思が外れて思ひ初めた、之がゐの暑い肉も骨も鎔けて仕舞ふと云ふ夏の最中であらふかと繰回した、何としても夏と思へぬので、で自分は思ふた、いくら暑い夏も幽邃な自然の前には頭を下げて何處いか消えて仕舞ふのであらふと思ふた、其から又這麼事も思ひ浮ばれた、そらもう此嵐山陸山水は、京都の民俗の氣風が、自然を司つてる神の攝理の下に描き出されたものなれど、此山の麓――嵯峨村に住むで居る人も、京都の街の人の樣に、死んでからの靈魂は皆此山に集まる事であらうと思はれた、住居が近い丈に夜眠りに就てからの魂も此山へ集まる事であらうと思はるゝ、屹度然うだ村人が夜見る穩かな夢は、悉皆此山へ集まつて其美い夢は此山の精靈が授けるのであらふと思はれる、

川向からは、遠く鍛治屋の槌の音が、響ひて來た、と勇ましい鷄の聲も聞える、小鳥は仕切なしに鈴を振る樣に囀つて風に誘はるゝ、木の葉は絶えず流の上に落ちる、奥の方の道に何だか物音がしたかと思ふと、人の足言と知れた、眼を上げて見ると、橋の上で遭遇ふた村乙女が連立つて歸て來たのである、背負た籠には、木葉や

枯枝が無雜作に充めてある、自分が猶此處に一人ポツリと止まつて居るので彼等は少なからず心を惱ました樣子で、不思議な眼を輝したが、三歩斗り行た處で一度回顧て、其儘松間隱れになつて仕舞た、小鳥は矢張絶間なく唱ふて、居る不意に頭の上の山で、淋い鐘が鳴り出した、一ッ二ッ三――止んで仕舞た大方若へ娘達が、虚空藏さんに緣結びのお願を懸けて居るのであらうと思ふた、同時に前方の渡月橋の上へ繪日傘を翳した京の舞子が、二三人顯はれたが、其周圍を取捲いて、いやもう他愛もなう醉ふた若い男が四五人此方へ來るのが眼に這入た、

何だか自分は厭な感じが起て來てならなかつた、折角今迄得た幽情を今行る一行の爲に打消される樣に思はれたのである、手早く傘を取り、帽を冠つて、突と立上り、其處から二町の大悲閣へ上らうかとも思つたなれど其すら彼等の爲に妨げられる樣に想はれたので、以前來た道いと歸途についた、あの茶店の前迄來て舞子の一行に遭遇たが、遠見で見た程に打騷ぐ樣でもなかつた、

* * *

大堰川の水は洋々として今も流れて居るであらう、嵐山の幽邃な景色は、今も猶、此末長へに備はつて居て、訪問るゝ旅客に、慰籍と詩趣を與へるであらう、此行大悲閣の閑靜を味はず、温泉場の岩鼻に立つて、保津川の景色、飽かおんだは、頗る殘念であるが、花の衣を着飾つた嵐山おらばいざ、自分が見た樣お靜お嵐山は恐らくは見た人は少からふと自分は今も誇つて居る

(煙草倶樂部轉載)

初霞

其一　文反古

太田玉茗

うたて我身のわれおから、
あお淺ましき心かお。
戀しき君が失せしより、
おすおと繁き世の中に、
心まぎれて君をしも、
我はわすれて居たりけり。
ゆるせや君が玉章を、
反古のなかよりはからずも、
今日は見いでしかおしさを、
とりあつめたる我がむねの、

思ひみだれてきれぎれに、
裂くるばかりぞあはれ君。

其二　うたゝね

うき世のわざに身もつかれ、
あゝろもつかれうと〳〵と、
しばしまどろむうたゝねに。
うれしき聲はきあゆあり、
戀しき君がおもかげの、
打笑むさまは花に似て、
打笑むさまは見ゆるなり。
ものいふ聲はうぐひすに、
似たる君あそたふとけれ、
あはれ少女よいつまでも、
かくてあれかし空蟬の、
うき世の事は知らずして。

其三　亡弟送りて

臨終の床のかたはらに、
とり〳〵君をいたはれば、
あゝ有りがたと幾度か、
涙ぐみがらにうあづきぬ。
哀れや今日は父母も、
知るも知らぬも兄弟も、
つどひ〳〵て諸共に、
君をぞ野邊に送り行く。
送るに物はかざらねど、
たらはぬあともあかりけり、

よのつねよりはまさらねど、
劣れる節もおかりけり。
君世にありて今おゝに、
送るさまをし見てあらば、
ああ有難たとあはれまた、
なみだおがらにうおつかむ。

其四　稚きものよ

稚きものよ稚子よ、
いましが兄はあはれ今、
ひつぎのうちに眠るおり、
出入る息は絶え果てゝ。
稚きものよ稚子よ、
ひつぎ出づれば兄上の、

姿に似たる人にだも
又遇ふおとぞおかるらむ。
をさおき者よ汝はしも、
おどすやゝと打眠る、
野邊の送りのかねの音も、
經よむ聲もきおゆるを。
あはれや軈て稚子の、
兄のひつぎは出でにけり、
兄のひつぎは出でぬれど、
心地よげにぞ打眠る。

其五　闇の小川

更け行く夜半に唯ひとり、
おぼつかなくも烏羽玉の、

野邊の闇路を我れくれば、
小川の水のさら〳〵と、
流るゝ音の我が耳に、
聞えたるあそうれしけれ。
あはれ小川よ闇の夜を、
獨りありきて獨り行く、
我に向ひてやさしくも、
我は語るか汝もまた、
野邊の闇路を只ひとり、
おぼつかなくも流れつゝ。

其六　初夢

年の始の今宵あろ、
うれしき夢を見むとてや、

あはれ少女よ君はしも、
とをの眠りのあがき夜の、
歌を枕にすや〳〵と、
心地よげにぞ眠るらむ。
誰に逢はむと君はしも、
嬉しきゆめを思ひ寐に、
思ひつゝけてねむるらむ。
哀れとおもへ夢にだに、
君に逢はむと今宵あそ、
かねても我はおもへるを。

想海漫渉

孤蝶

聞道く大河ナイルの沿岸沃野數百里、夏時河水氾濫し渺然たる其流勢當る可らずと雖も、埃及の平野歳々之に因りて其土を新にし、其土の豊饒は往古最始の歴史的國民を作るに因りたりしと。惟みるに彼の天才の迸發する所蓋し此の如き者あからんか、嗚呼何者の痴狂ぞ此横溢を恐れて、脆弱の堤塘を築き俊才の激流を祖碍せむとするの徒勞を肯てする者ぞ。甚しいかな、彼の凡俗策士の術計の妄なるや、彼等は徒らに冲天の鷙鳥が強翼を制せんと欲して蒼空に網羅を張らむとする者か、滔たる陋俗の所爲是此を繩墨の徒の偏見とあす。偉大の國民は偉大の想を要す、然り、是れ大に眞理なり、然りと雖も偉大の人、偉大の想は焉んぞ彼の偏見の徒が欲する如く空理の模型より鑄造し得可き者あらむや、いかんぞ淡たる繩墨を以て規ずるを得可き者あらむや、思ひ見よ、彼の才華の灼爛たる恰も朝暾の櫻花に映ずるが如く、壯烈なる彼の海洋の狂濤の如く、人皆己を忘れて只美是れ追ひ、想是れ發せむとする

の氣運は、彼の西歐十五世紀の智力興隆に非ずや。羅馬の文物暗中に沈むで千餘年、而も尚地底の水脈の如く、一貫せる文化の大法は彼の活毅勇健なるチユートン種族を冥々裡に薫化し來りて、あゝに始めて其の潰端を見出すや、狂瀾山を動かし怒濤陸を漂すが如く舊想空しく破れて盡く新潮流の洗ふ所となり、人心盡く一大革新を經たり、實に此の時や西歐民族の永夜の夢を攪破したるの曉鐘にして輝々たる白日は俄然彼等の眼前に現れ來りぬ、此の朝の風光は如何に彼等に美なりしか、如何に彼等は此の美麗なる宇宙に驚嘆せしか。あゝ彼等は實に此の美に醉ひぬ。彼等は全く自己を捨てゝ此の美を攫取せむとて突進せり。嗚呼の此の如き時に當りて人誰か乾燥區々たる道義を顧みるの隙あらむや。無味なる腐舊の形骸に戀々たる者あらむや。爰に於てか此新思想は、電光の如き剛俠の詩人マーロー、万想を容れて餘りある大海の澎湃たるが如きセキスピアー等の奔蕩豪快の筆に由りて此新世界に迅雷の如く轟きぬ。此破天荒の時代に於ける人才の溢るゝ所、區々たる小節に關らず、屑々たる理法に制せられず、放逸、飄逸、世外に超然たる者あり。請ふ見よ、大盜バ

ーバラよりも剛悪ありとキリストを叱し、モーゼを魔術者ありと罵るマーローが大膽や驚く可くと、

Base Fortune, now I see, that in thy wheel
There is a point, to which when men aspire,
They tumble headlong down: that point I touched,
And seeing there was no place to mount up higher,
Why should I grieve at my declining fall?—
Farewell, fair queen; weep not for Mortimer,
That scorns the world, and, as a traveller,
Goes to discover countries yet unknown.

と叫ぶ彼が意氣や壯ありと云ふ可し。

沙翁の鬱勃たる想は滾々たる泉の如く、天籟筆端に激發して、光焰万丈の勢、彼の狂公子ハムレットに托して、

O God!
God!
How weary stale, flat and unprofitable
Seem to me all the uses of this world!
Fie ou't! Ah fie! 'tis an unweeded garden,
That grows to seed; things rank gross in nature
Possess it merely.

と叱咤するの剛腕、痛烈あり。嗚呼彼等は此の如く一躍直ちに身を造化の懷に投じ、其氣魄飛揚して天を衝かむとするの慨あり。誰か此の間坦々たる道義屑々たる理法の規矩を用ゆるを得むや。此の如くにして、英國民心の基礎定まり、此の如くにして剛健のアングロサキソン民族の素養はありぬ、知る可し、偉大の想は天才の自由に練成せざる可らざる事を。責む可きかな、古來彼の繩墨の徒のなす所や。見よ、佛國革命を、十万の膏血空しく涸れて百万の心靈自由を得ず、王位徒らに鮮血の

漂はす所となる、之れ豈淺見の徒が、滔たる新文化の潮流を止めむとして反て之を激成せしめしに起因するなからむや。其政は專制、其教は頑執、改革者の聲は善く國民の耳底に落ちて革新の期既に熟するも彼等は毫も之を顧みず、朽腐の材を將て此の狂瀾と爭はむとす、宜なる哉彼等の此の奔流の下に碎破せらるゝや、あゝ彼等の僻見は彼等の自身を害せしのみには非ざりき、彼の新改革の洪水や此が爲に激して、有用の材をも合せて蕩盡するに至りぬ、豈痛嘆に堪へざらむや。

彼の英國の偉士カーライルをして僞信の時代僞善の世と憤慨せしめし拾八世紀の潮流は、沈み沈みて人心依る處なく、平々坦々眠れるが如く人は皆舊形式に安じて蠢々たるの時、毅然として腐屑の準繩を破り大に歐洲の文野に獅子吼をなす者あり。一をアルヱ、ド、ボルテールと云ひ。他をヨハン、ウオルフガング、ゲーテとす。佛の健兒は其國狀に激する深く、痛憤措く能はず、諷罵口を衝て出で、烈日の草木を焦すが如しと雖も、尙一道の氣魄優に憂世の慨を示す者あり、其の「宇宙の組織」に於て神の存在を論ずるや摯實、英國の社會を論じて其の精粹を認るや剴切、カ

ラ及びシルベンの事を論じて弱者の爲に氣炎を吐くや、至誠なりと云ふ可し。しかも徒らに凡俗の攻擊の衝に當りて國を逐はるゝ數次、今も尙惡魔と罵られ、瀆神者と呼ばるゝ彼が非運實に憐む可き者あり。彼も人なり焉んぞ欠點なからむ、然れども彼の偏狹の徒が唱ふる如く、有害無益の兇夫には非じ。夫れ人の情溢れ氣激するの時誰か多少の狂氣に近きものなからむや。彼狂せりと雖も尙行可きの道を失はず、爲す可きの天職を盡さば吾人何ぞ其の微瑕を追及するに忍びむや。況や不幸アルヱの如く固陋の國民に對する者、爲す所、盡く冷遇され、國運日々に非なるに於てをや。あゝボルテール狂せしめし者、當時偏狹の小人の所爲のみ、斷じてアルヱが罪のみには非じ。

彼のウァイマルの詩聖は才識深遠、句々人の心裡に徹する如く深刻に、言々烈火の如く、一條の火光迸つて暗怛たる人世の行路を照し、直ちに彼の天心に迫らむとするの趣ありと雖も、尙世人の非難を免れず。或は不德の煽動者と呼ばれ。或は天を知らずして悟り顏する橫着漢と罵らる。異なるかな、固陋の徒の見解や。彼等は只聖

經の字句の表面に因るの外は天に行くの道を知らず。此の偏狹の解釋により、此の屑々たる準繩に由り、他を規せむとす。笑ふ可きかな其の行の病痴なる。猛省せよ、今此世紀の始、英國の社會益々姑息に流れ、準繩に由てのみ事を行ふ非運は遂に彼のバイロン、シエレーの徒をして國外に客死せしめしに非ずや。任狹前者の如き頗ふる愛すべき點あり、且其の天來の詩想や發して天地の妙音を和し、遠く沙翁マーローの氣慨あり。實に一代の詞宗英國詩伯たるに耻ぢず。然も國人凡常の眼光未だ高からず、彼が傑作多くは他の笑罵する所とある、彼が父母の鄉を捨つるの憤慨思ふ可きあり。誰れか彼れを以て天を知らずや云ふ。彼其のドン、ジユアンに於て斗屑の輩を喝して曰く、

Some kinder casuists are pleased to say,
In nameless print—that I have no devotion;
But set those persons dawn with mets pray,
And you shall see who has the porperest notion

Oh getting into heaven the shortest way;
My altars are the mountains and the ocean,
Earth, air, stars,—all that springs from the great Whole,
Who hath produced, and will receive the soul.

と。實に然り、繩墨の徒天才の翔に伴ふ能はず、彼磨天の翼ある者を見て、異類ありと罵り、一朝蒼空に遊ぶに當つて、何故に彼等と共に地に在らざるやと咎む、彼等偏僻の厭ふ可き遂に彼の謙遜あるシエーレーをして無神論の必要を說かしむるに至る。あゝ彼の此をなす、豈に世の奇矯の徒の所爲を學むで妄言放語する者あらむや。實に國民の固陋繩墨の僻見を破せむとするに外ならざるなり。彼が半生の涙は空しく、國人の冷腸を動かすに由なく、其の愛蘭の爲めにし、貧者の爲めに力を注ぎ、天來の繡腸を叩ひて宇宙の妙致を歌ふも冷たる國人を皷舞するを得ず、徒らに不信の徒、法規の敵の名を負ふてラゴーンに夭折す。彼が數奇悲しむに堪たり。彼は濃情の君子、胸底の抱負明かに彼が詩に現はるゝ者あり、曰く、

Let me for ever be what I have been,
But not for ever at my needy door
Let Misery linger, speechless, pale, and lean;
I am the frieud of the unfriend poor,

而して貧者を救ふが爲め自ら醫術を學びし彼が志や德とす可し。誰か此を罵りて罪する者ぞ。吾人は實に憤慨に堪へざる者あり。彼の斗屑の輩や義人を苦めて其の落魄を見て笑ふ、甚しきに至つて此を天罰なりと稱して無稽の說を附會して天下に傳ふるあり、吾人常に痛憤に堪へざるあり。彼等は己が行くの道を覺らざる間は、他をも共に止まらしめんむとし、徒らに天才の飛騰を抑留せむとして猶其の無知を蓋はむが爲め、姑息の法規を作り固陋の準繩を引て人を驅て之れに從はしめんとす。而してたま〳〵規外に道を求め、一躍直ちに天地の妙致と融化せむとする者に逢へば之れを罵つて異端の徒と云ふ。其妄や笑ふ可く其罪や責む可し。

今や泰西の文化我國に入りてゐ〻に三十年、西歐新志想の流れて我に入る者將に多

からむとす。此の間豈に思想の一大革新起らざるべけむや。思ふに、今は是我國思想の發達の時代なれば、彼の偏狹の小量を持して世に立つは斷じて不可あり、宜しく濶大の胸宇を開き滿腔の光炎を吐いて此の新日本の革新を導かざる可らず。然り、此時に當り自ら此の氣運を率ゆると稱ふる吾黨基督敎徒にして、彼の歐西頑迷の敎徒が顰に倣ふて、徒らに繩墨に泥み準規にすがりて、思想の新潮流を妨げ幾多の才華をして空しく凋れしめ、純正の士をして其の行路に迷はしむるあと正に沙翁曲中のヲフエリヤの謂ふ所、

……, as some pastors, do,
Show me the steep, and thorny waty to heaven;
Whilst, like a puff'd and reckless libertine,
Himself the primrose path of dalliance treads,
And recks not his own rede,

の如くあらむか、吾黨何を以て天下後世に對するを得むや。在來の日本想は多少偉

大の觀念を欠くとせば、之を作る者亦吾黨の責任あり。吾黨は大に想界に勇飛して或時は宇宙の理法に衛突し或時は天地の妙機に私淑し、常に自由の域に翱翔して、希くは少しく天地の玄機を覗ひ、彼の造化の懷に投せむかな。如今吾黨は彼の淡理の準墨を引きて健全不健全を測るの迂を學ぶ可きに非ざらむ。區々の別、屑々の差何むぞ我黨の顧みる所あらむや。聲ある者は叫べ。翼ある者は飛べ。而も最大の力を集めよ。無上の勞力を一躍に籠めよ。無規法をも生み法外道を生ずる者、此れ我革新あれ。此我革命あれ。あゝ誰か此の革新の機、進歩の運を鑄造せんとする者ゞ。鐚銖の計筭に由りて此の思想を割り出さむとする者ゞ。愚かなり、偉大の想は偉大の人に非ずむば鼓吹するを得じ。偉大の人は違常の法に非ずむば難し。猛省せよ、西敎の徒汝等只管に洪水の氾濫を恐れて沃土の分散を止むる勿れ。活機の伏する所豈に彼の道法の傍のみあらむや。

湘南の新夏

川崎　紫山

一浦づゝの嵐吹く、夏の海邊の景色あがめて、塵に塗れし身をも心をも洗はんとて、みあ月二十五日の朝九時、鴻南兄と共に品川停車場へ車を急がせ、滊車に搭じて湘南の茅が崎へとあゝろざす、雲も朽ちぬべき思ひの五月雨時とて、此日も曉かけて、芭蕉の葉に霏々と降そゝぐ音を聞き、八時頃にはまたく歇みたれど、品川發車の頃雲は尙ほ南の海面に低く垂れて、風の色も濕り深かりき、されどさすがに日曜日とて遊び好きある都人士の近きは大森、遠きは鎌倉、横須賀あどへ行らん、家族を提ぐるもの、友と携ふるもの、列車に充ちて、我等は立ちつゞけのまゝ横濱まで送られぬ、例の薄暗く蒸熱き洞の如き停車場に止まると五分僅かに空席を得て、腰打かけたれど、濕風絶へず肌を侵して心地あしさと只あらず、程ヶ谷、戸塚、大船、藤澤を過ぎ茅ヶ崎に着きしは、午を過ぐると二分、日の色やうやく赤く、雲の絶間より落し射る光の、ぢり〳〵と燒附くばかりあるも、病後の我には殊に辛かりき、

茅ケ崎は藤澤と平塚との中間にあり、近き頃までは停車場の設けさへあらざりしが、村長佐藤氏初め名譽職員等が切なる望により、去年はじめて所謂請願停車場あるもの設けられしなりとぞ、此地は南海を受けて吹送る汐風に、樹々の梢も葉も凋み、見渡す限り南一面は、疲せたる小松のとあろ〳〵に森をなせる小邱と、草も木もなき、砂原なり、地瘠せて農産物實らねど、ひとり甘藷は出來榮よく、「南湖の連目魚」と共に此地の特産として名を知られぬ、されば土地の人々はさま〴〵殖産の道を講じて、桑もしくは蕎麥など、心を用ゐて植ゑ試みしが、皆失敗に歸して、めでたき効果とては一つも擧らざりき、斯く此地は所詮農産物を以て、世に立ちがたきより、今は專ら海産にかを傾むくるやうにはありたれど、それとても他を凌駕する望はなきより、あゝに計畫を一轉下し、此地の海容水色おさ〳〵大磯沼津にも劣らぬを利用して、寧ろ地を擧て日本の一公園ともなし、尙且つ近鄕近在に利便を與ふべく公共的の一都會にも築きあげんとの大希望を起し、乃ち着々として其歩武を進めあゝに停車場の新設ともなり、小學校の建築ともなりたるものとぞ聞く、

横濱の人柏木あにがし此計畫を聞き、村人に交渉して、海水浴客の旅舍ならびに遊覽に充るべく、濱邊に眺めよき一邱をトして一の大厦を建て、茅が崎館と號け、此日を以て開業を式を擧げたり、新橋、よし町、柳橋、横濱の藝妓の手踊、落語、手品の餘興などありて、いと賑はしく、來客の多くは横濱東京の賣込商運遭問屋を初め横濱在留の清國人等ありきまた此日は市川團洲が、其別莊なる此地の孤松庵へ伊太利公使、葡萄牙代理公使、西班牙領事、穗積博士、和田垣博士、神田男爵、朝比奈知泉、尾崎紅葉、大橋乙羽、長田秋濤等の諸士を招きて饗筵を開きしあとゝて、朝より此地に下車せしもの多く、芽ケ崎停車場ありてより初發の繁華を極め茜木線の二布せし娘小供、孫を背負ひし婆までが、物珍らしげに祭禮の見物か何ぞのやうに孤松庵と茅ケ崎館のあたりへ詰掛け、館の前なる砂原には露店商人が店を張しも可笑し、

茅が崎館は停車場を去るあと十丁、坤の方にあり、折曲りせる畦道をたどり行けば海上の風もたまらぬ松かげに甍白く見えかくれして、此も同じき月の廿八日に開業

せし中村館と、邸を隔てゝ相隣す、此あたりの海は浪ゆるくして遠淺なれば大磯にもまして浴客には便よかるべし、浴客の衣着更ふべき所は、茅か崎館の前なる砂地に建てられ、森田なにがしの姉妹二人まめだちて、客を待遇ふ、我は鴻南兄と共に、土地の古老ひとりを雇ふて、濱邊を徘徊ひつゝ彼の島は何とかいふ、彼處の杜の名はいかになど問ふゝろむれば、浪形の襦袢着て、銅の脛あらはなる彼の古老は、ねんごろに指點して、昔を說き今を語る、しばしが程は眞砂の上をはしりわりきつゝ、沖の方を打まもれは、雨催ひの靄いつか晴れて、海の色ゆたかに、烏帽子岩に夕日さしかけたるもおかしく、平島の島影に水鳥の低く飛ぶも憐れなり、

やがて森田の家に憩ふて、茅が崎館より贈られし祝ひの赤飯に肴添へたる折詰をひらき、鴻南兄と盃取交しけるが、つゞいて清國人ふたり入來り正宗の瓶と生鷄卵など呼びて、ゝろよく打醉ふめり、景色のあまり妙なるに、彼等も興に入りけん、醉へるがまゝに我等が耳には疎き詩ども聲高く打ち誦んずるにぞ、試みに筆とりて筆談をぞなしける、我は先づ「貴邦の風光およそ此地に似たるものありや」と問ひ

しに彼は「中國の風光此地の如きもの多々なり」と答へぬ「さらば其名を擧げて敎へたまへ」と問返せば、「湄洲武彝の如きあり」といふ、又「貴邦には此海水浴といふやうなる養生的の遊びありや」と訊ねけるに、彼はしばらく打案じゐるが「中國には海水浴なし、たゞ地と天氣の平和を度りて身を浴するのみ」と答ふ、一問一答、我等は彼が筆を執るおとに、頻りに中國々々を振廻はすに可笑しく、よきほどにして止ぬ。

午後五時發の時間迫りけるまゝ、そは〳〵にして立出で、車を驅りて停車場に到れば、恰も伊國公使の一行の孤松庵を辞して、歸途に就くに逢ふ、我は紅葉君に我と鴻南兄と今より石橋思案兄を片瀨に訪ふべきよしを語れば、君はろれ面白かるべし思案に逢はゝ云々の事を傳ひくれよおど語らふうちに瀛車は轟々として走りはじめぬ、我等は藤澤に下りて、先づ停車場前の角若松といへる茶屋に休み、其處にて人力車を雇ふて、片瀨に向ふ凡水庸山道々の景色の取立てゝ記すべきふしはおけれど、暮靄森を掠めて、鍬かたげたる農夫の家路に歸るさま畫に見るやうにて、塵に曇

りし我等が目には珍らかなり、松の柱、竹のあみ戸、小柴垣ゆひめぐらせる村を過ぎ、片瀬川に沿ふて急ぐほどに、灯點すより少し早き頃、車は龍口寺畔松風靜かなる思案兄が家の前に止まりぬ、刺を通ずれば、兄はあは珍らし思ひもかけぬあとよとて喜びて座に延きたまふ、今宵はあゝに泊りたまへ、短夜を語り明さん、都の噂も聞きたきにおど内君ともく袂を止めたまひけるが、鴻南兄は明日を緩ふしがたき編輯の用事あればとて、しるて厚意に背き、内君が手づから料理したまひける鰺の鮮やかおるに舌鼓うちて、葡萄酒の馳走に顔ほてる頃、藤澤發の終列車に乘んとて、片瀬を立出づ、車はいそがぬにあらざりしも、田舍道の石に轍を咬まれがちにて、口惜しくも今發車せしばかりといふおる、わづかに二三分後れけり、心焦ども瀛車おらでは歸らるべきにあらねば、今宵一夜の草枕、旅のおゝろにおりて、角若松の樓上に幽けき夢を結びぬ、

宵のうちにやありけん、夫婦連の淨瑠璃語りの、おがし行くを隣の家にて呼上げ、三勝半七を語らせけるが、語る男の聲宛ども牛おんどの吼ゆるやうにて、あたら我

等の夢を破りけるに、腹立たしく、まだ鎖さぬ二階の椽よりさしのぞけば、戸外に人の群をおして、さすがに藤澤おればおそ、此淨瑠璃にも耳を假すおれ、感に堪えて聞ゐたり、鴻南兄はくどくも乘後れし因果を喞ち、何の約束でかゝる淨瑠璃までを聞かせらるゝにや、社の光頭兄が壺坂こそ優しおらめおど言のゝしりつゝ、蚊帳深く耳をふさぎて復たひ寐入りたまふ、翌る朝主婦が誇りがにいふを聞けば、此まで淨瑠璃、新内、清元さては法界節おど、東京より來りしは多くあれど、昨夜のより巧者おるは一人もおし、多分は名ある太夫の、物數寄に、鄙かけて遊山にや來られしおらんと、眞面目におりて感心するに我と鴻南兄と呆れて返す言葉はなかりき、

藤澤に泊りしを、我は他阿上人の引合せと畏み、遊行寺へ參詣に行きしあと、鴻南兄は本社に贈るべき原稿をしたゝめしが、時間に限りあるより、自ら停車場に持行き、東京行の旅客に托せしに、首尾よく着したりとの事おり、

午後四時發の瀛車に乘りしに、圖らず昨日茅ケ崎館にて顔を見し横濱のおま、小千代外六七人と、室を同ふし、能く談ずるおまの爲めに無聊を破られ、欠伸一つせず

横濱に着き、品川にて滊車を下りしは六時、また紅塵堆裏の人となる、

明窓淨几

暮秋　近衛忠凞

行秋をまねきかへさんすへもあし
野邊のすゝきも霜にしほれて

夕菊　蜂須賀茂韶

くれやすき秋の日影にあらはぬは
ゆう露かさすしらきくのはな

籬菊　鍋島直大

御園生にさかりみる日も近からん
にはのまかきの菊咲きにけり

閑居友　長谷信篤

訪れぬを何かゝあたんふみよめは
しらぬむかしの人そともなる　東久世通禧

曉紅葉

有あけの月かけしろくおくしもに
峯のもみちのいろやそうらん　津輕承詔

曉雁

山の端はあかつきくらく霧あめて
ふもとの小田に雁そなくなる　久我建通

海邊秋風

いせのあまの貝拾ふ袖やさむからん
はま荻あひきあきかせそふく　長岡護美

夜聞虫

秋の夜はさらてもものゝ哀しきに
むしの音たかく月ふけにけり　下田歌子

曉更月

有明のつきぞそのほれぬはたまの
夜きりはれゆく山松のうへに

賴三樹遺骨改葬始末

末松青萍

西京圓山長樂寺賴氏塋域內、山陽外史の墓側に一小碑あり、竿石高一尺六七寸に過きす、前面に篆字にて、

賴三樹之墓

と刻し、側面に楷書にて

摸大橋順藏所表在東碑本

と刻し、背面に同く楷書にて、

余嘗欲撰亡弟之碑文、牧信吾曰、令弟之事存于天下之口碑、且多觸犯、不必誌焉、余是之、既而再思、歷年之久、或沒其生終事實、乃叙其畧、弟諱醇、字子春、通稱三樹八郎、自號古狂生、以文政乙酉生、戊午歲坐事東下、遂刑死、實安政六年十月七日也、年三十五、大橋順藏收尸葬之、立石表之、後有旨踣之、至壬戌之冬、特原墓祭、乃立此石、爲招魂之處、信吾曰可、令弟亦可以瞑矣、賴復識。

と刻せり。三樹の遺骨は今、目黑若林吉田松陰の墓側に埋む、圓山の碑は其招魂塲に過ぎず、其前面の文字は、大橋順藏氏が小塚原回向院に表立せし所のものを模刻せるものあるおと前文云ふ所の如し。而るに小塚原の原碑は今は其舊形を留めず、賴支峰の嗣子龍三氏予が爲めに之を說明して曰く、今小塚原回向院に在る碑石は、前面に鴨涯之墳と刻し、碑陰に諱號及歿日を刻せりと記臆す、鴨涯は三樹の別號あり、是れ原碑は幕吏の忌に觸れ一旦毀棄せらる、其毀棄せらるゝの時に方り、何れの藩なりや東國の士人金子何某とかゝ、偶々之を見て刑辱墳墓に及ぶの理なしと爲し、之を幕吏と爭ひ、遂に再建の許を得て之れを再建したりと云ふ。碑石は原物あるも、文字は已に一旦毀てるを以て、更に別文字を刻みたるありと。是れ蓋し龍三氏が寺僧に聞く所あり。余を以て之を見れば、公然再建の許可を得るは、當時の事情に於て蓋し難からん、意ふに或は誤聞あらん乎。故さらに正面の文字を鴨涯之墳と改めたを見ても之を察知せらる、且つ小塚原の碑石下には何物ありや、將た空碑に過きざるや是れ實に一疑問あり。支峰文中に「特原墓祭」の四字は如何なる意なる

や、特に墓を原ねて祭るとでも讀むべきか、且つ大橋の篆字を模せしは其際のあとありや、將た其以前未だ蹈さゞるの時のあとありや、此等のあと稍疑あき能はざるあり。

前碑文中通稱を三樹八郎とせり、當時或は三樹三郎とも稱せり、一定する所あかりしと云ふ。前年朝廷特に正四位を追贈せられたるに方りては、宣書に三樹三郎とあり、因て賴家に於ては今は三樹三郎を以て正とせり。三樹の遺骨は目黒に改葬せるあと上に云ふ所の如し。此の事に關し余は、歷史の一材料として留存するは足るべき一文を、頃日の西京行中に得たり左文是れあり。

三樹遺骨改葬の記　　青萍迂人

今茲明治丁酉二月、英照皇太后大葬の事あり、余貴族院議員を以て參列の命を蒙り、京都圓山の最高樓梅ヶ枝に寓す。樓背賴山陽墓、及賴三樹招魂碑あり。一日賴龍三、賴俊直の二子來て余を寓樓に訪ひ、俱に往て墓碑の前に展す、二子曰く、三樹の遺骨、元江戸小塚原刑場の側にあり、後長州士人の、吉田松陰の遺骨を

目黒若林に移葬するや、三樹及び小林民部亦併に之を松陰の墓側に移せり、嘗て大橋燾の日錄に據り此事を詳にす、而も唯長州人と記せるのみ、行て其の人の厚意を謝せんと欲するも姓氏を知らず、嘗て之を知人數輩に問ふも亦皆知る者なし、吾兄豈之を知るの道あき乎。余聲に應して答て曰く、今の伊藤侯爵は正に其一人たり、余嘗て親く之を侯に聞く、而も今其詳を記せず、二子大に喜んで曰く此の如くんば事實を知るの端緒を得たりと。次日余偶々侯と相見る、乃ち語るに前日の事を以てし、問答數回にして左の事實を得たり、於是乎匆卒筆を走らせ、之に記して以て二子に與ふ。

始め松陰の小塚原に刑せらるゝや、長藩士四人、密に刑場に就き之を葬る、或は襯衣を脫し、或は手巾を出し、身首を結續包束して之を埋む、四人とは故木戸侯、故飯田正伯、小寺新之丞、今伊勢神宮嗣官たり、及ひ今の伊藤侯あり。

後ち松陰を目黒若林に改葬す、同時に賴三樹、小林民部の遺骨を其傍に移す。其事に與る者、故高杉晋作、白井小助、及今の伊藤侯等長藩士凡十人內外とす。余

其餘の氏名を問ふ、侯曰く堀眞五郎は列中に在りし如し、品川彌次は在りしや否や記臆せず、久阪玄瑞は在らず、彼れ嘗て佐久間象山を信州に訪ふ蓋し此時に在り、其餘の人名今正確に記臆せず。

余問て曰く改葬の事白晝之を行ふ乎、曰く然り公々然之を行ひ、小林民部君、墓標と記せし類の標木を携ふるに至れり、當時幕權既に衰へ、此等の事所謂志士の爲すに一任し復た干渉せざりき。

余復問ふて曰く、橋本左内の如き、亦三樹と同時同地に刑せらる、何が故に獨り三樹民部二人を擇びて松陰と俱にせしや、侯曰く、左内等の如きは各其仕ふる所の藩公あり、余等藩廳の認諾を得ずして恣に遺骨を左右するを得ず、獨り三樹民部は俱に京師の人、其骨を移すも之を咎むるの人ある無し、是獨り三樹民部を移せし所以なり。

余復問て曰く、何が故に若林に移せしや、侯曰く、若林は毛利氏の所有地にして目黒に在り、當時農夫一戸其地に在りて之を保管せり、余等以爲らく、彼地に納

めば市塵既に遠し、遺骨亦其地に安んずるを得んと、是れ彼地を相せし所以なり。來原良藏自盡の遺骸、初め愛宕下青松寺に葬れるが、當時彼れも亦余之を發堀して松陰の墓側に移せり。

余復問ふて曰く、嘗て閣下の談に、當時松陰の遺骨を四斗樽桶にて洗ひしとあり し如く記す、然りしや否や、曰く小塚原の刑場は卑濕なり、故に松陰の遺骸も已に糜爛して肉殆んど去り盡し、他の二氏は殊に甚しく、棺桶中に泥水と共にドロ々々せり、故に樽桶に洗ひしかと覺ゆ、來原良藏の遺骸も發堀の時肉既に大に退き、獨り白經衣猶之を包めるを見たり、侯更に語を續て曰く、當時の事既に四十年前後の往夢に屬す、故に其詳細の如きは必すしも胸臆に記せず。

余復た問ふて曰く、大橋蠹の日記の零紙の抄出と云ふに據れば、松陰遺骨改葬の時、江戸の有志にして深く頼三樹を景慕する某ある者あり、發堀の長人士に就き、遺骨數片を分與せんことを請ひしに、長人等は改葬は禮重し、遺骨を分つ如きの事固より諾すべきのことに非らず、然れども多事に混し、小骨數片を失ふも奈

何ともすべからずと答ふ、於是其人數片を竊み去りたるあとを記し、猶其數片に關し、後日之を大橋に托したる始末を詳記せり、果して此事ありしや。侯曰く余は記臆せず、又余は之を有り得べきの事と信せず。當時の事情を追想すれば、余等は彼れの遺骨を改葬せんとす、之を他人に分與する如きは決して承諾し得るの事あらず、而して復た同志中の一二人にて、竊に他人の盜み去るを諾する如きの人は同志より所謂詰腹を切らしめらるべければあり。或は某有志と稱する者の誤聞には非らざる乎。

余曰く分骨の事は、暫く疑を存して後の證を待つの外あかるべし。

前文中に云ふ所の、大橋蠹(順藏養子照次)の日記の抄出は左の如し、是れ賴龍三氏が大橋家に就き、自ら抄出せし所に係る。

癸亥の春、幕府の臣西村退翁、松岡萬、早見某、牧野某、上田楠次上田ハ他藩ナランカ五人にて、千住驛迄用事にて之きしとき途小塚原を經たり、回向院別莊常行庵の前

を過しとき、許多の人群りたれば何事あらんと問ひしに、今日は改葬ありと答へし故、皆々墓所に入りしに、非人ども打寄両三人の屍を泥土の中より堀り出し、其骸骨を點檢せり。松岡氏傍に立看せしとき是は誰れの骨ありやと問へば、小屋頭市兵衛なる者、賴三樹八郎殿なりと答へたり。松岡兼て其義烈を欣慕の餘り、直に其左腕の骨両三片を、泥土のまゝ竊に袖に收めんとせしにより、小屋頭大に驚き、あは何事をあさるゝぞ、今日長州御藩より、両三人の骨を若林村の邸へ改葬あさるゝなり、一片の骨だも不足せば私の職分相立申さず、何事あれば右樣の事をあさるゝぞと詰りしとき、松岡悵然として云、余は幕府の小臣松岡萬と云者なり、兼て三樹の烈志を慕ひしにより、今日空しく是骨に別るゝに忍びんや、故に竊に携へ去て朝夕薄奠を棒げ、坐右に置きて之を祭り聊微志を表せんとす、且古、分骨と云例もあれば、汝竊に此意を躰して一片を贈れば、何幸か之に如ん。

市兵衛答云、私事は今日改葬の日に當りて、骸骨を一々點檢して、長州藩の人に引渡を職とせり、豈他人の請を以て竊に一片の骨だも贈るをあさんや、請ふ長

州の人に其意を告げて其命あらば分つべし、私の請は肯んせずとて辞して許さず。因て松岡氏も已むを得ずして、同行の西村退翁は老年の人あれば、其人に托して常行庵の座敷に在りし、長州人に其意を告るを乞ふ、西村乃ち長州人と面話して、松岡の篤志を縷々と説けり、長州人も其至誠にや動きけん答て云様、今日の改葬僕等其事を董せり、故にたとひ義烈を慕ふと云へども一片の骨を贈るを得んや、しかし此改葬の日の雑沓に紛れて、竊に偷み去る者あらば如何せん、是は僕等の不得已所ありと答へり。故に西村其趣を松岡に告げり、松岡欣然として市兵衛にも其意を告げて、一二片を竊に持ちて去れりとぞ、實に正月十二日なり。

因に云、正月十四日曩、小塚原に之きて烈士の墓を吊せしとき、常行庵主見休號岐山美濃人と云僧の余に話せしに、一昨十二日長州より、吉田、小林、頼の墓を若林村と云下邸に改葬せり、一々骸骨を茶にて包み棺槨其外渾て手厚のあとありし、其日幕府の麾下士とて狂人の如き人両三輩來り、頼氏の骨を分ち呉れよと て萬方に請へり、終に長人と掛合て竊に持ち去れり云々。

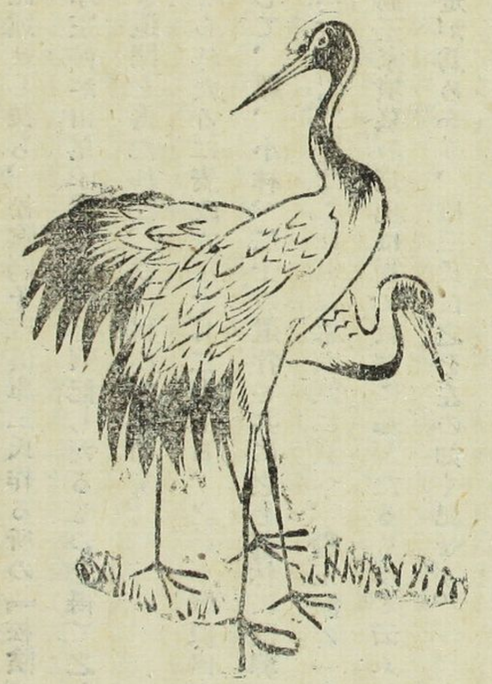
甲子の冬十月曩、同志の士幕府の臣關口艮輔等と謀り、小塚原の烈士墓を、其墓所の内近き側の明き地に集て葬る、且小林頼二氏の遺墳を建てり。其時に松岡氏、一日余の居を訪ひて云く、頃日烈士の遺墳を建つを謀れりと聞けり、僕昨年春頼三樹の烈志を慕ふ餘り、骨を乞ひて一片を藏し、朝夕之を祭れり、然るに頃ろ竊に思ふに天下多難、僕等方に何地に骨を埋むるを知らず、萬一僕家を去る事あらば、却て烈士の骨を汚すに至るも計りがたし、因て君に托して骨を遺墳の下に埋むるを乞ふ如何、實は今日袱に包みて携へりとて開けり。　兩三片を清淨の切れにて包めり。余乃諾して石槨の小なる者を造る、別に桐の箱を内にいる、茶にて骨を收め、日あらずして小塚原の遺墳下に埋めり。戊辰の年日月ヲ失スに至り、靜岡藩より石槨のまゝ、小塚原より若林邸に徙し一同に收めたり、其事は關口頼藻初名艮輔是を董せり。

龍三氏云ふ、前文中には目黒改葬を正月十二日とせり、目黒の松陰神社に就て之を聞けば、正月五日とせり、日數符合せす、又小塚原回向院の老僧に聞けば、前文中

に云ふ所の小石槨は若林に移せしあとあし、今猶鴨涯碑石下に在りと云へり。寺僧としては碑石を空物たらしめざらんとする爲め、此言を爲すかも知るべからざるも、若し初めより分骨の事あしとすれば、双方とも虚あらざるべからず、意ふに分骨の事は虚聞とするが正しからん乎と、或は然らん。余又更に、前日京都にて伊藤侯との談話を回想するに、若林の墳墓は一旦幕人の爲めに毀たれしも、戊辰の維新に際し、幕人自ら之を回復したり、今の前島密等其事に關せりとの事ありたり、蓋し長州人士嘗がて志士遺骨の爲めに、安全の地ありと思ひ込みし目黒の僻地も、維新前の騒乱の爲め、一旦其閑静を失ひ、大勢一變して維新となるや否や、幕人直ちに前非を改めしなるべし、前文中に戊辰の年静岡藩より云々は、或は此事と混淆せるには非らざる乎。

之を要するに三樹遺骨の一部分に付ては、幾分の疑點を存せるに拘はらず、彼が同志同死の小林民部と共に、静に目黒若林の松陰墓側に永眠せるあとは明あり。而して彼等の遺骨を負ひて若林に移せし者は、高杉伊藤等の英傑の士ありしとは、亦身

後の一美事と云ふべきあり。



賴三樹改葬始末續記

仝人

予嘗に三樹改葬始末を記述せし後ち、松陰嗣子吉田庫三氏作る所の『松陰先生埋葬并改葬の記』、及び木戸孝正侯が山尾子爵の談話を筆記したるものを得て之を見るに、大に前文を補足すべき遺聞を得たれば、茲に再び之を記す。

松陰が傳馬町獄に斷首せられたるは安政六年十月二十七日、之を小塚原回向院に埋葬せしは其二十八日にして、賴、小林、二士の遺骨と共に之を若林に改葬せしは、文久三年正月五日、(庫三氏所記に據る)此時は幕威既に衰へ、勤王派の一旦大に勢力を得たる際にして、勤王家墳墓の修理は實に敕旨に基きたるものと云ふ。松陰等改葬の公々然たりしは是が爲めなり、庫三氏は之を左の如く記せり。

既にして幕府令を下し院内志士の墓碑を毀たしむる時、先生の碑も亦撤せられたりしが、後四年を經て文久二年壬戌八月、世子公(從一位公)朝旨を奉じて東下し、天使大原重德卿と共に敕旨を幕府に傳ふ。中に戊午以來罪を國事に得たるもの

を釋し、死者の罪名を削るべしとの事あり。是に於て久坂義助等更に碑を先生の墳塋に建つ。(碑字は久坂の書にして今回向院に存するもの是れなり)然れども小塚原は刑死者を埋むる穢汚の地にして、忠烈の骨を安ずべきにあらざるを以て改葬の議起り、遂に公命を仰ぎて荏原郡若林村(市町村制施行の際世田ヶ谷村に合し若林は大字たり)の大夫山に移すべきに決す。大夫山は延寶二年甲寅、泰嚴公(網廣公)在府の時、■德川氏麾下の士、志村勘右衛門の采地内なる農民の地を購ひて火を避くる處に充てられしものにして、地勢丘を成し林際に別第あり、故に村民呼びて大夫山又は長州山と稱せるなり。斯くて明年癸亥正月五日を期して、先生及び先生と同じく國に殉して墳墓を接せる、賴三樹三郎、小林民部を改葬する事となり、高杉晋作、伊藤利輔、山尾庸三、白井小助、赤根武人等此が主者たり。山尾、白井は前夜小塚原に向ひて豫め事を整へ、翌早高杉等皆會して三墳を掘り、遺骨を新棺に歛む、而して其墳塋は忠死の血痕を印したる地にして、破壞堙沒せしむるに忍びざるにより、墓を修め碑を存して去りぬ。(尾寺信の説によれば現

今先生の碑のある處は舊墓地にあらずと)

前文中、山尾、白井は前夜小塚原に向ひとあるは、山尾子爵の談話に據れば山尾、赤根の両人にして、両人は小塚原に至り終日準備に斡旋し、夜に入り漸く整ひ、其夜は千住に一泊して、翌早高杉等の來會を待ちたりと云ふ。此日此壯士的志士の一群は傍若無人の擧動にて、高杉晋作は騎馬にて之を先導せしが、上野三枚橋に來るに及び、彼等は其中橋を通過せんとするに際し、守橋の吏卒叱して之を止めんとせしに、高杉は鞭を揚げ疾呼して曰く、我輩長州の同志、勅旨を奉じて忠節士の遺骨を葬るなり、途に此橋を過ぐるも何の不可かあるとて、辞色俱とに勵しければ、吏卒は逡巡して敢て遮らざりしと云ふ。蓋し幕府時代に於て、中橋は大樹東台參拜の通路に供したるものにして、諸侯以下何人と雖も通過する事を得ざるの制ありたるあり。若林に着し、全く瘞埋を終りしときは日既に黄昏あり、之に來原良藏の墓、幷に同年十一月同所に葬りし、福原乙之進の墓を合せて五墳とあれり。(福原は一橋の臣脇坂又三の家にて幕吏に襲はれ自殺したる者)元治元年七月京師の變後、幕府

櫻田麻布の長州諸邸を收むるに方り、若林の五墳も亦爲めに破壞せられたり、(庫三氏は「人を遣して火を山中に放ち、別邸を毀ち、五墳を壞らしめたり」と記せり)既にして大勢一轉して明治元年と爲り、其十一月幕府廢せられ靜岡藩とありし際、當時江戸在勤の長藩吏内藤左兵衛(左平)書を當時の德川家の公儀人前島來助(密)氏に遣り、五墳破壞の事を詰りしに、前島氏は謝罪樣の答書を送りたり、於是大に荒廢の塋域に修築を加へたる事實は、庫三氏左の如く記せり。

前島は當時德川氏江戸邸の公儀人ありしが、答書其要領を得ざるにより、木戸孝允公命を稟け、藩の土木吏井上新一郎(信一)をして役を董し、新に先生以下の碑を建て、又域内に綿貫治郎助の墓を移し、(治郎助姓は多々良名は直秀元治元年七月廿六日櫻田邸收沒の時、幕吏と論爭して屈せず、遂に短刀を拔き喉を刺して死す行年二十九云々)甲子の變幕吏に殺され、或は幕獄に死したる四十五人の招魂碑を建てしめ、木戸氏は『王政維新之歳、木戸大江孝允』と刻せる華表を寄せ、德川氏も亦我が修墓の擧を聞て、葵章ある水類器一基を貽りたり。

内藤、前島二民往復の書面左の如し、前島の書中に『往時窃に鴨涯先生の腕骨を奪去、別に孤憤造立志士之忠魂を寄、吾輩之幽憤を洩候に至ると申程の義に付』云々とあり。前回文中記する所の三樹分骨の逸事と相吻合するに似たり。此二書は半公然の書類あれば、彼一事は復た疑ふべからざるに似たり、但し如何なる方法にて之を竊み去りしかは、未だ詳悉するあと能はず、幸に前島氏今猶世に在り、就て之を質さば其來由を知るあとを得ん乎。

未得接眉候得共一書致拜呈候、寒冷之候愈御清適被成御奉務奉賀候、然れは藩吉田寅次郎始め、頼三樹三郎、其外戊午以來身を國事に致候輩、過る戊八月御追懐之

勅諚に基き、將軍家之令に從ひ、若林に於て墳墓造立致候義は、委曲御承知可有之、然處即今承候得者墓石は有之候得共華表玉垣等は御廢毀相成候由、如何之御儀に御座候哉、甚疑惑罷在候、全弊藩一己之私意を以て、窃に設造致候儀に無之、志士仁人之跡湮滅すべからざる所よりして、前顯之通、

勅諚旦將軍之令にて、公然墳墓造營被仰付候儀に付、永世に渉り異議無之は勿論に候處、右御破壞に被及候儀は、決て御樣子も可有之、致承知度、不取敢内分御聞合、早々御答可被成下候、此段爲可得貴意如此御置候、早々不悉。

十一月九日　　内藤左兵衛

前島來助樣

再伸甲子弊藩之事起りしより以來、彼此御混雜中御破壞之場合に立至候歟も難計候得共、左候ては第一其節

勅諚御遵奉之上、御發令に相成儀候にも致違却候、御不都合之筋と相考申候、畢竟當時御始末之次第、並墓所即今現存又は亡失之品類等、巨細御取調早々御答可被成下候以上。

御書奉拜讀候、時下寒冷の節に御座候得共益御清適被成御座恭賀一段の事に御座候、陳ば尊藩吉田寅次郎君御始墳墓之儀に付、御内々問合之儀、實は小生拾餘年

來東西漫遊仕候て、僅に近時卑職相奉候儀故、委曲承知不仕、勿論彼是與に訊問仕候得共、舊時當路罷仕候者は總て四分五散致、今日在職の者共は前日不售之人、或は草莽之微臣故、昔日の何等を詳明罷在候者も更に無之、但友人輩に質候處、甲子尊藩之事起候より、竟に貴邸を廢壞するの誤錯に立至り、蓋し若林御別第を毀つの時、無知之夫卒等志士埋骨之墳墓たるを不知より破壞せし事、是に及候もの歟、固より當日執政之奸吏、仁人豪傑を愛するの心無之、敕諚至重を不知者、吾輩既に刀を按するに至れり、故に往時竊に鴨崕先生の腕骨を奪去、別に孤墳造立志士之忠魂を寄、吾輩之幽憤を洩候に至ると申程之義に付、終に春來之大變を釀起し、祖宗の血食殆絶せんと致候も、其原是等に基するは篤と御深察被下度候、幸一大藩之天恩に奉浴候上は、往昔之逐一を追懷致念此邊にも可及を、漸次焦眉之急に賤慮を勞し居、在職一同之無念御書に因て、不堪驚愕慚耻之至、罪亦不勝數事に御座候、然し德川今日在務之臣、僕共昔日覇府之吏人と同日視不被下、何卒御隔意無之如何致可然哉と、御示諭被下候樣奉願度事に御座候、唯其細答仕兼候は、前條之仕合恐縮之至御座候得共、御海恕相祈候之他無御座候、恐惶頓首。

内藤左兵衛樣　　前島來助

山尾子爵の談話に據れば、此時大橋順藏、橋本左内の遺骨に關しても左の如く見ゆ。

大橋順藏の遺骨も同所に在りたり、依て山尾庸三は同氏の遺族を訪ひ、今回長州にて勅命を奉し志士の遺骸を改葬あす旨を告げ、大橋のも共に長州に一任せんことを勸む、然れとも遂に其意に應せず、遺族改めて他に葬る、又同所に在りたる橋本左内の遺骸は越前藩にて改葬せり。

殉難士傳に據れは、大橋は文久二年正月獄に下る、同年七月七日重病の爲め獄を解き宇都宮藩邸に幽せられ、同十二日死すとあり。而して幽囚中の身なるを以て、他志士と均しく一旦小塚原回向院に埋葬せしか、果して然らは大橋の節義は、當時志

士の景慕する所あるのみならず、伊藤侯あどは現に其門に出入して親交ありし人あれば、前文の如く松陰と共に改葬の計畫をなせしも寔に其以あるあり。

丙申秋扈從

三島中洲

皇太子登日光山輪王寺主彦坂大僧正見贈
玄堂一品大王主從八景詩集公餘次其韵供粲正

中洲老人藁

小倉春曉

温藉山容冠野州。白櫻影落碧溪流。曉來忽失好恣態。春霧糢糊遮兩眸。

鉢石炊烟

一條山市枕溪川。瓦屋茅簷旅館連。香客去來蹤不絕。晨昏蓊勃颺炊烟。

含滿驟雨

峰岌奇巖挾小蹊。何來驟雨黑雲迷。須臾水漲波奔放。碧玉溪爲白玉溪。

寂光瀑布

一道白泉懸半霄。老杉古柏絲千條。世人不到空山寺。畫裏風光委寂寥。

大谷秋月

瀲灩波浮月影流。水聲蟲語入詩幽。夜深深谷人稀至。閑却晃山三五秋。

鳴蟲紅葉

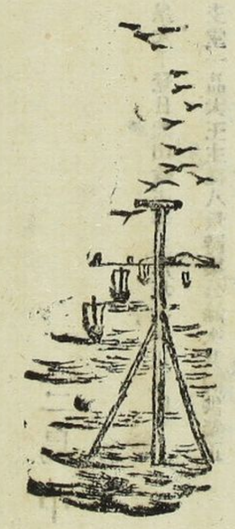
九月紅優二月紅。滿山秋入畫圖中。奇觀最是斜陽裡。落葉如花散暮風。

山管夕照

夕日西低人絶蹤。両崕綠樹帶烟濃。急流如瀑架畫橋。滿地白雲跳赤龍。

黑髮晴雪

千里登攀了夙緣。懸崕踏雪近星躔。多年墨水斜陽外。一髮白雲望遠巔。



蚊やり火物語

小島烏水

床の間には、仙臺の書家嗚崕といへる人が、細字に認めたる前赤壁賦の一軸を懸け、蟲喰竹のわざとしからぬ花筒の、いはゞ風雅でもなく、洒落でもなく、何となく氣に入りしまゝ古道具屋より買ひ求めたるを前に据ゑ、拙きながら今おろは珍らしかるべき黄菊と、蛇の目草とを取合せて活けたるは、妹の手すさみなれば、なかなかに捨てがたし。それと列びて、あの春わが箱根姥子より獲たる木の葉石とて、石炭糟のやうに色黑く、量目はいと輕く、石といはむより土塊と呼ふ方ふさはしかるべきが、木の葉を六七枚累ねたる形、あり〳〵と見え透きて、剝げども同じ痕あるを、眼病の藥とて土地の人はもとより、田舍の湯治客などの煎じて眼を洗ひつゝあるを見たが因果、珍らしき石もあるものかなと購ひたるなり。これと脊合せに飾られたるは、信濃の秋曉君より贈られたる木の葉石にて、飛彈の白骨にて採りたるものゝよし、土の質いたく前と異なり、色は灰白にて、漆喰細工に木の葉の型を篏

めたらむおとく、縦に、横に、或は半折、或はカスリ傷あるまゝの形を殘したるぞおもしろき。硯箱は鎌倉彫筆は上海の友より贈くられたる粤東の小全毫とて、銘だけはいかめし。筆筒は箱根山中にて拾ひたる古木の根を、刳らせたるおど、机の上には、いづれ旅苞おらぬぞおき。

かゝれば數字累はしき職業からの書は、盃の前の燒芋より目障なれば、弟をして搬び去らしめつ、東京の友より借りたる透谷集のみぞ傍近く横はりける。

さればとて別に詮術おければ、頬杖つきて徂き徠う白雲の、山と峙ち、天狗と駈けめぐり、幢帳幡帘をひろぐるおとく、毳々然たる飛蓋、匹輿を擁するおとくおるを眺めつ、胡思亂想は打水の日に照らされて傍より乾くやうに去り、無念無想、葵の花の散る音幽けく耳の底に響くまでウトウトしけるとき、眠るともなく机に俯伏して、浴み上りの坊主頭を、そよ吹く風に舐ふられたる心地よさ、破れ鐘を叩かるとも寤めまじうおりし夢心地のあのおゝおゝ情知らすめ、足音慌たゞしき下女のもし〳〵と搖り起すおと、佛飯にたかる蠅より執念く、アイよ今起きるよと夢が言はする挨拶

にては承知おりがたきにや、お客さまですよ、もし〳〵と、聾に電話かけるやうに、この『もし〳〵』に次ぐに、果は腕力を以て訴へかねまじきけはひおれば、何のおのれ臨濟一喝、握拳にて机をハタと叩き、やかましい何だと睨みつくれば、お客さまですよといふ聲、消え殘る蚊遣火の椽先にオホ、と艶めきたる女のほゝゑむめり。悸めく胸を押し鎮め、白毫の彌陀六が村醪を聞あし召したといふ見えにて、朦ろの眼をおすり、屹とうち見やれば、おゝに床しき妙齢のおん姿、羽二重絹の富士額にフッサリと匂ひ溢るゝ黒髪の、下よりおだらかおる濃き眉の遠山みどり、衣ものはさまで綺らびやかおらねど、手足のつまはづれ、おろらく塵の世の人おらじおぼろ月夜の、大野原に立たせたまふ、名工の石像に參する心地して、美くしさ、神々しさ、おれはと膝も改まりて、いづおよりのお出でぞと四角張れば、瓢の種より皓き齒を露はして莞爾とゑみ、アノ野暮らしい顔はいのとは正可に仰せられざりしが折角御寢おつてゐらつしやるとおろを、お邪魔さまでしたおとねと、馴れ〳〵しきだけ、うす氣味悪しく、熟く見ればどおぞにおぼえある目つき口もと、それがし

の小學校に在りつるころ、仲善かりし友達の、名おどば言はぬ方よし。

あれは珍らしきお客さま、鶴巣て龕果を落し、龍蟄して湫珠を生すと、誰やらの詩に見えまする、晋堅菩薩の御來迎で、見苦しいあばら屋も光りまするぢや、先づは遠路のところ、お暑いのによく訪ね下されたと團扇も、黒塗の長柄の綠の房の下りたる方を、分別顔に差出し、取敢へず氷水でも持て來よと、下女を呼べど岑寂として、大伽藍に据ゑられた木魚、叩けど一向外へは聞えぬやうかり、いらざる下女のえせ粹、塲を外されて迷惑至極かれど、さらば主人が手づからの毫天目、煎じ茶のおもてかし仕らむずと、立上る疊障りの滑かかる、木綿の足袋がいつしか絹に代りたるよと訝かりて、椽側に出づれば、あゝにも菡萏かいふ莚を敷きつめて、迴廊いと長かるばかりか、薄絹の障子の中に五尺四方の盆石をしつらへ、水行燈しかげたる心にくさ、眼と鼻の間にはえ知らぬ馨を放つ草花の、拂塵の光を照らすらむと床しきかと限りなし。わが家かから、さても玉のうてかにかりつるかかと、その時はさまで不審にもおもはざりし。

自分の用のあるときばかり、上りまするは敷居が高うおざりますが少しお頼みが、おざりましてと、おもはゆげかるに、何の入らぬ御心配、あかたのおとからは何かりとものと、伊達のぶげんの浮かれ男が、誰かの無心を聞くやうに、安請合も語らば仔細のある事かり。

秋の夜に蟲の品定め、松蟲鈴蟲子供心に、よくて、可愛らしうてたまらず、殘むの蚊の唸る聲を蚊帳の中に聞きすまして、肩させ裾させ、寒さが來るぞと、李夫人かちぬ蟋蟀が閨の睦言うれしかりし。夏は朝まだきより麥藁蜻蛉、壇辛蜻蛉、おざんかれと、隣家の庭に駈け入て折角の接木を容赦かくへシ折り朝顔鉢を、蹴かへして、あるじが秘藏のふところ咲を微塵にかし夕暮にかれば螢來い、向ふの山は燒山だと聲の嗄るほどわめきてかにがしの隱居が病氣を嵩じ、抛げ付たる馬の草鞋、蝙蝠には中らで、『さぬき名産あめ湯』の行燈に大穴を明けし。或とき學校の庭にて捉へたる蜻蛉を袂に入れ、袖口の少し下を緊く草の莖に結ひ、遁げ路かければ萬萬歳授業時間の早く終れがしと心に念したるも仇かれや、讀本朗讀の半ばに頼みの草莖い

つしかほぐれて螇蚸は自由の天國を悦び、羽ばたきして教室を翔けめぐるにぞ、われよ〳〵と生徒は總立にありける小供心の正直に、かゝる時は人一倍元氣よかるべき顏いつに似げなく振らめてしよげ返りけるより、罪倏ち露顯して、報ひは覿面、一時間の直立を命ず

ろれより遙に後のあとあり卯の花の垣に翻れかゝれるを春の雪のかたみとも見て、浮かれありくは、夏木立蟬さわがしからぬ今ぞよき、爺の手前、詮方なき讀書三昧もう我慢があらぬと、裏口より庭下駄穿いたまゝ畦傳ひに脫け出し、べロリと舌を吐て、少しく季が早けれど雲の峯富士の山より高いかなと傍若無人の出鱈目を吐きちらし、古池の草ぼう〳〵と生えて行々子かしましきが癪に障るとて小石二ッ三ッ投げ入れ、藻を分けて土鍋洗ふ女に、したゝかしぶきを浴ひせて叱られたるを象の鼻に針ほどにもいたがらす。梨小舍守る爺の高鼾あそ幸あれ、小縒を丁字髷に結ひつけてくれんずものをと焦りしが、紙のあきに殘念かり、鰌を手握みにせむとして誤て田螺を踏みつけ、赤蛙とおもひ違へて疣蛙に手を觸れ、さすがに氣味惡しかり

しあど、さま〳〵の戯れにうち興じて、道草喰ふ足許よりおもひもかけぬ子雀ぞ起てりける。足には吹矢の傷を負へるにやあらむ、羽ばたきして悶けど、地を距るあと三尺ならす、ちよあ〳〵走りに跛足を曳けるさまの哀れあるに、さすがに惻隱の情を起して、いでいたはりくれむと立寄れば、如是蓄生佛緣あく、あの醫師の匙加減でやられてはたまるものかと愈よ遁げ出すにぞ、害心あき我も業を煑やし、あのまゝにて止まば烏さしと一つに嘲み笑はれ、高嶺の花に手の遠かで折らざりし無念をこらへて、花の守護神らしいお顏する平凡詩人と一ッに唄はれむも殘念あり、一たび手に入れて家に伴ひ、米もくれ、菜も喰はせ、さて放ちやりてこそ慈悲も見ゆれ、初一念を貫かでやはと、一間追ひ、一町跡を踉けしに、とある蛭の下にて影を見失ひぬ、必定あの下あんめりと、高くもあらぬ蛭を勢込んで躍り超えむと、下駄の宙に躍る一刹那、あら危いと耳を劈く聲雉子のけたゝましきがおとく優しけれど力あるに、絃を離れたる箭はしあやかある青柳に觸れてあらぬ方へ外れたり、さすが鞍馬育ちの御曹司、飛びそあねて控とのめり、暫くは起きも直らす、首を擡げてう

ち見やれば、わが頭上を覆へる繪日傘のぬしや誰れ、妹にやあらむ、幼きを古襷にて十文字に脊負ひたる乙女、色やゝ淺黑けれど眼つき凛々しく、ふくやかなる頰に紅ゐの潮ざせるは、血のめぐり激しかりしにや、胸のいき忙しけに波うちて、無言のまゝ我を睨まへしばらくの女達磨、やがて吻と胸撫で下し『危いおとね、御覽あさいお下を』と我を忘れて恍然たるけはひ只あらぬに、恐る〳〵這ふて、蛭の下を覗へは、おはいかに、池ほとの大サなる古井戸、水は綠磬をたゝへて藻を泛べ、一年は經たりけむ蛇の死骸の、青く白く膨れたるが漂へりけるに、身の毛慓ちておそれ禮いふ口はどおへやら置忘れし。

われは、父にも、母にも、弟にも、友にも、おのおとを語らざりき、その後件の乙女と學校にて一ッにおりぬ。乙女は仔細ありて、わが父と親しき、さる素封家に養はれしが、今はろの家に一粒種のまお娘、夏痩の指に重たき琴の爪をかおつめり。あひ見るたびに小さき胸には、命の恩人とおもひて、心からの感謝を捧ぐれど、人目の關のしげゝれば、何とおくうしろめたくて、なまじひに口も利かず、げに葛の

葉のうらおもてある世の中に、乙女の心は雪山の谷の間に、白く映うる山百合の花より潔かると、夏の小河の堰かれてはめや增る水瀨のほとりをさすらへて、山杜鵑の鳴く音にいひ知らぬ哀しみをおぼえし。たゞしハイネの詩集といふ小道具は持合せず。

かゝる次第なれば、何おりとも仰せられてよと、口に蜜を哺まねば、おもふことも充分にえいはぬ無骨、何の無心ぞと片唾を呑まぬばかりおるを、輕く受けて、實は書いて頂きたい者がおざりまして、と躊躇するに我も胸悸めき、われら弘法大師と同國の出生なれど、至て仲惡しく、日本三名筆に算へられたる師の坊を鼻ッ先に控ゑおがら、その踵にも手の届かぬ無念さ、丹青にも心得がおざらねば、雲を描けばテモ固さうおックヲ芋と、半疊をうちおまれ、『一』の字を引けば成程辛張棒が横に倒れかゝつた意匠は新らしいおどと冷かさるゝほどおれば、餘の儀は何なりとも御意あれや、筆だけは御免さふらへ、たゞし川添の一本柳、おのづからおる春の色、染め出すやうす紅梅の卷紙に、いとしき御方へまねらする走り文字おらば、我折れ

わざくれ、沾らんかお遊女八重桐の多能には及ぶべくもあらねど、隨分頼まれぬでもおしと異おあとに自慢をすれば、恨めしげにそのやうおもの欲しくはおざんせぬ、彩つた木像、無口お姿繪、それも望みでおし、あおたは御存知のはずの妾が一生、極く手短かに書いて下されといふに愈よ困じ果てたりしが、あれも前世の約束おとゝ、例の一閑張の机に向へば、あら不思儀や、挽物細工の硯箱はいつしか時代の高蒔繪、硯は眞珠墨は瑪瑙、箒のやうな禿び筆の、毛は優曇華の白蕚か、おのづからある珊瑚の管に生えたるやうあり。さて水晶を粉にして漉き成したるかとおもはるゝ紙を舒べ、趣向の思案のと暇取るは、髪結床を一軒々々に覗きこんで、どおが一番安くて、上手で、奇麗だらうといふ手合のするおとなり。須らく下駄にて霜柱を一とおもひに蹈みくだくが如くあるべしと、大に力味たるとおろは立派おりしが、〽タッタ三句『泣きぬ、笑ひぬ、而して默しぬ。』とあろ認めけれ、あれがお前さまの一生、亦僕の一生、おろらくは誰さまもかやうなものなるべしと、いつに似す我おがら麗はしく出來上りたる水蓋のあと、大宮人の櫻狩といはまほしき風情にあり

て、お客さまをもうち忘れ、ゆつたりと眺めゐたりしが、おもひぞ出づるよしおしおとの、それよ、わが恩人は今より十歳も前の春、猫が戀するうら庇をなぐつて櫻の吹雪ひら〳〵、鐵燈籠のうす明を慕めて、白胡麻を蒔きたらむおとき花崗の敷石に、一刷けうす紅點けたるそのおぼろ夜おりけむ、末期の水を花の唇に甘露と含み、桃の頬いつしか菫の紫色にかわりて、時しも入相の鐘に散る葩の哀れを袖に止め、あの世へ旅立ちたまひしと聞きし翌々朝、空は雲雀の音より白み初めたる曉を待ちかねて子供のことおり、かつは心安き家なりければ、案内もおく、駈けつけ、柩の前にうち伏し、泣いて、泣いて、私の身代りにお前は逝んで下されたのうと、腹の底の方にてかこちたるも夢おれや、白木の位牌、白張提灯に送られてお前がゆくとき、お伴をしたゝめ學校を休み、茶昆の烟の吹きはれて星影葉越に見ゆるまで歸るおとを忘れ、いたく母さまに叱られたげお。それよりはわが心平おらず、堤を破る秋の水、滔々と鳴てすさまじく、白雨の箭をそゝぎて芳はしき草村を闇に葬り、麗はしき花の莚を泥に蹂り、地には人の世を攻め皷、天には風の靈が、人の世

の零落を、心地よげに奏つる二十五絃の玉あられ、禍福の側杖にうたれ、名利の絆にいましめられ、鳴のはね搔百羽搔、たのしき日とてはあかりしものを、ゆくりなくうつゝに邂逅しおとよと、ふり向けば、畫に視る天女の、翅だけを收めて端座し女のおれは又何として、鬢のほつれは蛇となりて蠢めき、白魚耻しき手の指、一々に扯れて蝶となり、うすものに似たる羽は、紫、紅梅、萠黃、うす藤のいろ〳〵となり、明け放したる障子の外に出でんともせで室内を翔けめぐりぬ。うたてやな花のおんかんばせ、白蠟おゝに溶け去りて、さしも凍れる煩惱の塊、ア、觀すれば本來空なるをや、我も物狂はしうなりて庭に躍り出で、亡き面影を追はんとすれば、桔梗、苅萱、女郎花、歩むにからむ蔦かつら駿河判紙の小捻あらおくに、えにしの絲目はふつりと切れ、身は空蟬のうつゝにありて、萩の上にたふれ伏しけるよ。不圖心つきて眼を睜れば臂はもとの古机の上兄さん、蚊帳が吊れましたからお休みなさい。

一鉋削らまほしき蚊柱を、石菖鉢の蔭にうづくまれる蝦蟇のハタと睨まへたる、淋

ひしくブラ下れる盆提灯に透かして見れは白眼達磨とも見ゆめり。わが魂は夏草のかをりにうたれしか、蝦蟇の精はわが手枕の夢に通ひしか、蝶が莊子ありや蟇は天竺德兵衛か、

ひき蛙汝變化の術あるか

と嘲りたるもつたおしや。

附鳳攀麟

小松緑

近頃故ありて鏡を破る、心懷懊鬱として耐ゆべからずと誰も、而かも身邊多少の纏累を脱して聊か書を讀むの閑を得たり、乃ち隨ふて感ずれば隨ふて筆す、題して『附鳳攀麟』と云ふ所以のものは古人の糟粕を嘗めんと欲するの意あり。

大國も小國も　噫均しく皆な亡びざるべからざる乎、モンテスキユー曰く『國小なれば外勢の爲めに斃され、國大なれば内弊に由りて敗る。斯の二重の不幸たるや、善政と惡政とに拘はらず平民政躰にも貴族政躰にも共に落ち來る所のものあり。是れ其事態に隨伴して離るべからざるの厄運にして到底救治の術なし』と。果して眞ならば洵に寒心冷肝すべきに非ずや。

然れども大凡蟲の生ずるは物先づ腐れば也。若し克く物の腐爛を防遏するに於ては啻に内より蟲の生ずる患なきのみならず亦外より蟲の襲ひ來るに由なからんとす、此の時に當つては固より其物の大と小とを論ずるなき也。故に蕞爾たる彈丸黑子の

典も清鮮の鋭氣内に充つるの際に當てや波斯十万の猛勢を粉齏して優に社稷を泰山の安きに保てるに非ずや。其歴山の爲めに滅ぼされたるは國性混濁に沈み人情放漫に流れたるか爲め而已。羅馬も亦其邁往敢爲の氣に富めるの時に興り而して驕盈淫逸の心を生じたるの日に亡ひたり、其外敵を顧みれば後のゼルマン族は先のフェニシヤア人若くはゴール人よりも怯弱なりしに非ずや。故に總て國家の成敗は其の大と小とに論なく職として自家の清濁鋭鈍に是れ由るのみ、外勢の來るは偶々之に乘ずるに過ぎず。印度埃及の敗亡支那土耳古の衰頽。孰れか外より來らずして内より招きたるあとを證せざるものあらんや。永叔曰く『憂勞以て國を興すべし、逸豫以て身を亡ぼすべし』と、國家興亡の理收めて斯の數言の裡にありと謂ふべし。

馬斃れて而後群鴉來り食ふ、若し群鴉の襲來に由りて馬斃れたりと爲し、乃ち群鴉を是れ怖れて馬を養ふの策を講せざるものあらば則ち奈何。若し我にして健在せん耶百千の群狼亦何ぞ驚くに足らむや。

天下の戰國　數々勝つて天下を得る者は稀れに以て亡ぶる者は衆しと、是れ孫子の

言あり、豈千歳の下我を戒すものに非ざるなきを得んや。戰勝の虛榮に誇りて尊大自ら居り浮靡傲奢を事として切劘琢磨の志なきに至つては國家の大患之より甚太しきものあらんや。昔し晉王莊宗其の亡父の遺言を含みて鞠躬如として報復を計るに當てや國光頓に揚り氣勢の盛なる之に能く當るもの莫し、遂に燕の父子を擒にし梁の君臣を斬つて之を太廟に献したりしが、仇讐に滅び天下既に定まるに及べば則ち優人伶官の輩獨り其毒を逞ふし君臣傲放に流れ士卒離散し、王は殺され國は亡びたり後車豈誡めざるべけんや。

東披子嘗て漢唐秦隋の頻りに勝つて而かも或は僅かに存し或は遂に滅びたるを慨けり其の言に曰く『若し此の四國をして其の兵を用ゆるの始に方りて隨ふて即ち敗衂して惕然として兵を用ゆるの難を知りて戒懼する所あらしめば則ち禍敗の極當さに此に至らざるべかりしに不幸にして每擧輙ち勝てり、故に功利に狃れて患を慮る深からず、臣故に曰く勝てば則ち變、遲ふして禍ひ大あり、勝たざれば則ち變、速かにして禍ひ小あり』と、蓋し至言あり。

竊かに我國の近狀を察するに恰かも狂童が玩具の斧を振つて腐壤の朽木を仆し忽ち器の利に誇り力の大に滿心して自ら安んじ亦他を顧みざるの狀あり。我國今日の進歩が世界的文明の賜物なるとを忘れたる彼の眼光豆大の輩、膠柱彈琴徒らに主我を義とし排他を勇とし以て時に阿ねり俗に媚ぶ、縱令へ自ら呼んで日本主義と云ふも實は是れ榮螺主義のみ、驕慢獨尊、自家外皮の小堅牢を恃んで異日其身の沽に市に燒かるゝあとを覺らざれば也。嗚呼蘇子孫子をして先見の名を成さしむるものは必ず此の輩あるあらんや。漫然奇を好み矯を衒ひ爲めに遂に國家の吉凶を忘るゝは志士の事に非ざる也、

賢は國の寶あり、成らば國を擧げて悉く賢あらしめん、止むあくんば多數の偉人を輩出せしめん耶。國の盛衰は眞に人の良邪に在り、湯武は百里を以て興り桀紂は天下を以て亡びたりと云ふ。一國の大あるは土壤の大あるが故に非ず、人物の大あるが故あり、會々エマーソン集を繙き又子成の『通義』を讀むに實に東西符節を合

ずるが如きものあり。

The greatness of a nation is not known by its great cities armies or navies but by the Kind of men it produces.——Emerson

有二是國一者、非下有二是國之城池草木一之謂上也、有二是國之士一也。——子成

初め羅馬の未だ鵠起せざるに當りピラス王屢々之を破る、而かも懸軍萬里遂に事に益なきを覺りしかば茲に和を講せんと欲し、羅馬の使節を遇するや時に萬金を投じて彼を誘惑せんとし時に大象を驅つて彼を脅嚇せんとせしが、一として其効なきを觀、更に人を派して羅馬の國情を探らしむ、其人歸り報じて曰く羅馬の庶民其言動云爲堂々として王侯の氣慨あり羅馬は遂に征服すべからずと、於是乎ピラス王絶望して引去れりと傳ふ。羅馬勃興の基因を以て或は甲兵の利に歸し或は山河の勝に求むるものありと雖も實は人なり。大清四百餘州、土耳古方百餘萬哩、豈乎として風燈累卵の如きは何ぞや、人なければ也。大艦巨舶も千將莫耶も金科玉條も人なければ亦只無用の長物にして終らん而已。嗚呼人なる哉人なる哉、鐵肝の人、石腸の人、義を思ふの人、利を顧みざるの人、家を忘れて國を憂ふるの人、是豈國の寶に非ずや。

危機の方今　最も缺くべからざるものは大局を達觀して永遠の經綸を立つるの人なり。益友某之に適し近頃大澤を出て、忽ち青雲に躋れり。同人私かに相慶す、蓋し國士の事を爲す固より朝と野とを論せざるなり、要は只其孰れか最も所信を貫き國利を謀り民福を致すに便なるかを顧みる而已。而かも時に瞶々の徒あり宮闈娟嫉の心を以て他人に擬し甚だしきは友人を誹らんとす、蛙鳴蟬啼往々直士をして顧眄憤懣に耐へさらしむ、某の寛懷固より此輩に誤らるゝものに非ざるべしと雖も、三月の日子を以て聳目駭耳大業を擧けんと期せりと云ふもの有り、果して然らば過てり、某年少氣鋭加ふるに推輓其人あり、徐に事を成さんと欲せば何事か遂げざらんや。前途は悠遠好機は今日を以て始まり今日を以て終るものに非ず、時若し利あらず

んば假りに異日の地盤を造くるに止むるも亦可ならずや。功名を咄嗟の間に、求むるは目下の危局に處する所以に非ず、孔子嘗て卜商に答へて曰く『速かにせんと欲する勿れ、小利を見る勿れ、速かにせんと欲せば達せず、小利を見れば大事成らず』と。某は所謂大局を達觀して永遠の經綸を立つるの人なり、俗流の曉々に僻易して仲尼の笑ふ所とならざるは同人の信して疑はざる所あり。

賴襄を論ず

山路 愛山

本書編纂の當初本編収錄の承認を乞ひしに山路氏直ちに書を寄せて「御申越の趣了承あれば餘り惡作なれば云々」と申越されたれど、こは山路氏現時の筆に非ざるも亦卓絶の快作たるを免れず强ひて乞ふて本書に收むるの榮を得たり讀者之を了せよ

編者

文章即ち事業あり、文士筆を揮ふ猶英雄劍を揮ふが如し、共に空を擊つが爲めに非ず爲す所あるが爲也。萬の彈丸、千の劍芒、若し世を益せずんは空の空なるのみ、華麗の辞、美妙の文、幾百卷を遺して天地間に止るも、人生に相渉らずんば是も亦空の空なるのみ。文章は事業なるが故に崇むべし、吾人が賴襄を論ずる即ち渠の事業を論ずる也。

賴春水大阪江戸港に在りて教授を業とす、年三十三にして室飯岡氏襄を生む、時に安永九年なり、正に是れ光格天皇御即位の年、江戸の將軍德川家治の在職十九年、田沼意次父子君寵を恃んで威權赫灼たる時となす。王政復古の預言者、文運改

革の指導者たる大詩人は斯の如くにして生れたり。呱々乳を索むる聲、他年變じて社會を呼醒し、人心を驚異せしむる一大喚叫と變ずべしとは唯天のみ之を知りたりき。

明れば天明元年、春水本國廣島藩の聘に應じて藩學の教授となれり、其婦と長子とを携へて竹原に歸り父を省し、更に嚴島の祠に詣づ、裏は襁褓の中に龕前に拜せり。竹原は廣島の東十里に在り煙火蕭條の一邑にして頼氏の鄕里たり。春水の始めて仕ふるや當時藩學新たに建つに會し建白して程朱の學を以て藩學の正宗となさんと欲す。議者其偏私を凝ひしかば彼は學統論を作りて其非難を辯駁せり。

春水の斯の如くに程朱の一端に奔りし所以のもの、決して怪しむに足らず、何となれば渠は選擇の時代に生れたればなり。蓋し德川氏天下を平かにせしより、草木の春陽に向つて萠芽するが如く、各種の思想は泰平の搖籃中に育てられたり。久しく禪僧に因りて有たれたる釋氏虛無の道は藤原惺窩、林羅山の唱道せる宋儒理氣の學に因りて壓倒せられ。王陽明の唯心論は近江聖人中江藤樹に因りて唱へられ、古文辭

派と稱する利功主義は荻生徂徠に因りて唱へられ、古學と稱する性理學は伊藤仁齋に因りて唱へられ、儒教と神道とを混じたる一種の哲學は山崎闇齊に因て唱へられ各種各色の議論は恰も鼎の沸くが如く沸けり。元祿より享保に至る迄人各、自己獨創の見識を立てんとを競へり。斯の如くにして人心中に伏藏する思想の礦脈は悉く穿ち出されたり。支那二十二朝を通じて顯れたる各種の思想は德川氏の上半期に於て悉く日本に再現せり。創始の時代は既に過ぐ今は即ち選擇の時代なり。紛々たる諸說より其最も善きものを擇んで之に從はざるべからずとは志ある者の夙に唱導する所なりき、渠は斯る空氣の中に棲息し、柴野栗山、尾藤二州、古賀精里等と共に朱儒を尊信して學統を一にせんとするの黨派を形造りたりき。幕閣が異學の禁を布きたるは寛政元年にして蓋し此黨派の輿論を採用せしに過ぎざる也。

春水の名は其二弟春風杏坪と共に此時既に學者間に聞へたりき。彼は朱子派の儒者として端亮方正の君子として、殊に善書の人として、其交遊の中に敬せられたりき。彼の未だ出て、仕へざるや其朋友等相共に廣言して曰く百萬石の聘に非んば應せ

ざるべしと、襄が春水より繼承せし血液は此の如く活潑なるものにてありたりき。

而して春水の室、即ち彼の母も亦尋常の婦人に非らず襄が幼時の教育は實に彼女の自ら擔當する處なりき。思ふに賴氏二世共に婚姻の幸福を有せり、春水は學識ある妻を有し、襄は貞節なる妻を有す賴氏何ぞ艶福に富めるや。

烏兎匆々呱々の聲は咿唔の聲に化せり、襁褓中の襄は長じて童子となれり、教育は始められたり、藩學に通へる一書生は彼が句讀の師として、學校より歸る毎に彼の家に迎へられたり。而して母氏も亦女紅の隙を以て其愛兒を教育せり。後來の大儒は屢々温習を懈り屢々睡れり。聰明なる兒童には唯器械的に注入せらるゝ句讀の如何に面白からざりしよ、！、彼は此時より他の方向に向つて自ら教育するとを始めたり。彼は論孟を抛ちて繪本を熟視せり、義經、辨慶、清正の繪像を見てあどけなき英雄崇拜の感情を燃せり。嗚呼是れ渠が生涯の方角を指定すべき羅針に非すや、彼は童子たる時より既に空文を厭ひて事實を喜べり。

此頃政治世界局面は松平定信に因り一變せり、將軍家治の晩年は正に是れ天下災

害頻りに至るの時なりき。天明三年襄年四歲信州淺間山火を發し灰關東の野を白くし、次で天下大に飢へ、飢民蜂起して富豪を侵掠す。若し英雄ありて時を濟はずんば天下の亂近くぞ見へにける。是より先き定信安田家より出てゝ白河の松平氏を繼ぎ、賢名あり、年饑ゆるに及んで部内の田租を免し婢妾を放ち節儉自ら治む寛政七年元旦慨然として歌ふて曰く少小欲レ爲二天下器一誤將二文字一被二人知一、春秋回首二十七、正是臥龍始起時。此年家治薨じ家齊十五歲の少年を以て將軍職を嗣げり、時勢は定信を起して老中となせり。定信起てり、先づ從來の奬政を矯め、文武を勵まし、節儉を勤め以て回復を謀れり。當時松平越州の名兒童走卒も亦皆之を知る襄も亦其少さき耳の中に越州なる名詞挿んで忘るゝ能はざりしあり。誰れか圖らん後來此人乃ち襄が著書を求むるの人あらんとは、人間の遭際固より夷の思ふ所にあらず。

賴氏は寧馨兒を有せり。襄の學業は駸々として進めり。寛政三年彼れ年十二、立志編を作りて曰く噫男兒不レ學則已、學當レ超レ群矣、古之賢聖豪傑、如二伊傳一如二周召一者亦一男兒耳、吾雖レ生二于東海千歲之下一、生幸爲二男兒一矣、又爲二儒生一矣、安可レ不下奮發

立レ志以答二國恩一以顯中父母上哉、翌年春水の祗役して江戸に在るや、襄屢々書を廣島より寄せて父の消息を問ふ、書中往々其詩を載す。春水が交遊する所の諸儒皆舌を卷きて其夙才を歎せり。薩州の儒者赤崎彦禮、襄の詩を柴野栗山に示す、栗山は儒服せる豪傑あり、事業を以て自ら任ずる者也、襄後年之を評して曰く奇にして俊と彼は固より英才を詩文の中に耗らす事を屑しとせざりき。今や友人春水の子俊秀斯の如きを見て、彼は曰へり千秋子あり之を敎へて實才を爲さしめず乃ち詞人たらしめんと欲する乎、宜しく先づ史を讀んで古今の事を知らしむべし、而して史は綱目より始むべしと。元禮薩に還るとき廣島を過ぎ襄に語るに此事を以てす。嗚呼是れ天外より落ち來れる「インスピレーション」たりし也。當時栗山の名が如何計り文學社會に重かりしかを思へば彼の一言か電氣の如く少年賴襄をして鼓舞自ら禁ずる能はざらしめたるや知るべきのみ。大なる動機は與へられたり、大なる憤發は生せり、彼が後年史學を以て自ら任ずる者蓋し端を此に發す。

史學なる哉、史學あるかな、史學は實に當時に於ける思想世界の藥石あり、禪學廢

して宋學起り宋學盛んにして陽明學興る一起一倒要するに性理學の範圍を出でず抽象し又抽象し推拓す到底一圈を循環するに過ぎず議論愈高くして愈人生に遠かる斯の如きは當時の儒者が通じて有する所の弊害なり、史學に非んば何ぞ之を濟ふに足らん。曰く唐、曰く宋、或は重厚典雅を崇び、或は清新流麗を崇ぶ時世の推移と共に變遷ありと雖、究竟清風明月を歌ひ神仙隱逸を詠じ放浪自恣なるに過ぎず絶へて時代の感情を代表し、世道人心の爲めに爲めに歌ふものあるなし斯の如きは當時の詩人が通じて有する所の弊害なり、史學に非んば何ぞ之を濟ふに足らん。今や二個の岐路は襄の前に横はれり、一は小學近思錄の餘り多く乾燥せる道なり、一は空詩虛文の餘り多く濕潤せる道なり。憐れなる少年よ爾若し右に行かば爾の智慧は化石せん。爾若し左に行かば爾の智慧は流れ去らん只一道の光輝あり爾をして、完全なる線上を歩ましむるに足らん即ち史學也。

寛政八年襄年十八、叔父賴杏坪に從つて東遊し昌平黌に學び尾藤二州塾に在り。此行一の谷を過きて平氏を吊ひ、湊川に至りて楠氏の墳に謁し。京都を過きて帝京を

見、東海道を經て江戸に入る。到る處俯仰感慨、地理に因りて歴史を思ひ、歴史に因りて地理を按じ、而して其の吐て詩藻とするもの乃ち宛然たる大家の作也。孤鴻既に鷄群に投ず、彼の才の雄なる同學の諸友をして走り且僵れしめたるや想見するに堪へたり。彼が線香一炷の間を課して四言三十首を作り以て其才を試みしは實に當時に在りとす。

讀者若し渠が楠河州を詠じたるの詩を讀まば如何に勤王の精神が渠の青年なる腦中に沸々たるかを見ん、渠をして此處に至らしめたるものは何ぞや。嗚呼是れ時勢なるのみ。夫の勤王に狂せる上野の處士高山彦九郎は昔し嘗て春水と相識るものなりき、而して彼か寄二語海内豪傑一好在而已と遺言して筑後に自殺したるは實に寛政五年にして襄が年十四の時なりき。蓋し元和偃武以來儒學の發達と共に勤王の精神は發達し來り、其勢や沛然として抗すべからず或は源光圀をして楠氏の碑を湊川に建てしめ或は新井白石をして親皇宣下の議を呈出せしめ、或は處士竹内式部をして公卿の耳にさゝやひて射を學ひ馬を馳せしめ、或は兵學者山縣大貳をして今の朝廷は

羈囚の如しと歎息せしめ、或は本居宣長とありて上代朝廷の御威稜を回想せしめ、或は蒲生君平とありて涙を山陵の荒廢堙滅に濺がしめ勤王の一氣は江戸政府の鼎猶隆々たる時に在りて既に日本の全國に磅薄したりき。寛政四年即ち彦九が死せし前年に方りて柴野栗山大和に遊び神武天皇の御陵を訪ひ慨然として歌ふて曰く遺陵纔向二里民一求、半死孤松數畝丘、非レ有二聖神開二帝統一誰教二品庶脱二夷流一廐王像設專二金閣一藤相墳塋層二玉樓一百代本支麗億、幾人來レ此一回頭、而して自ら陪臣邦彦と署す。襄や實に斯の如き時勢に生れたり。宜なるかな彼か勤王の詩人として起ちしや夫れ英雄豪傑は先づ時勢に造られて、更に時勢を造るもの也。襄の幼き耳は勤王の聲に覺されたり、而して彼は更に大聲之を叫んで以て他の未だ覺めざるものを覺さんとせり。

跋ある儒者尾藤二州は春水の妻の姉妹を妻として春水と兄弟の交ありき。襄後年彼を評して曰く雅潔簡遠と彼の人と爲り實に斯の如くありき。彼は今春水より其鳳雛を托せられたり、彼は喜んで國史を談したりき、而して是實に襄の聞くを喜ぶ所な

りき、夕日西に沈んで燈を呼ぶ時、一個の老人年五十二、一個の少年と相對して頻りに戰國の英雄を論ず一上一下口角沫を飛ばして大聲壯語す。二更、三更にして猶旦輟めざるあり、往々にして五更に至る。時に洒然たる一老婦人あり室に入り來り少年を叱して去らしむ老人顧みて笑ふ當時會話の光景蓋し斯の如し。

襄亦柴野栗山を訪へり。襄が栗山に於ける因緣誠に淺からざるあり。今にして相遇ふ多少感慨あからんや。栗山問ふて曰く、綱目を讀みしや否や、答へて曰く未だ盡く讀む能はずと雖も只其大意を領せりと。嗚呼唯其大意を領せりの一句即ち襄が終身の讀書法也。栗山頷て曰く可也。

襄江戸に在る一年にして去れり、而して彼は終に再び江戸の地を屠むことを得ざりしも也。彼の還るや時正に初夏東山道を經て歸れり、爽山層巒翠挿レ天、濛々山驛雨爲レ煙、蓋し當時の光景也。

父は光れり、子は曇れり、久太郎義近年兎角放縱に有之浪遊に耽り候故、親戚朋友切誡懇諭も仕候得共不相改、當月五日竹原大叔父病死仕候に付爲弔禮家來添差遣仕

候處途中より逐電仕候と悲しむべき報知の賴杏坪より九月十九日付にて其友篠田剛藏に達したるときは正に是れ春水が赤崎元禮と共に特典を以て昌平黌に經を說きし年なりき。宿昔青雲の志今や漸く伸びて聲名海内に揚れる時に方りて、其愛子は、特に龍駒鳳雛として、望を交友より屬せられたる愛子は、蕩兒とならんとせり。一榮一辱、一喜、一憂、世態大概斯くの如し、然れども賴家も日本も賴襄が一たび血氣の誘惑に遇ひしが爲に多く損ずる所あらざりし也。當時大坂の中井履軒は襄を責めて不孝の子なりとなし相見ることを許さず、親戚ある某は襄を以て無賴の子なりと云ひ藩人は襄を以て國恩を蔑ろにするもの也と議せしかども襄の叔父は善く襄の志を知るものなりき。彼が篠田に與へたる全じ書簡の一節は襄の爲めは好個の辨護者たるに足れり。曰く然し狂妄なりとも宿志も有之事と相見候へば」と襄の擧動は如何にも狂妄に見へしなるべし然れども叔父は其中に一片の志あるを看取せり叔父既に之を看取す後人何ぞ紛々をする。

賴襄の誘惑が如何程强きものでありしか、而して彼の爲せし過は如何程大なるもの

でありしか、而して彼が此過失の爲めに陷りし、(或は好んで進み入りし)境遇は如何あるものでありしか彼の傳を書くものは皆彼の爲めに之を諱めり、之を諱みしが爲めに終に曖昧に陷れり頼襄の生涯は猶一抹の横雲に其中腹を遮斷せられたる山の如くあれり只之が結果として知るべきは長子元協を生みし新婦御園氏の離別と京坂間をさまよひ歩きしとと數年間家に籠居せしゝと仕籍を脱し叔父春風の子代りて元鼎春水の嗣となりしとのみ而して彼自らは當時境遇を寫すに窮愁の二字を以てせり、彼は實に此間に於て人生無數の憂患を味ひし也、人間の生涯か如何計り辛酸あるものであるかを味ひし也。之を聞く廣島より嚴島に至る途上に一個の燒芋屋(?)あり其看板は即ち彼の書きし所ありと、彼れの家に錮せらるゝや屢〻大字を書して之を賣れり思ふに其看板は即ち彼が當時の筆あり千古の文士も一たびは燒芋屋の看板書きとあり下れり。

不名譽ある放蕩の結果は彼をして其父の志に違ひ頼家の嫡子たる權利を失はしめたり、然れとも彼れ頼家の嫡子たる權利を失ひしが爲めに著述を以て世に著るゝを得たり。

閉レ門脩レ史出レ門遊、時迢三吟朋一上三書樓一落日蒼茫千古事、毛陶戰處是前洲、彼が日本外史の編述は當時に始れり。彼の自ら記す所に因りて之を按するに文化三年六月には外史を草して既に織田氏に及べり彼時に年二十七、而して其年三十に及んでは既に全く稿を畢れり知るべし日本の文學史に特筆大書して其大作たるを誇るべき日本外史は實に一個の青年男兒に成りたるものあるとを。是れ實に驚くべし。而も人若し何故に彼が外史の編述に志したるかを知り更に其著の目的と其結果との太だ相違せしことを察すれば更に一層の驚歎を加ふべし。蓋し彼は其生涯の後年に於てあろ所謂閑雲野鶴、頗る不羈自由の人とはありたるあれ當時に在りては猶純乎たる封建武士の子たりし也。而して彼の人と爲りも亦容易に父母の國を離れ得るものに非りし也。彼は温情の人あり、恩に感じ易き人あり、知遇に讐るゝ爲には何物をも犧牲に供し得る人也彼れ奚ぞ容易に父母の邦を棄得んや容易に天下の浪士と也得んや彼は智識に於てあそ極めて改革的進歩的の男子ありしあれ情に於ては極めて保守

的の人物たりし胄山昨送レ我、胄山今迎レ吾、默數山陽十往返、山翠依然我白鬚、故郷有レ親更衰老、明年當ニ復下ニ此道一、彼は封建の世界、道路の極めて不便なるときにすら、故郷の母を省する爲には山陽道を幾たびも往還するとを辞せざりき。彼が菅茶山に與ふる書を讀むに其邦君の仁恕なるを稱し且曰く天下之士誰不レ被ニ其國恩一若レ襄即可レ謂ニ最重一矣と彼は如何にしても其邦君を忘るゝ能はざりき。斯の如きの彼なるに彼は青年の時に於て既に封建を非とし自ら封建以外の民たるを期せりとは吾人の決して想像し能はざる所なりされば彼の外史を書くや亦實に此を以て大日本史が水藩に於るが如く藝藩の文籍とおさんと欲せしに過ぎざるのみ、彼が備後に在るとき築山奉盈に與ふる書に曰く愚父壯年之頃より本朝編年之史輯申度志御座候處官事繁多にて十枚計致かけ候儘にて相止申候私儀幸隙人に御座候故父の志を繼此業を成就仕、日本にて必用の大典と仕、藝州の書物と人に呼せ申度念願に御坐候と其松平定信に與ふる書に曰く少小嗜レ讀ニ國乘一毎病ニ常藩史之浩穰一又恨ニ其有レ闕一云々彼の光を大日本史と競はんとするに在りしや知るべきのみ。而して其の躰裁に至りて

も亦一家私乘の體を爲し藩主淺野氏の事を書するときは直ちに其名を稱せざるが如き愈以て外史の本色を見るべき也。其後に至りて所謂拮据二十餘年改删補正幾回が稿を改めしは固る疑ふべからずと雖も筆を落すの始より筆を擱くの終りに至るまで著者の胸中には毫末も封建社會革命の目的若くは其影すらもあらざりしあり誰れか圖らん此眇々たる一書天下に流傳して王政復古の預言者となり社會の改革を報ずる曉鐘とならんとは。

文化七年の冬襄年三十備後に行き菅茶山の塾を督す、築山奉盈に與ふる書又曰く去冬此方へ參候一件家長共私へ一向知らせ不レ申間際に相成漸發言仕候私好み不申事に御座候へども己に願出の義今更辞退も難仕急に追立られ能越候其以來書生の世話無怠仕候へども何分不納得之義に御座候へばつまらぬ者に御座候と然らば則ち彼の備後に行きしや固より其の好む所に非ざりし也。紙上功名添ニ足蛇一漫追ニ老圃一學ニ桑麻一野橋分レ徑斜通レ市、村塾臨レ流別作レ家、讀授ニ兒童一遇ニ生字一行沿ニ籬落一見ニ狂花一笑吾故態終無レ己、時復敲レ案書ニ白沙一誠に草庵にて馬子牛飼の外は談話する人も

おし、回頭故國白雲下、寄レ迹夕陽黄葉村、彼が當時の落莫知るべき也。獨り茶山の彼が才を愛して其薄命を憫み誦讃應和以て日を度るあるのみ、彼が菅茶山翁遺稿の序に曰く余讀レ書處、與二翁室一隔二水竹一相對、毎レ有二評論一、使二童生擎レ卷往復一、以レ筆代レ舌、如レ此周歳と當時の狀見るが如し。然れども彼は終に此所に止る能はざりし也。彼が廣島に在るや既に都會に住して名を天下に成さんとするの志あり、而して病雀籠樊に在り宿志未だ伸ひず其備後に遣られし所以は以て彼が沖霄の志を抑留し漸く之を馴致せんが爲めのみ而も彼れ奚そ終に籠中の物ならんや彼は福山家老の方に詩會に招かるゝとき菅太中の養子のあしらひにて呼棄てにせらるゝに不平あり、妻を迎へよと勸めらるゝに不平あり、出てゝ事ふべしと勸めらるゝに至りて愈不平あり、即ち書を茶山に與へて曰く使裏禽獸、則可、苟亦人也、即何心處之、亦何而目以見二天下之人一乎。と彼は斯の如くにして去て京師に遊べり時に文化八年年正に三十一其書懷の詩に曰く聊取二文章一當二結草一効レ身未三必在二華替一其歳暮の詩に曰く一出二鄉關一歳再除、慈親消息空如何、京城風雪無二人管一、獨剔寒燈夜讀レ書、

彼が京都に住せしより聲名は遽然として擧がれり。此時に當りて學界の諸老先生漸く黄泉に歸す文化四年には皆川淇園七十四にて逝き、柴野栗山七十二にて逝き文化九年には山本北山六十一にて逝き文化十年には尾藤二洲六十九にて逝く舊き時勢は舊き人と共に去れり文學界の新時代は來れり、而して賴襄は實に其代表者となれり彼が感慨に富める詠史の詩は翼おくして天下に飛べり、彼の豐肉なる字躰は到る處に學ばれたり、竹田陳人が所謂學世傳播賴家脚都門一樣字渾肥といふもの、決して諛辭に非りし也。彼は斯くの如くに天下より景慕せられたり書生は皆賴氏の門に向つて奔れり文運は賴氏に因りて一變せられたり。彼は實に精神世界の帝王となれり、其一言一行は世人の熱心に注意する所となれり、其の言ふ所は輿論となるに足り、其詩賦は一世を鼓舞するに足れるものとなれり。彼が一度大所へ出てゝ當世才俊と呼はるゝものと勝負を決したしてふ志願は成れり。而して彼は實に天下に敵なきものとして立てり。

文化十年春水年六十八、孫元恊を提へて東遊す茶山之を襄に報す襄驚奇淀川を下り

彼等を大坂に迎へ、京都に一屋を借りて歡待旬餘弟子をして周施せしむ、相見ざる數年互に久濶を序す、思ふに春水既に老す、老ひては即ち子を思はざるを得ず彼たびひ一たびは襄が家學を繼承せずして仕籍を脱したるとを悲めりと雖も襄の名天下に高きに及んでは即ち亦其老心を慰むる所おきにあらざるべし、吾人は濃情おる父と子が幼孫を傍らに侍せしめて往事を語り悲喜交々至れるの狀を想見して彼等の爲に祝せずんばあらず翌年襄始めて歸省し孤枕曾勞千里夢一燈初話五年心の詩あり、爾來殆んど年毎に往返す

文化十二年襄父の病を聞きて再び歸省す父は死せずして元鼎死す即ち元協を以て承祖の嗣とおす、父の病少しく愈ゆるを以て京に還る襄が賢妻小石氏を娶りしは蓋し此前後に在り。此年除夜の詩に曰く爲レ客京城五餞レ年、雪聲燈影両依然、爺孃白髮應レ添レ白、說二看吾儂一共不レ眠と嗚呼爺孃豈唯白髮を添へしのみおらんや、翌年二月襄生徒を集めて莊子を講じつゝありしとき、忽ち飛報あり電の如く彼の心を擊てり、曰く春水の病急おりと、彼は卷を投じて起てり、百里を五晝夜にして行けり、

至れば即ち父の靈は既に其肉を離れてありし孝子の恨何ぞ極まらん彼は再び弟子の爲めに莊子を講ずるとをせざりき彼の喪中に在るや嘗て其友篠崎承弼に語りて曰く詩文爲レ生、不レ得レ不レ作、聊斷二酒肉與一レ內、欲レ報二罔極之萬一耳と彼は父の爲に三年の喪を服せんと欲せり。いたく自ら節抑して以て其無限の悲哀を顯はせり彼は自ら父の志に背くと多きを知れり是を以て父の死を悲しむや極めて切おりき。

文政元年彼は三年の喪を終りて終に鎮西の遊を試みたり、是より先き彼は屢々五畿及び江濃尾勢の諸國に漫遊せしかども未だ嘗て千里の壯遊を試みざりし也。此に於てか門人後藤世張を隨へ手抄杜韓古詩三卷、詩韻含英一部と外史の草稿とを携へて京を發し淀川を下り、大坂より篠崎承弼に送られて尼崎に至り、雨には即ち淹留し暗には則ち行き廣島に至りて父の墓に謁し赤間關に淹留する事半月、年々攝酒附二商舟一、磊落萬罍堆二岸頭一、清醥尤推鶴字號、鶴二人醉夢一上二揚州一の詩あり蓋し彼が酒を嗜しむに至りしは此時に始まれる也、後來梁川星巖をして其死を聞きて人傳狗彘遂爲災と歌はしめたる程の大酒家も三十九齡の當時までは酒量極めて淺かりし也嗚呼彼

は遂に酒の擒となれり吾人は問レ吾底事戀ニ此間一豊筑無ニ酒似ニ赤間一の詩を讀む毎に未だ嘗て彼の爲めに歎ぜずんばあらず夫れ春水杏坪共に齢古稀を超へたり頼氏固より長壽也、裏にして自愛せば其五十三齢に猶十年若くば二十年を加へ得べかりし也思ふて此に至る吾人は星巖が飲を嗜まずして七十に達したるを彼の爲に祝せざるを得ず、世に爲す所あらんとするの士鑑みざるべからず。然りと雖も彼が酒を嗜む太甚しきに至りし所以のもの實に其父を喪ひたる無限の憂愁を散せんとするに由る果して然らば彼の志亦憫むべき也。

彼は赤間關を發して始めて九州の地を踏めり今詩集に因りて其の行程を案ずるに先づ豊前に入り筑前を經長崎に留連し天草洋を航して島原に上陸し熊本に至り南下して薩摩に入り大隅より再び肥後に還り更に豊後に行き筑後河を下り豊前より再び赤間關に至り其所にて新年を迎へしが如し、蓋り其足迹の達せざる所唯日向一州あるのみ、九州の名山大川所謂温泉嶽、高良山、阿蘇山、霧島山、耶馬溪、筑後河の類皆彼の詩中に入らざるはなし、彼は詩に於ても實際派なり、其詠ずる所盡く取つて

以て風土記に代ふべき也吾人之を德富蘇峯氏に聞く其熊本を發する時の詩に大道平々砥不レ如、熊城東去總青蕪、老杉夾レ路無ニ他樹一、缺處時々見ニ阿蘇一と曰ふが如きは眞に熊本市外の寫眞と謂つべしと蘇峯氏は熊本縣の人也其言證とするに足る。蓋し彼と雖も時としては想像より構造したる詩を作らざりしにはあらざりし然も其實歴せし狀況を見るがまゝに寫し出すの伎倆に至つては日本詩人中彼を推して第一とおさゝるを得ず。彼の詩は未だ嘗て實地を離るゝ能はざる也。彼は高き理想の中に住するの人に非ず彼は只唯温情なる多血なる日本國民として日本國民なるが如く見る所を見し儘に聞く所を聞きしまゝに寫し出せり而して自然に吾人をして快讀に堪へざらしむ彼の詩は日本人に衣するに支那の衣裳を以てせしむるものなり、自然に是れ唐に非ず宋に非ず將た又明清に非ず、頼襄の詩也、日本人の詩也。

長崎は淫風の極めて太甚しき地なり、襄の彼地に在るや屢々遊里に誘はれたりき。今日と雖も娼閣の壁上往々其舊題を見るといへり。然れ共彼の集に因りて之を察するに彼は喜んで狹斜の遊を爲せしものに非りき彼自ら詩を作りて其所懷を述べて曰

く誰疑山谷墮ニ泥犂一、懶レ學樊川張水嬉、唯使ニ心腸如ニ鐵石一、不レ妨筆黒賦ニ氷肌一、又曰く未レ能ニ著椀換ニ觥船一、何復纖腰伴ニ醉眠一、家有ニ縞衣侍ニ吾返一、孤衾如レ水已三年と彼は喪に在るの間其愛妻とすら衾を共にせざりし也。如何ぞ獨り長崎に於てのみ墮落せんや況んや彼の此行固より空囊たりしをや古より名士は謗訕多し吾人たとひ好む所に侫する者に非るも彼の爲めに寃を解かざるを得ざる也

文政二年は赤間間に迎へられたり、廣島に歸り母を奉じ京師に入り西遊の行を終り更に母に伴ふて嵐山に遊び奈良芳野の勝を訪ひ侍輿百里度ニ嶙峋一、花落南山萬綠新、筍蕨侑レ杯山館夕、慈顏自有ニ十分春一の詩あり終に送りて廣島に還る蓋し彼れ父に報ゆる能はざる所を以て母に報んと欲せし也是を以て平素の節儉なるに似ず、母に奉もる太だ厚かりし、爾來十年屢々廣島に往復し母に伴ふて諸方に遊び其笑顏を見るを以て無上の樂とはなしたりき。

當時山陽外史の名隆々日の上るが如し、文人若し其許可を得れば恰も重爵厚俸を得しが如くに喜びたりき。然れども翻つて彼の家政を察すれば即ち貧太甚しかりき。

文政六年彼れ家を鴨河の岸三本木に買ひ水西莊と稱す所謂山紫水明處なり然も行て其舊迹を見しものゝ言に因れば一間の茅屋のみ。即ち其見るに足らざる一草舍に佳名を付したるに過ぎざるや知るべきのみ彼は自ら詩を作りて當時の境遇を序したりき曰く

今朝風日佳、北窓過ニ新雨一、謝レ客開ニ吾秩一、山妻來有レ叙、無レ祿須ニ衆眷一、八口豈獨處、輪鞅不レ到レ門、饑寒恐自取、願少退ニ其鋭一、應接雜ニ媚嫵一、吾病誰鈇鉞、吾骨天賦予、不レ然父母國、何必解ニ珪珥一、今而勉齷齪、無ニ乃欺ニ君父一、去矣勿レ聒レ我、方與ニ古人一語、

星嚴集を讀めば彼も亦屢々貧を歌へり千古の文人と雖も文學の趣味唯貴族の間にのみ行はれし卦建の社會に在つては辛ふじて不羈獨立の生計を爲すを得しのみ。當時文人の運命眞に悲しむべし。

爾く貧なりと雖も彼の家庭は幸福なるを得し也、彼の妻は彼の死後貞節を以て市尹より褒稱せられし程の人なり、彼も亦妻に對して極て溫情なる夫なりき彼九州に

遊びし時家を憶ふの詩あり曰く客蹤乗レ興輙盤桓、筐裡春衣酒暈斑、遙憶香閨燈下夢、先レ吾飛過振鐸山、と彼は其詩に屢々家庭の消息を泄らせり。而して一も其夫妻相信じ子女膝下を廻る香しき家を想像するの料たらざるはなし思ふに短氣にして剛直なる彼を和らげて大過なからしめ家を治むる清肅にして敢て異言なからしめたるものの小石氏の如きは名士の婦たるに耻ぢづと謂つべし。

彼が大納言日野資愛の門に出入し詩酒徵逐の會に侍せしは思ふに西遊より歸りし後に在らんか、日野氏は尋常の公卿に非りし也。彼は和漢の學に精通せり、其星嚴集の序を讀めば彼が多少人才を監識するの才を具せるを見るに足る然れども襄は臣禮を取りて日野氏に事へざりき。只賓として友として日野氏と交れり、且曰く魚は琵琶の鮮に非れば喫する能はず、酒は伊丹の釀に非れば飲む能はずと、而して日野氏は善く之は容れて其無禮を尤めざりき。彼が詩に所謂吾骨天賦予あるものは空言に非る也。

文政十年母と杏坪翁とを奉して嵐山に遊び遂に再び奈良芳野に行き更に近江の諸勝

を訪ふ京に還りて菅茶山の病を聞き之れを問ふ會ふに及はずして卒す忘年呼二小友一、知已獨此翁の詩あり、彼が菅茶山翁遺稿の序に曰く嗚呼吾先友海内數公、既漸凋落、獨有二翁在一猶二碩菊之不レ食、而今復如レ此、吾將誰望哉、と秋風落葉を掃ふが如く名士漸く墓中に入る多情なる彼は深く人間の待むべからざるを感せしならん此年將軍家齋軍職に在りて太政大臣を兼ぬ是れ蓋し史上未曾有の事なり。彦根の城主井伊直亮、桑名の城主松平定永は京都に遣はされて大拜の恩を謝せり。定永は即ち定信の子也、此行定信其臣を襄の家に遣り禮を舁くして外史を求めしむ。定信の賢は襄の稔聞する所なり。襄は喜んで之に應じたり、其知己の義に感ずれば也。後三年を隔てゝ天保元年定信卒す、襄乃ち文を作りて之を祭れり。當時天下第一の賢人は天下第一の文人を知れり彼が心血の塊たる外史は松平定信に因りて其有用の著なるとを證せられたり彼が宿昔の心事畧成れりと謂つべき也。

襄の交遊天下に遍し必しも一々之を記す能はざる也、而して其尤も莫逆なるは即ち篠崎承弼の如きあり、彼は襄に推服して置かざりしなり、之を聞く承弼は中才の人

なりと雖も極めて博聞强記おりしかば襄は屢〻彼に問ふて疑を決する所ありしと其年輩に於て襄よりも老人おるは即ち太田錦城は十五歲の兄おり大窪詩佛は十四歲の兄なり其年襄よりも若きは即ち齊藤拙堂は十八歲の弟也、梁川星巖は九歲の弟也、大塩平八郎は十六歲の弟也。襄と平八郎と交を訂せしは蓋し襄の晩年に在り、當時平八郎强壯にして氣鋭、陽明の學を脩めて議論風生す、而して襄は未だ嘗て之と學術を論ぜしおとおらざりき。唯抔酒の間に於て交情を温めしのみ。而も彼の烱眼は早くより平八郎の豪傑なるを看取せり。古賀溥卿は嘗て平八郎が江戸に來りしときは恐るべき人物なりとして遇ふおとを許さゞりき。二人の眼明かなりと謂つべき也。天保元年襄胸痛を患ひしが久ふして癒へたり此年古賀溥卿其藩侯の爲めに絹一幅を寄せて畵を求む、襄は故人の求めなりとして之を甘諾する能はざりき、彼は儒者たるを甘んぜざる者おり、何ぞ況んや詩人文人たるを甘んぜんや。又何ぞ畵師の如く遇せらるゝを喜ばんや、即ち二絶句を作りて其布に大書し之を返せり、其一に曰く

曾謝横レ經弄レ翰儒、寧能餘技備二觀娛一、胸中書本猶堪レ獻、彷彿鵠鳳七月國、顯高く

眉蹙まれる老人は其眼を光らせて筆を揮へり彼時に五十一英氣堂々猶屈する所おきも也而して健康は彼の雄心に伴はず病は突然彼をして永く默せしめたり。

東山六六峯何處、雲鎖二泉臺一慘不レ開、歲在二龍蛇一爭脫レ尼、人傳趨葉遂爲レ災、一朝離レ掌雙珠泣、五夜看レ巢寡鵠哀、彼此撫來最惆悵、海西有レ母望二兒來一是れ梁川星巖が東海道に於て襄の訃音を聞きて寄せし所おり。其言何ぞ悲しきや。襄は天保三年九月二十三日を以て其の愛妻及び十歲の又二郎と七歲の三木三郎とを殘して逝けり。

是より前一年長子元協年既に二十、江戸に祇役する爲めに廣島より至り、襄と京師に相遇ひ、江戸に至らば新に室を築るて父を迎ふべしと約せり。襄喜んで再び江戸に下り大に其伎倆を試みんことを期せり、三年の春畵富士に題して曰く自レ別二芙蓉一三十年、空於二圖畵一辨二雲煙一、再會盪レ胸當レ有レ日白頭相照兩皤然と、然れとも芙蓉は終に再び日本大詩人の面目を見るとを得ざりき六月十二日彼は咯血せり、而して醫は其不治なるを告げたり、襄曰く吾上に母あり、志業未た成らず、たとひ死せざるを得ざるも、猶醫療は加ふべしと。彼は母の憂へんとを恐れて往復の書牘必らず

自ら筆を把ると常の如くしたりき而して其晩年の著述たる政記を完成せんとを欲して死する迄眼鏡を着けて潤刪に怠らざりき。彼が通議の内庭篇は實に死するに先つ三日蓐を蹴て起ち草せし所なりき思ふに松平定信は實に幕府後宮の譖に因りて將軍補佐の任を罷むるに至れり、目前の事斯の如し彼が此篇ありし所以決して偶然ならざる也而して其文整々堂々格律森嚴毫も老憊の態なし、其精力過絶なると斯の如し而も彼は終に眠れり。

彼が遺物として日本に與へたるものは即ち外史二十二卷、政記十五卷、通議二卷、日本樂府一卷、其他文集詩鈔の類となす。彼が生涯の梗槩は吾人既に之を揭たり、要するに彼は漢學者なり、然れども彼は日本人なり彼は日本人として日本の英雄を詠せり日本人として日本の歴史を書けり、彼は感情に於て歴史的なり此故に王朝の盛時を追懐しては現時の式微を歎じ寛永の士風を追懐しては近世の輕薄を詈り楠公の爲めに慷慨の涙をろゝき北條氏の專權に切齒せり然れ共彼は又智識に於て歴史的なり彼は革命に與する者に非ず哲學的の理想を有するものに非ず此故に彼は物徂徠

の如く想考的の政論を爲す能はず時勢と事情との二つは常に彼の立論の根據たりし思ふに彼をして安政文久の際に在あらしむるも彼は決して純乎たる玉政復古論を唱へ得るものに非ず必らず島津齊彬氏一流の見に仝じく先つ公武合體論を爲して時の宜きに通せしめんと欲するに過ぎざらんか。然も彼に因りて日本人は祖國の歴史を知れり。日本人は日本國の何物たるかを知れり日本國の萬國に勝れたる所以を知れり獨り理論的を知れるのみならず詩の如く歌の如き文字を以て之れを敎へられたり後來海警屢々至るに及んで天下の人心俄然として覺め尊皇攘夷の聲四海に遍かりしもの蓋そ知らん彼が敎訓の結果に非るを嗚呼是れ頼襄の事業也。

(廿六年一月作)

頑執妄排の弊

北村透谷

守宙を觀察するに途二あり。一は宇宙を「死躰」として觀るにあり、他は宇宙を「生躰」として觀るにあり、人生を觀察するの途二あり、一は人生を今世に限られたるものとして觀るにあり、他は人世を未來に亘るものとして觀るにあり。爰に於に吾人は知る、人間世に處するの途は、現在に希望を置くと、未來に希望を置くとの二岐に分るゝあるのみ。更に去つて歴史を觀るに、盛衰興亡の端多く、一去一來の跡空しきも、之を要するに、歴史の中心潮は、未來の希望を現實に適用するにあるのみ。悠々たる天と、邈々たる地の間に孰れの所にか墳墓ある者あらんや、其の之あるは、人間の自ら造れる者あり、國民の自から造れる者なり。印度自から其墳墓に埋もれたり、羅馬自ら其墳墓に沈みたり、彼等は去れり、然れとも彼等を葬りし墳墓は彼等と共に其影を徹したり、天下孰れの處にか墳墓ある者あらんや、世界は墳墓に赴くにあらず、頭を擧げて蛇行するが如き此世界は、遂に「生命」に達すべき者

あり。「記憶」渠唯だ記憶のみ、「過去」渠唯だ過去のみ、「未來」には權あり、「希望」には命あり。

過去現在未來は全宇宙の所有物にして、人間の私有にあらず、時間と空間は人間を、或る立場に繫げども、人間は過、現、未、の中心に立つて動く者にあらず。然りと雖、宇宙の人間に對するは蛇の蛙に於けるが如くなるにあらず、人間も亦た宇宙の一部分なり、人間も亦た遠心、求心の二引力の持主あり、又た二引力の臣僕あり。魚市に喧囂せる小民、彼も亦た宇宙に對する運命に洩れざるなり、彼も亦た彼の部分を以て、宇宙を支配しつゝあるものなり、その觀を以てすれば、王侯將相と彼との間に何の徑庭あらんや。

宇宙に精神あるが如く人間にも亦た精神あるあり、而して人間個々の希望は、宇宙の精神に合するにあり。人間世界の最後の希望は全く宇宙の精神に合躰するにあり。唯理論唯心論、もしくは又た唯物論、彼等何ものぞ、もしくは又た凡神教彼等何ものぞ、彼等の一を假るあとあくんば、彼等の一に僻するあとあくんば、遂に人

間の希望を達するおと能はずとするか、何が故に唯心論を惡しとするか、何が故に凡神論を惡しとするか、何が故に唯物論を惡しとするか、又た何が故に彼等を善しとするか、空々漠々たる癖論家よ、民友子大喝して曰く「ベベルの高塔を築かんとするは誰ぞ」と。

彼の唯物論、彼の唯心論、彼の凡神論、彼等は各々其使命を帶びて來れり、而して彼等は各々其誤謬を殘したり。看よ人間の歷史は、恒に善き事をなして、恒に惡しき事を爲すにあらずや。恒に眞理に近づき恒に眞理に遠かるにあらずや。恒に進歩して、恒に退歩するにあらずや。然れども記臆せよ、宇宙の精神と、人間の精神とは、恒に進歩にして、恒に退歩ある中に、ありて相接近しつゝあるにあらずや。唯心論を以て唯物論を罵るは誰ぞ。唯物論を以て唯心論を罵るは誰ぞ。彼にも粹あり、此にも粹あり、彼にも糠あり、此にも糠あり、妄に此の粹を以て、彼の粹を擊たんとするは誰ぞ。縱に此の糠を以て、彼の糠を排せんとするは誰ぞ。民友子大喝して曰く「砂丘の上にベベルの高塔を築かんとするは誰ぞ」と。

「造化は終古依然たり、而して終古鮮新あり、」とは善く言はれたるかな。宇宙は實に其中心に於て、一定の方向あるのみ、其外面に於ける進歩と退歩とは、常久に鮮新ある狀態を呈するあり、預言者、英雄、詩人、彼等何すれぞ宇宙以外の新物を貪らんや、彼等も亦た自からの墳墓を造るものなり、百年、千年、万年、あやしきはTimeあり、怖るべきはTimeあり、墳墓も亦たTimeの爲に他の墳墓に投げらるゝあり、墳墓すら其迹を留めず、曷んぞ預言者、英雄、詩人を留めんや。營々たる街頭の商兒、役々たるレボレトリーの化學者、紛々たる新聞屋の小僧、彼等も亦た彼の預言者と、彼の英雄と、彼の詩人と、其歸着する運命を同ふするあり。「腐朽わが右にあり、「死淵」わが左にあり、劒を揮ふもの誰ぞ、筆を弄するもの誰ぞ、天を談ずるもの誰ぞ、地を說くもの誰ぞ、何れに進歩あらむ、何れに退歩あらむ。然れども、讀者よ請ふ汝の謹嚴ある眼を開けよ、宇宙の大精神は一定の場所に安住せず。造化は終古依然たり、然れども、讀者よ請ふ汝の露活ある心を醒せよ、造化は

其中心に於て、宇宙は其中心に於て、必らず何程かの動あるあり。造化彼れ何物ぞ、宇宙の一表現に過ぎざるあり。宇宙既に動あり、造化豈動あからんや。地球の表面は終始依然たり、然れども其の形狀は常に變はりつゝあるなり、要は千年の眼を以て、天文臺の觀測をあすにあり。あれ其の外形に就きて言ふのみ、宇宙果して「死物」なるか、將た、又「生躰」あるか、吾人が地球と名くる此の一惑星の中に於て此の變動あり、「死躰」にもせよ「生躰」にもせよ、既にこの變動あるあり、何ぞ知らん、人間と稱する此二足動物の上に、激雷の驟かに震ふが如く、諸天群がり落ちて、火焰忽ち起りて、一指を投ずるの暇に於て、あの終古依然たる天地は、默示錄の約翰か「われ新らしき天と新らしき地を見たり先の天と先の地は既に過たり海も亦たあるあとなし」と言ひたる言葉の空の空にあらざるあとを實證するの時あらんを。

「信仰個條」彼れ何物ぞ、「繩墨」彼れ何物ぞ、否あ彼等も亦た宇宙の精神の大進步の道程に於て、何等かの必要に需求せられて出でたるものなり、彼等も彼の唯心論の如く、彼の唯物論の如く、彼の凡神論の如く、相當の敬禮を要求するの權利あるものあり、然れども彼等を崇拜し、彼等を保持し、彼等を以て唯一の標準とせんとするは何物ぞ。聖書を把つて、屑籠の中より古布と古紙とを分つが如く、或は彼を取り、或は此を取り、而して我が取る所の者は宇宙の大眞理に適へりと妄信し、他の取る所の者は一理の存するあきが如くに誣ゆるもの誰ぞ。咄、思想界に於ける病毒の本源は存して爰にあるなり。己れの取る所を奉信するは善し、己れの取る所を以て、他の取る所を妄排す、是を思想界の藪醫術と言はずして何ぞや、夫、藪醫術とは外科の醫術を言ふなり、而して其の外科たるは、人間の病原を探りて後に其治術を講究するにあらずして、外部に表はれたる病象の一部分を見て、直に膏藥を塗するに留まるあり。咄、藪醫術はいかほどに進步するとも、人世に於て何の功益するとあろあらんや。信仰個條彼れ自身は、藪醫術にあらず、繩墨彼自身は藪醫術にあらず、唯心論も亦た然り、唯物論も亦た然り、然れども個の信仰個條を擁し、個の繩墨を擁し、個の善惡論を擁し、個の唯心論を擁し、個の唯物論を擁し、之を以て宇宙を法規する只一の眞理と迷信する輩の手に於て藪醫術の本源は存するあり。

人生の意義

透谷

人間の外に人間を研究すべき者なし、ライフある者の外にライフを研究すべき者あし。近頃ライフの一字、文學社會に多く用ひらるゝに至れるを見て、ひろかに之を祝せんとするの外、豈敢て此大問題を咄嗟の文章にて解釋するあとをせんや。然るに吾人が爰にて物好きにも少しくライフの意義に就きて言はんと欲するに至りたるは決して偶然の事にあらざるあり。

ライフの一字に眞正の解釋を加へんとせば、汎く哲學、宗教、及び諸科學に渉りて之を窮めざるべからず、何とあれば、もろ〳〵の學藝は實にライフを解釋するが爲に成立すと云ふとも不可あき程あればあり。然れども、吾人素より哲學者にあらず、曷んぞ斯かる面倒ある事を議論するの志あらんや。然るに近頃吾人を評難する者あり、吾人文學界の一團を以て、ライフに關する、すべての事を輕んずる者の樣に言ひ做して、頻に攻擊を試むると覺えたり。余は一個人としては、文學界の社末

に連れる若年書生のみ、文學界全躰として受けたる攻擊に對しては、從來編輯の要務に當れる天知翁の申開ありと聞けば、余を決して「文學界」全躰としての攻擊に當る事をせず、唯だ余一個に對しての攻擊即ち人生問題に關しては、飽まで其責を負ふ積なり。然れども、讒謗罵詈を極めたるものに對しては、例令如何ある名說ありとも、又如何ある毒說ありとも、之に對して何等の答辨をも爲ざるべし、余は批評を好むものあり、爭ふを好むものあり、爭ふは爭ふ爲にせざるあり、文章の爭に於て敵を作るとも、人と人との間に於て敵を作るを好まざるあり、故に余は讒謗罵詈の始まりたる喧嘩には御暇を頂戴すべし、政黨あどの爭には隨分反目疾視してステッキ騷ぎまで遣るも好し、思想界に於て此の眞似をせば、世人誰れか之を健全ある喧嘩と言はむ。

そも人生といへる言葉には種々の意味あるべしと雖、極めて普通ある意味は人間の生涯といふ事あり。然るに、近頃英文學思想の漸く入りてより、この人生といふ一字を、彼の語あるライフに當箝めて用ふる事多くあれり。ライフとは前にも言ひ

し難問にて、哲學上にも隨分面倒あるものあるからに、其の字の意義も仲々廣きあり。人間成立の今日の有樣にも用ひ、すべての生物の原力にも用ひ、宗教上にては生命の木など言ひて之も亦た別の意義あり、その外種々の意義に用ひらるゝものあるあとは、少しく英書を解するものゝ容易に見分けらるゝ事あり。

吾人が「人生相涉論」にて用ひたる「人生」の一字は、賴襄論の著者が用ひたる字を取りしあり、吾人は其當時に於て、その著者にその字の意義を訊ねしに、著者は之をファクト（事實）の事ありと答へたり（賴襄論の著者は余が敬愛する先輩あり、議論あそ異あれ余は過去に於ても著者を敬愛するの情に於ては一點の相違あきあり但し口頭の爭ひが筆端の爭とありたるばかりあり）爰に於て余は、著者の用ひたる「人生」は人間現存の有樣といふ意義にして、決して人性とか生命とかの義に用ひたるにあらざるあとを知りたり。別に又た、賴襄論の著者が文學嫌あるあとは兼ねて之を承知せり、而して其文學嫌ある原因は世の中が華文妙辭を弄ぶを事として實際道德に遠かるを憂ふるに出でたる者あるあとを承知して居たるあり。實の所、吾人

は賴襄論を讀んで、非文學黨の勢力の餘りに强大にありて、淸教徒が爲したる如き極端にまで進みては一大事ありと心配したるあり。愛山君は文學が何處までも嫌ひあり、余は文學が何處までも好きあり。余が愛山君に逆ひたるも之を以てあり。然るに世間には「人生」といふ字の誤り易きところから、往々にして吾人を以て、ライフといふものを輕んずる者の如く認めて、氣早ある攻擊を試むる者あり。人性といひ人情といふなど、元より「人生」、少くとも賴襄論の著者が用ひたる「人生」とは其の意義を異にせり。故に余が評論したるところの「人生」も亦た人性とか、人情とか、生命とか云ふものには毛頭の關係も無かりしあり。

蘇峯先生の觀察論は、近來の大文と申すもかしあし、元よりわれら如きが讃美し奉るも恐れ多き事あり。哲學にあらざる哲學は吾人の尤も多く敬服する所あり、吾人も亦詩人哲學者小說家等が妄に眞理を貪るを惡む者あり。然れども蘇峯先生は、柔皆の詩人哲學者小說家を以て、ベベルの高塔を築くものありとは言はれざりし、神知靈覺といふ事は先生も亦た之を認められたり、赤心を以て觀るといふ事も大に

吾人の心を得たるものあり。人間は靈質二界に棲む者あり、と「現金世界」に於て言はれたる民友子の金言吾人之を記臆す、民友子は靈界を非認する人にあらざる事も知れてあり、彼の質界を非認する人にあらざる事も知れてあり。然るに世間には、あの論文を以て、理想的文學を排擊する目的より出たる者の樣に誤解して、幸ひ「人生問題」のある時あれば、彼等理想を重んずる人々は、全く人性を顧みざる者あり、足の無き仙人の樣な者ありなど、兎角京童の口善惡あき、飛んだ迷惑をするもの出來れる次第あるが、これも一つは「人生」といふ字の意義の誤解され易きに因せし者あれば、無暗に敵にあり味方にある事あく、心を靜めて「人生」の一字を玩味するなと願はしけれ。

「高蹈派」といふ名稱は、何人に加へられたる者あるか、吾人之を知る能はず、然るに例の口善惡あき京童等は、高蹈派とは足の無き仙人の事あり、足の無き仙人とは「文學界」の連中であらふなど言散らして、矢鱈に仙人よばはりせられんは餘り嬉しき事にあらず。尤も「高蹈派」一條は「人生問題」とは全く離れたる者あり。人性と

いふ字も人情といふ字も餘り見受けざれば、京童が誤解の種も自然少あき筈あり。

右の如く「人生」といふ字の意義によりては、義論も種々にあるべければ、傍より口を出す人々は能々御熟考の上にて御名論を出され可くと存ず。更に之を言へば、余（文學界といふ團躰を離れて）と愛山君との議の論燒點は、文學は必らずしも寫實的の意義を以て人生に相ら涉ざる可からざるか、或は又た理想といふものを人生に適用するなとを許すものありやの如何にあり。余は理想家でも何でも無し、唯だ餘り酷しく文學を事實に推しつけたがるが愛山君の癖あれば、一時の出來心にて一擊を試みたるのみ、考へて見ればつまらぬ喧嘩にあらずや。

愛山君も人が惡るい御方あらずや。僕が「人生相涉論」を難じて君を苦しめたる返報には、唯心的とか凡神的とか、大層あものを持ち出して、十字軍とは餘り大袈裟にあらずや、凡神的とは多分禪道を唱へらるゝ天知翁を苦るしめる積にて、唯心的とは僕をいぢめる積あらむ。成程耶蘇教から云へば唯心的は惡るかからふ、さりあが

ら耶蘇教の中にも唯心的に傾いたものも有らふし、唯物的に傾いた者もあらふ、さては又た、君の所謂唯心的とは絶對に悪るいといふのであるか、若し左樣あれば、カントでもヘーゲルでも、スピノザでも御相手に成されて、主觀的アイデアリズムでも客觀的アイデアリズムでも、絶對的アイデアリズムでも何でも彼でも擊ち平げられたが宜からうと存ずるあり。僕が少しくアイデアリズムに傾いたからとて、十字軍まで起して方々を騒がせるは、僕を人間の片端と思つて下さる事何とも有難き仕合なるが、僕は未だアイデアリズムを奉ずる者だとも云はず、如何なる學派の、如何なるアイデアリズムを取るとも云はぬに十字軍は餘り早からずや。僕の詩文が多少アイデアルに流れるは僕も知つて居る、併し、ろれは詩文の上の事にて、宗教上の問題でもなく哲學上の問題でもなし。アイデアルとリアルとは詩文の上では誰も免かれない事にて、これをしも攻擊せば文學全躰を攻擊するより外はあるまじ。君の所謂非文學とは此の意味ありや、僕は斯く信ぜざるあり。十字軍丈は御中止を願ふものに候。

賤事業辨

透谷

事業を賤しむといふ事は文學界が受けたる攻擊の一あり。而して此攻擊たるや、恐らく余が「人生相渉論」を誤讀したるより起りたる者あるべしと思へば、爰に一言するの止むべからざるを信ずるあり。

余は先づ「事業」とは如何なる者なりやを問はざるべからず。次に文學は「事業」といふ標率を以て論ずべき者ありや否やを問はざる可からず。

余は文學といふ女神は寧ろ老孃として終るも俗界の神なる「事業」に嫁するあとを否むべしと言ひたり。ろの斯く言ひたるは「事業」を以て文學を論ずる標率とするを難じたるものにして、事業其れ自身に就きて何とも云はざりしあり。然るに横鎗の人々は己れの事業を侵されしかの如く、頻りに此事に向つて鋒先を揃へて攻戰するは豈奇怪あらずや。

抑事業といふ字の普通の意義の中には、文學者が文章を書く事業の外のものを含

みてあるなり。故に事業を以て文人を論ずるは其眞相を誤るの恐なき能はず。余は愛山君の賴襄論を批評したるにあらず、愛山君が賴襄を論ずるの標率として、及びすべての他の他士を論ずるの標率として其の事業を取らんとするを怪しみたるのみ。余は此點に於て余の論旨を明かにする爲に、西行をもウォーヅオルスをも芭蕉をも引出して證人に使ひたるなり。蘇峯先生が熱海だよりの中に、賴襄の批評に長じたること、即ちクリチシズム、ヲブライフに長じたるあとを言はれたる時には余も成程と思ひて、從來よりも山陽を重く見る樣にありたるなり、余は明白に斯く言ふ、而して言ふを愧ぢざるなり、然れども余が前文は賴襄自身とは何の關係もなき事を記臆せられよ、「賴襄論」の冒頭數行が面白からぬを以て、即ち事業を標率として文章を論ずるを非なりと思ひしが故に彼の如くには論せしなれ。愛山君が三籟子に與へて、暗に吾人を責めたる書簡の中に、吾人が折々西行芭蕉の名を引出すを怪しみたるは御尤なり、然れども、いかにせん吾人は眞正の意味に於て、日本の詩人（過去の、即ち佛教的日本の）としては先づ指を彼等に屈する者なり。左りとて吾人もい

つまでか西行芭蕉の名を繰返してあらんや、追々に文學史上にて白石山陽等の諸氏の文學上の價値を論ずる心得なれば、此事に就きては御安心あらんあとを請ふにあむ。但し吾人は、白石にせよ、山陽にせよ、其の文學上の價値を論ずる譯にして、決して其事業を論ずるものにあらざるなり、事業は事業として、ろの人物論に於て之を論ずるを可とす、ろの文學を論ずるには、所詮事業は後に置かざるべからず、若し文學を事業といふ標率の上より論ずれば、政治上の論文を書く小新聞の雇記者は大概の詩人小說家より上に置かざるべからず、愛山君とて正可に斯る御考にはあらざるべし、余とて正可に山陽が一代の文豪なりしを知らざる譯にもあらざるなり。更に一歩を轉じて之を考ふるに事業を以て文學を論ずるの標率とおすに於ては、近頃民友社と自由黨の爭おどは如何に判決して宜かるべきや。星氏は事業家としては堂々たる議長なり、而して民友社は彼を呼んで眇々たる一代言といへり。民友社は文章を以て出來たる社なり若し事業を以て云ふ時は無論星氏に降參せざるを得ざるにあらずや。星氏より見れば民友子は一個の白面書生なり、即ち事業を以て民友

子を視るの標率とするが故なり。民友子は明治の文豪なり、然れども事業を重んずるの眼より見れば、矢張白面の一書生たるにあらずや。之を以て見ても、文學を論ずるに事業を標率とするの非なるは解かるべきに、余が「事業といへる俗界の神」と言ひたる言葉の意味は、星氏を呼びて「眇々たる一代言」と言ひたる記者あろ能く御存知なるべけれ。

エモルソンの謂ふ所の Doing（彼は Kuower, Doer, Sayer の區別をなせり）の如くならば、吾人は少しも異存なきなり。但し Doing といふ字と事業といふ字とは多少其意義を異にせずや。愛山君に御伺ひ申したし。兎に角吾人に對して「事業を賤しむ」といふ御冷評は願下にしたく候。

向井去來

子規子

蕉門豪傑多し丈艸の老勁にして禪意を含みたる嵐雪の沖澹にして古學に深き其他許六の健矯、支考の豪放、北枝の清麗、野坡の奇創、越人の眞摯、荷兮の敏贍皆俳壇の上に起て覇を一方に稱するに足る然れども終に實井其角向井去來の二人の右に出づる者無し

奇兵を險地に用ひ出沒變幻敵軍を謀る者は奇功を奏すと雖亦時に奇禍あるを免れず實井其角の俳句に於ける即ち此類なり其角の句は奔逸跳盪千變萬化意の到る所筆隨はざるはなく情の發する所言ひ盡さゞるはなし去來も其角の

切られたる夢はまことか蚤の跡

といふ句を評して其角は實に作者にて待る僅かに蚤のくひつきたる事誰か斯くは言ひ盡さんと云へり其れ然り然れども其弊卑俗に陷り迂曲に過ぎて謎に類する者だに少からず一誦すれば盡く奇なり誦する事再三に及で嫌厭を生する者多し而して去來

の俳句を見るに平易尋常にして曲節もなく工夫もなく色も臭も無きが如き者あり世人乃ち斷言を下して曰く愚なり下手なりと古人云ふ大巧は拙なるが如しと此平易凡庸なる所即ち去來の去來たる所にして終に其角の一籌を輸する所以なり。豪腴の食を食ふ事頻りなれば即ち飽く尋常茶飯に至つて初めより人をして舌打せしむるの甘味無し而して又終に人に飽かるゝの期無し去來の句平凡なりと雖千誦萬誦愈其味の加はるを覺えて厭嫌の意を生せず是れ即ち良將に奇功なきの理あり。然れとも其句の妙處に到つては或は天籟の如く或は神工の如く或は實境を踐んで其情景に接するが如く或は名手の繪畫を見て無限の餘韻を感ずるが如し彼は十七字の天地に屈伸して敢て狹しとなさず敢て廣しとなさず。故に時として長句短句を用ゆるの其角に倣ふ事を要せずはた好んで奇言新語を吐くの壇林を摸する事を須ひざるなり。

蕉門中博學多才の人を求むれば其角嵐雪其最たるものなり故に芭蕉も亦誇つて曰く門人に其角嵐雪ありと竟に一語の去來に及ぶ者なし然り去來は其學嵐雪に如かず其才其角に及ばず實に平々たる一俳人のみ。然るに去來の芭蕉に對する師弟の關係を

見れは其情父子よりも密なる所あり。蓋し去來は温厚篤實の君子にして道德上間然する所なきが故なるべし。是れ即ち芭蕉の彼を愛せし所以にして且つ彼が着老洗錬なる俳句を造出して平淡中に至味を寓せし所以なり。去來は名を求めず才に誇らず隨て門弟を集めて衣鉢を傳ふるの企もなければ其名は徒らに其角嵐雪の下に落ちたる事口惜しきの限りなり。されど剛愎不遜を以て有名なる森川許六も去來の誄を作りて一代の秀逸は一兩句持てる人さへ稀なるべし此男は既に數句に及べりと云へり去來も亦榮なりと謂ふべし。

其風調

何事そ花見る人の長刀
上り帆の淡路はなれぬ汐干哉
卯の花の絶間たゝかん闇の門
秋風や白木の弓に弦はらん
魂棚の奥なつかしや親の顏

岩鼻やあゝにもひとり月の客
乘あからまくさはませて月見かな
風の地にも落さぬ時雨かな
有明や片帆にうけて一時雨
應〳〵といへと叩くや雪の門

代千の句集を讀みて

天知

加賀の千代尼が句集を讀みし夕べ、女性の墮落といふことを漫ろに思ひ出でゝ女子の想を汚すと甚しきを憤りぬ、初夏の風光に接する毎にあれを紅塵の俗境と爲すかと思へば文明亦た恨みなきにあらざるべし、吾れは今何ゆゑに千代を觀て斯くも思ひ及ぼせしか、あれ其半生は墮落破壞の跡を見たればなり、千代は出來過ぎたる女子にやあるべし、其の俳諧あるわざに巧みありしあとはもとより得難きの逸物あり殊に今昔に於ける千代の賞譽は多く其女子の妖艶といふ所にして女あらぬ方の企で難き妙にやあるべし、蓮二坊が必ず之れに斧斤を加ふる勿れ大道廢れて仁義あり智惠出でゝ大僞ありとは之れをや謂ふありと戒め置かれしものは其纖弱ある所即ち女性の妙たるを思へばあらん、花柳の妖艶は寂々を忘れざるを得ず萩すゝきの柔弱は亭々を離れざる可らずといふものは千代が世に誇る所あるべし、げに其前半生は天津少女をして美境に大自在の雄飛を爲さしめたる時あり、宗因、桃青、其角、蕪村、

蓼太のともがらすら之れに及び難き一つの詩趣は此きわにやあらん、試みに覺へ出るまゝの一つ二つを掲げ見て輕妙更に致に觸るゝものあるを見ん

秋風のいふまゝにある尾花かな

朝かほやおのが蔓かと蔦にさく

朝顔や星のわかれをあちら向く

男さへ聞かれぬものをほとゝきす

姫ゆりやあかるいおとをあちら向く

とんぼつりけふはいつまへ行たやら

どふ見ても春ちる種子や草の花

おゝらはいかにも女子の性情を歌ひし聲にして句集の中かゝるもの多かるべし、もとより千代の詩想には滾々として流れ出る特創の才は滿ちあがらいかにも情熱の心ゆかぬよう思はるゝは或は詩形の妨ぐるものあるかは知らねど一躰吾れは千代といふ女に飽き足らぬ所あるあり、錦持や雛の顔も戀しらずといふむづかるようある句

おゞは大に首肯し得べきものありとは言へ、原來女の至寶といふべき戀想の神絃をば何ものも生涯かおづるとおかりしゆへか、其想夫戀の聲は起て見つ寐て見つ蚊やの廣さかな位ひにて終りしと思はる、想夫哀別の情はいかにも寤寐轉顛のさま見ゆれども之れは人世の寂寥を觀たるまでの聲にして花まさに大に開かんとする機期に近寄りしあるべし、然れども機は終に脆くも一轉して丘盡る所早く水を見たるあり、其高く燃えんとする炎は果敢なき淡水にも消ゆる程にて、終には髪を結ふ手の際明て巨燧かなと氣樂な尼と成ととを得たるあり、紫、清少あたりの想に觸れてゝゝに歸り來れば千代は唯何かに化石したる女の骸を見るが如し、散り殘る傳記だけを見れば其生涯は人世の破綻おどいふものに觸れし事もなく、戀の舞臺にもかゝはるべき初婚の感は澁かろか知らねど柿の初ちぎりといふ程にて、戀とか男とか無常とか浮世とかいふ文字を才智一偏に讀んでのけそうある賢才の女子あるべく心に癒え難き創痕もあければ心機妙變おどいふ苦い藥を飲みたる事もなく、たゞ初ちぎりの嬉しと思ふ幼な心にて人生の序幕を開きたるあらん、かゝる無邪氣の女にて德操

と賢良とを天來の詩才にこおして騒壇に鳴らせしものいかに當時の寵兒たりしかを思ふべし、

いかに言ふとも前半生は千代の勝利疑ひあらず、然れども下の半生は即ち女子の破壊とも情の墮落ともいふべきものにて千代が悟りの時代之れあり、其禪に入りしは良し、禪に迷ふて悟りといふ冷空の手に弄ばれし此詩人の末路あそ悲しくもあるあり、今一打擊を加へあば大に狹き儒想を破りて大美兒の産れ出づべかりしに、惜いかあ性（セックス）あるものを破りくづして男もあく女もあく、情を冷やし矯めて戀もあく無情もあき羅漢悟に沒せられて花柳の妖艶地に塗れ去りしを、吾れは之れを失敗といふ、美に醉ひ難き詩人と成りたればあり、吾れは之れを墮落といふ、女子の情を損ねし女子と成りたればあり、

世の妙齡春を罩むの心を破りてかいあである世俗に強いて染ましむる親の心の鬼にも似たるよ、更に其日のたつきといふ責め水を以て染まぬ心を破り從はす世の罪の蛇（おろち）にも似たるかあ、女子の破壊は冷悟にして其墮落は世俗といふ惡鬼あればあり、

悲しき事あり千代の奇しき天才と豊かある想像とを以て終に詩境に其特長を延ばしめざるをや其前後に亘る人世觀をたぐる見れば始めは孔門の純良ある少女にして後は禪門の洒落ある尼あるべし

其一轉して哲理に踏み込みし後を見れば又あれ奇才縱横するものいよ〳〵妙あるに愕くべし、もし夫れ暫らく哲悟の方より見るとせば佳什名吟更に豊かあるを知るべく試みに後半生にものせしと覺しきものゝ三つ四つを捉へ見んか

浮くさを岸につあぐや蜘蛛のいと

あがりては下を見て鳴くひばりかあ

てふ〳〵は寢てもすますに雲雀かあ

萍くさやとりおとしたる咲きどあろ

あほれては常の水あり紅の露

ゆく水におのが影追ふとんぼかあ

何ぞ輕妙にして老手あるや、人生の運命あるものを悟りては蜘網一髪のきづあに五

十年のかゝるものあるを知り、人慾の窮まりなきされを雲雀の翼に載せては、不滿足を破らんとし、人世に爭ひ立つ榮達のほむらを愚かなりと看破して蝶の閑かなるに想ひを乘らしめ、人の天分を萍くさに浮べて自在の境に身を投じ、一念の万象に色を現はして百万の迷想と成るの理りを紅花の露に宿して、煩惱の執迷はおの〳〵の心に描く影なる事をおのが影追ふとんぼに歌ふもの、鬼を捉へ魔を馭して身を高く世外に置く、之れ何ぞ女子にふさはしからぬ過ぎたる冷悟といはさるを得んや、其更に悟入の句に觸れてはいよ〳〵敬服すべくして尙ほ嘆惜の思ひを增すべし、三界の現象はたゝ一心の假象なりといふ哲理を悟るや、眼底煩惱なく執着なく既に身の女子たるを忘るゝものゝ如し

百生や蔓一すじの心より

かく萬想百夢たゞ一念の產む所なるを知りて其決定心のある所は如何と見れば

根は切て極樂にあり枯尾花

なゝに大安心を得ていよ〳〵憎き程の觀念に靜かなる風のそよ吹くもの

ともかくも風にまかせて枯尾はな

飄落として稍々大悟に觸るゝの感あるが如し、悲なく喜なく人我なく不安なく超として人の歸趣を見るや、一の絕對的觀念を探ねざるを得す、終に進んで眞如なるものを捉えて不言の秀句を吐く

釣竿の糸にさはるや夏の月

彼の古池の水音に悟機を得たる不期の句にも優りてしかも其句を解き出したる如きの妙は其機に觸れざる者の能く得べき所にあらす、此眞如の姿は平等にして平等更に差別あるを水の表裏なきに例へしもよからずや

清水には裏も表もなかりけり

なゝに至て顧れば禪詩の裏にさまよひ來りし感ありて女詩人の想に推せし思ひあらず、千代の想は斯く哲理に進みゆくを見れども吾れは此等を見んとを願ふにあらず偏へに女詩人の賜物に接せん事を思ふなり、むしろ此等の佳什を文子たる詩人より得ん事を欲せざるなり、月も見て此世をなゝにかしくかなといふ辭世を見る時はい

かにも眞如の月を捉へ得て安心の樂地を見出したる樂みを見るに足るべくも詩人の境として見る時は何のおかしき事もあらず、人事到底五十年の仕事のみにあらねば僅に此世の終りを心安くせしとて何の見るべき事かあらん、心の花詩の水に開けずして女子に用おき眞如の月を見たるは吾れの悲む所おり、蕉翁の轗軻經營あるにあらざる者俄かに其淡寂を學ばんには終に狐禪のたぐるに落つべし、當時の文流は蕉風の俳想をかき流す折おれば終に此流れに開きし塞花とも成りしか、瞿麥の花いまだ熟さずして早く芥子坊主と散りゆく姿の無殘おるよ』

桃山宇治

露月生

◎桃山　京の滿月會の課題に宇治名勝十句と云ふがありしより宇治を見て來んと思立ちて一日奈良行の滊車に乘りぬ、伏見にて車を下り、町中をそゞろありきして御香宮に詣で、ろれより桃山の城趾にのぼる、梅桃さくらの花時はさる事おるべきも今しも新綠濃かおる間に石竹、あやめなど咲きいでたるはた見どおろ多かり、獨活に土盛りあげたるか畑に多し、白き手拭を冠り紅き、紫のたすきしたる茶摘女の、節をかしき鄙歌をきゝつゝ茶の木原の逕を曲折して行く

二の丸跡と云へるの茶店に腰打かけ眺めやりたるに巨掠池を前に近畿の山河一望の中にあり、せまき京の町に押しつめられたる胸の豁然と打開けたる心地して云はん方おく面白し、天主臺の跡、本丸の跡など松の木立しげく、とおろ〳〵大おる石のおろがりあり

何を云ふにか吾には解らねど茶摘女のいと饒舌おるがありけり、また孕める女もき

しりてゐたり、すべて茶摘はすゐし隔たりて見るに雅致あり、衣弊れ手に垢つきたるを見ては興さむるゐと多し、おばァと呼んで見やと女が云へば、おばァ〳〵と小さき子は呼びてやがてわァ〳〵と泣出しぬ、女はかぶれる手拭のひさしより午にせまる日を見あげたり、午餉を思出でたるにかあらん

木がくれて茶摘も聞くやほとゝぎすの吟はさもあろと打うゐづかれけり

太閤の千壘敷や茶摘歌

路の上に摘みゐほしたる茶の芽かゐ

◎宇治　山を下り桃山停車場より再たび漕車して宇治まで行く、車の窓より黄檗山の木立を望む

山門や椎の花散る黄檗寺

先陣爭ひのとゐろは鐵橋の下流とや、扇の芝は傍の堤をつくる時今のやうに取繕ひたりとて、川原左大臣の釣殿の側松の木の下に石立ちてあり、ゐとさらめきてありしと云ふ雅致今はゐし、鳳凰堂に松古し

宇治橋より見渡すに、朝日山、宇治山ゐどの間より宇治川流れ、水勢やゝ急ゐれど、螢多しと云ふ中洲ありて川幅狹ければ、昔足利又太郎忠綱生年十七歳大音聲をあげて弱き馬をば下手に立てよ強き馬をば上手にゐせゐどゝゐめきて三百餘騎一騎も流さず向の岸へさつと打ちゐげ平等院の門の内へ責入り〳〵戰ひけるその時のさまはしぬばれず、昔の橋桁は、褐の直垂に黒革威の鎧きて五枚甲の緒をしめ黒漆の太刀を佩き二十四さしたる黒母衣の矢負ひ塗籠藤の弓に好む白柄の大長刀取添へたる筒井の淨妙坊、其淨妙坊が甲のしゐろに手をゐきて惡しく候淨妙坊とて肩をつんと跳り越えてゞ進みたる一來法師ゐどの足を踏まれ、今のは容顔美麗なる京の女の絹蝙蝠傘に打たるゝゐりけり

岸のとゐる家に夕餐たうへで再び眺めやりけるに折ふしの柴舟さへ見えて、曾て見つる大堰川の筏と共に興あり、柴舟は曉ゐちでは得見ずと云ふ、宇治橋のけしきは渡月橋のたぐひゐらずめでたし、畑の中より堀り得つと云ふ斷碑と云ふものも見たり、心に再遊を期して歸路に上りぬ

瀘車を待ちてありけるに茶摘女の一群通りしが、中に一人籠をさかさまに擔ひおど
けたるさまして行く、傍人の彼を知れるもの曰く、アノをおおはあほどすへ、とし
ばらく見送りたれど彼は終に唄はざりけり
かへりの瀘車の中に京の歌妓あり、たけの大きなるが曰くァ、大便に行きたァ、ち
さきが曰く、妾もおァ、紳士紙巻の烟を吹くおと長し

早瀬の月

れいうむ

冬の夜もやゝ更けて、月も傾きぬ。月の光淡くして夢に似たるに、川霧さへ立罩め
たれば、對岸ある山々も眠れるやうなるに、町に遠ければ靜さも一層にて、樓下の
水の早瀬おすあたり、一條の銀蛇、蒼く冥き流を縫ふて走る音のみ、ますますさへ
て語らふ言葉低ければ、撩亂られて、半は此瀬音に奪ひ去られつ、誠の情は片言隻
語にもあもれるを、うたて、流れ流れて、何處にうたかたの泡とや消えん。夜は益
々更けぬ、月はます〳〵傾きぬ、川霧もあつくおりぬ。瀬の音のいや高くさへまさ
る外は、四顧闃として、見る限り杳茫のうちにつゝまれぬ。語るべき言葉も盡きぬ
、手を相握つて、一語おく相見て一笑。欄に倚つて仰いで中天の月に對すれば、恍
惚として我は此杳茫の中に融けて、瀬音とともに流れ行くらん心地ぞする。

別路

醉若

鈴の音さゆるあさ風や、
　まだきに通ふ馬士唄は、
雨の降るてふつち山も、
　手綱つよめて玉くしげ、
あゝしき巖根踏さくみ、
　忘れてうたふ一ふしの、
峯を隔てゝたえだえに、
　うたの節さへ似通ふは、
近づくまゝにその聲の、
　兼て別れしちゝのきみ、
駒ひき寄する松のかげ、

聲高らかにうまや路を、
　誰が夢路をや覺すらむ。
遠きあとべにおりに鳥、
　西根の山をけふ越えむ。
馴れてもおやむ嶮しさも、
　うたは一つの歌おれど。
又もきあゆる馬士唄の、
　我が知る人の山びあか。
おぼえのあるも道理よ、
　今ぞ江戸より歸るある。
やつれし面貌見交して、

かはらでよさと一言に、
母あさ身には父のみの、
　業に追れてわくらばに、
我がひく駒に乘る人も、
　何れか旅にあらざらむ、
あみだに道を迷ひぞと、
　父はみやあへ子は江戸へ、

いくその眞情籠るらむ。
父をたよりと慕へぞも、
　逢へば別るゝ本意あさよ。
駒ひく我も世の中は、
　悲しといふも汝のみか。
言葉殘してひきいづる、
　わかれわかるゝ鈴の音。

大淀三千風

天隨生

元祿の頃、風雅の畸人多し。桃青門下の俳人たちの事は、世人知らざる者なし。今あらためて述ぶるを要せず。あゝにまた、三千風とて、いともあやしき男ありけり。

三千風、姓は大淀、名は友翰、伊勢國飯野郡射和の人、幼より俳諧を好み、成童の時すでに達吟の聞えあり。されど師に就て學べるにはあらず、獨學以て之を致せるなり。延寶年間、一日三千句を吐きしあとあり、これより自ら稱して三千風といひしとかや。寓言堂、無不非軒、みな其別號なり。

かれは、天成の隱逸的畸人なりき。その家もとより富め榮えたりしも、自ら文學にのみ耽りて、牙籌を事とせず。いつかは塵絆を脫し、獨り閑境に遊はむの志ありしも、久しくそが意を遂ぐるを得ず。三十一歳のとき、初めて剃髮して佛門に歸し、呑空と名け、去て奧州松島にいたり、廬を結び、留ること十五年。初より遠遊の志はありたれども、未だ直に發せざりき。

千早振る神代のむかし、大山すみのおせるわざにや、造化の天工、いづれの人か筆をふるひ、詞をつくさむ、と、芭蕉はいひし、水清く松青き八百八州の好風致に眷戀して、彼れや俄にこれを捨てゝ去るに忍びず。及ばぬながら、一管の筆に自然の粹美を描き、之を詩神前に捧げむとして、日に吟哦を絕えせず。數部の句集は、この時に成りき。故に自ら記して曰く、

偖ても滯留の中、かゝる美景を天離夷に埋れて、世にしらさるをほゐなく、皇の御代さかえむと讀しを題して、金花山といふ謠歌を愚作して、島々浦々をつらねしが、猶あかすや、金花山両吟集、松島両吟集、猶いひたらすして松島眺望集を撰錄して、世にふらしぬ。

松島十五年の滯留の間、時には出遊せしあともありしに似たり。その自ら

昔秋田に侍りし時、津輕見にさかりしに、外濱の入江、善知島安瀉の古跡見る比、海上悠に夷の昆布島見渡し侍るゐ、今の心やすめにおむ、

といひ、又た、

三山、去夏山詣し侍りし、

といふと見れば、奥羽の僻陬、まづその杖履を着けしを知るべし。

三千風は、かつて本件に出てたる旅行家中隨一のものたり。その遊踪の廣きおと、後に出でたる南溪古松軒に比して、むしろ上にあり。今試に。その行程をたどらむか。而して之を詳密に述ぶるは、普通の讀者に厭忌の情を起さしむるおとのあるを知れねど、苟も旅行に志あるものは、喜て聞かむとする所あるべし。

かれの七年長旅の首途の日は、實に天和三年四月四日にあり、四十五歳のときとおぼし。おの時自ら行脚の掟といふものを作り出して頭陀袋に藏め置きたり。おれ自慎自試の誓語也。

一、不惜身命を思定、今日切の境界、世常迅速、夢幻泡影、忘まじき事。

一、色欲身欲名聞欲を可離事。附驕慢心可慎事。

一、五戒勿論也。但し飲酒妄語の二戒は、事によるべし。他の爲善事には僞も可あるへき事。

一、山賊追剝等に逢ば、裸にて渡すべし。若殺害にをよはゞ、首をのへて侍へし。死て敵を取ましき事。附四寸の小刀の外、刀を持間敷事。

一、衣食居は天道にまかすへし。當季の外、衣は可捨事。

一、船賃木ちん茶代、少もねきるまじき事。

一、中途にて乞丐非人に慈悲を加べし。かつ病人には、所持の藥可與事。

一、文筆所望おきに、書ましき事。但し望む人あらば、貴賤を不撰、一言も否といふ詞出す間敷也。自作の外、他作の文は書間敷事。

一、一足も馬駕にのるまじき事。但し不及山上の道は、折によるべし。

右の九ケ條、佛神に誓ひ、心戒を定るもの也。若此意趣を破る心さし出は、即歩に立歸るべし。若病死することあらば、行脚の日記と此ケ條を、古郷へ送給ふべし。

死して後、尸の事は、任他、取置てには、烏狼。

産國勢州射和村大淀氏三千風判

諸國旅宿衆中

萬里の行あれより始む、閑雲野鶴跡飄如たるべし。仍て自ら記して曰く、

けふ夜を籠めて立、おほくの朋友、數百の愛弟、道送してあく〳〵別れむとす。

獨歩に思ひ出ぬるうへ、もし行脚もしらぬ烟とへたつ事もおそあれと、けふを銘日にしてたぐひよと、涙ぐみて、

けふぞはや見ぬ世の旅の更衣

とおんひければ、人々忌〳〵しくや、

めでたく鳥の歸るはしかゝ

と脇を視して、離襟〳〵の行も遠かりぬ。

先づ平泉の故址を尋ね、盛岡に入り、遠く蝦夷の地を探らんとせしも、故ありて之を止め、遠保内嶺を越え、仙北角館に出で、鳥海山麓をめぐり、象潟の風光を賞し、海に沿ふて南行、酒田鶴岡にいたり、温海に浴し、蒲萄嶺を越え、村上より新潟に抵り、高田絲魚川を經、親不知の嶮を過き、越中に入り、黒部四十八瀬の奇勝を

見、立山に登り、高岡金澤を歴て、白山を攀ち、福井敦賀小濱を過き、宮津にいたり、天橋に遊ひ、大江山を越え、福知山を過き、龜岡より京都に入り、また江州の諸勝を歴巡し、十月三日を以て、その故郷なる伊勢射和にかへれり。あれ長旅の第一段にして、凡そ半年の日を費せり。

その翌、貞享元年新春、志摩に遊て歸り、又た紀州の旅に赴きぬ。燒山を越えて、新宮に抵り、那智山に登り、本宮より眞子に出て、田邊和歌山を經、高野山に詣で、大和に入り、名所札所殘りなく巡覽し、岸和田より大坂にいたり、有馬に浴し、四月六日、更に西遊千里の程に登り、はじめに播州に入り、姫路室津龍野を經、三備に遊ひ、嚴島に詣で、普賢洋を航して馬關に着し、六月二十一日を以て九州に入り、小倉より彦山を攀ち、宇佐に詣て、耶馬溪の羅漢寺に遊び、日田を經て肥後に入り、阿蘇に登り、熊本に入り、島原に航し、雲仙に上り、千艘洋を航して長崎に抵り、留るあど半年餘。翌年二月又發し、伊萬里唐津福岡を經、太宰府の故址を訪ひ、又馬關にかへり、山口より石州に入り、出雲大社に詣で、松江米子を經、伯耆

大山に登り、四十曲の絶嶮を越えて、美作に入り、久瀬より舟を僦ひ、急流を下りて岡山にいたり、六月二十九日讃州丸龜に航し、更に四國邊路の途に上れり。

抑此邊路は弘法大師掟たまふ、信に權化のわざとはいひながら、山海の美景はさらなり、寺社窟江の奇怪言語道斷の靈邊なり。心あらむ人は、かならず一片の結緣したまへかし、五年三年の觀禪にはまさり侍らむ。人の心も柔和に、馬上おのおもおり、柴賤鍬長も笠をぬく、大師の陰德かきりなき證なり。凡道矩四百八十里、四百八十川、四百八十阪、札所八十八個所なり、達者人は四十日ばかりには結緣し侍る。予は隈々までめくり、あるは橋なく船なき所にては、其用をいひ、又宿をおしむ山寺の鳥鼠比丘には、其諫をおし、廢堂あれば壇中をかたらい、奉加帳をかき、再興のもよひあるには指圖に助言して、後代のためならむ事を相談し、寺社景所には緣起眺望の記を一軸宛書、漸く百二十日にめくり果しぬ。今に忘れかたきは、此邊路の奇妙、かつ一生の咄しの種も、此四國に止るをや。

邊路の巡賽全く終りて後、十一月六日播州明石にいたり、十日淡路に航し、鳴門の

塞潮を觀、又明石にもどり、大阪を經て、歲暮故郷にかへりぬ。これ長旅の第二段にして、殆んど二年の長日月を客中に送り了れり。

三年春、京都にいたり、東山の旅路に上り、岐蘇を經て、善光寺に賽し、戸隱山に遊び、江戸に入り、豆湘を歷遊し、須走口より富士に登り、身延に詣で、江戸に歸り、又發し、常陸磐城の海岸を過ぎ、西折して二本松に出で、會津に遊ひ、檜原嶺を越え、羽州に入り、米澤山形を經、院内の銀山に遊び、踵を回らし、尾花澤楯岡を過き、關山嶺を越えて、仙臺に入り、再ひ松島の草庵に歸れり。これ長旅の第三段、要せし月日殆んと一年。

四年三月、又庵を出て、角田梁川を過ぎ、奥州街道を取りて、江戸に入り、秩父に遊ひ、東海道をたどり、又故郷の地を踏みぬ。これ第四段、またひは僅に二個月間のみ。

この年のあとにや、兄ある三井宗貞を伴ふて、また熊野詣をなしぬ。而して後おほ二年の間、飄遊姑く止まず。薩隅及ひ懸海數處を除いて、足跡既に天下に遍く、名

嵩巨浸、概ね跋渉せさる所おきに至りぬ。われは、昔時覇府時代、諸侯分立、交通の便甚た少き日にありて、能くあの長旅を完全せし渠を以て頗る偉とせずむばあらず。彼れ又た自ら記して曰く、

既に天和三亥の春、奥州仙臺を首途し、あの年卯の五月まて、大旅五年、猶見殘し再順二年、元祿二巳の年まで首尾七年に行脚成就し侍る。凡そ道程三千八百里、一足も榮耀の馬籠にのらず、一宿借り兼しことおく、一飯も飢たるあとおく、一病の障おく、一言の爭おく、萬づ滿足の功をとり、一生の大願望の本意をとけし事、ひとへに天下泰平、時季滿作の間に仕合たる果報と、獨笑して此の記の清書に意を去ざりし。

かれの行脚は、もとより風雅の道のためありき。されば到る處に俳人と會し、高僧と談し、絶えて名利の俗臭に染むるあとおかりき。かれは同時代の人に於て、芭蕉とは遇はざりしが、西鶴來山輩とは、一堂の上に唱酬せしあとありき。

元祿二年、旅行を終りたる後は、その記行を删修し、翌三年上木して世に公にしぬ。

日本行脚文集七卷是おり。その緒言とも見るへき處に、

寺社の緣起、山河眺望の記、其外銘々所作の行、諸藝の美章、兵法の記、一切狂言綺語の戯言、筆にまかせて綴りしを、懷日記にとゝめ、漸く清書し侍れば、紙數六百餘挺におりぬ。あはいかにせむ、大部におりては、板領もいかゝ、無力不意の貧僧、かつは長編おかしきふしもおきにと、又扳略して書改しに、四百枚におりぬ。是もおほしと、三書めにぬき捨て、全部七卷におりぬ。

とあるを見て、その書の體裁を推知すべし。而して又た卷末に、

偖ても巡見の懷日記、二十分一を書扳き、此文集を綴りし、殘念の事とも両山侍りしが、大部をいとひ、三度つゝめて前後七卷に全部し畢。是すら見む人、退屈ますむ。只一宿一飯の恩賜のかたへ、一禮まておれば、色をも香をも知る人にのみ。

と記するを見れば、あの書の上木は敢て文名を世上に賣らひためにあらず。自ら資を捐て、知人に頒付せしものたるを知るべし。

今便を以て、まゝに彼れの詞藻に就て論する所あらむとす。惟ふに、かれの句集の如きもの、世或は之あらむ。而かも松島金花の諸集と共に、わが未た見ざるをいかにせむ。わが机上にはたゞ一部の行脚文集あるのみ、よしや全豹は盡すを得ざるも、一斑は即ち知るべからむか。

日本行脚文集七卷、その内容に於ては、確かに見るべく、據るべく、旅好のわれ等にとりては、一日も缺くべからざる最良の參考書たり。然れとも文章として、之を見るときは、さほど、價値あるものにあらず。ある人の評語、平凡の文字めきて平凡あらざる所ありといふは、わが未だ首肯するを得ざる所あり。何とあれば用語故らに奇を衒ひ、怪を弄し、之を能くしては舖張浮誇に流れ、之を一たび誤りては窘澁險辣に陷る、たゞ絢爛はあり、未だ其極の平澹に入らず。要するに未だ作文の第一關を打破し得さるものあり。されば秀靈の境地を描くも、絶えて讀者をして眼前に之を髣髴せしむるあと能はず。從來邦人に特有ある紀行文上の弊は、依然として彼にあり。

試みに彼の作りたる平泉文一篇と、同し境地をうつしたる芭蕉が奥の細道中の一節とを、比較對照して見むか。

三千風

當山は行基開闢より法繁の異地として、眞天二宗の梵閣、やあとあき聖跡ありしが、いつしか老松枝を垂れて御坂をかくし、蒼蘿露ざれては參詣の履を滯む、杉外の一燈耿々として神寂ひたり。石室金床いつしか螢蚋の閥となり、百房千舍いたつらに臥猪の床と成にけり。されども爰に五百餘歳の形見、三間一字の光堂殘り、紫桐栴檀の瓦具をもて、彩麗ノ軒、琢彫ノ楣、見るに睫乾き、いふに口吃し。いてや大虐の朗月は、七寶壯嚴の蒔楹の雜巾にかはり、玄天の白日は、万德圓滿の佛眼の羽帚とある。此香花の壇下、石窖の中には、清衡基衡秀衡三將、頭北西面の夜臺、佳名不變の御靈室也。信に物みあ昔にかはれとも形見は神魂の枝折ぞかし。さすが顯密二李の花種は、辨慶櫻の長刀風に、永く六塵の忘霧をはらひ、觀禪両旬の月雪は、龜井か松の弓勢の嵐に遠く、四迷の闇雲を除く。泉が城の

儀鶯は、忠名を万代の詩歌に嘯き、高舘の猛鵰は、功を三軍の上瑠璃本に囀る。かゝる中にも瓣の錦戸は物珍らしき姥杉の懐所立天狗太郎國平と今もいふある、於如幻の身をおしみて不滅の悪名を殘す事の口惜や。

月花螢あや三衡の光り堂
餘花の影逆に見し衣川
尻つめれやよ乳母杉の時鳥

芭蕉

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡か跡は田野にありて、金鶏山のみ形を殘す。先つ高舘にのぼれは、北山川南部より流るゝ大河あり。衣川は和泉が城をめくりて、高舘の下にて大河に落ち入る。泰衡等か舊跡は、衣が關を隔てゝ、南部口をさしかため、夷を防くと見えたり。偖も義臣すぐつて此城にこもり功名一時の叢となる國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷て時のうつるまで、涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

兼ねて耳驚したる二堂開帳す。經堂は三將の像を殘し、光堂は三代の棺を納め、三尊佛を安置す。七寶散りうせて珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢となるへきを、四面新に圍みて、甍を覆ひて、風雨を凌き、暫時千歳の紀念とはなれり。

五月雨の降のこしてや光堂

後者は高舘より筆を着けしに反して、前者は單に中尊のみを寫せり。而して平泉の全景を描畫せむには、後者の排置を可とすべし。然れとも前者が題名に因りて然るものとすれば、議論するは要なかるべし。たゞ文章の一點より見るとき、前者は徒らに文の駢驪を見るのみ。篇中にある幾個の形容的辞句は、たゞ堆塚のみ、未た渾成圓熟を以て稱すべからず。終に後者の感愴明かに見えわたり、低徊去る能はざる趣を具へ、女に風神あり、意盡さるに若かざるあり。又た両俳人か象潟を寫せるを

見るも、同じかるべし。されば餘地なければ、引用せず。讀者自ら就て見るべし。われはこゝに行脚文集がその文品に於て、負に興の細道の下にあるさとを斷言して憚らざるなり。まさとに、文章はその人の性格を顯はすとや。三千風にひねくれて虛傲のとまろあり。芭蕉はすらりとて謙讓の德をそなへたり。文章また然らざるを得ず。而して芭蕉も文には聖なるものにあらず。其の下にある彼れ、豈復た言を須ねんや。

三千風の俳句に至りては、文章に於てよりもなほ多くを、芭蕉に讓らざるを得ず。さすがに芭蕉は、俳聖なり。一たび正風の眼を開き、閑寂幽玄の境をひらき、十七文字を以て造化の秘奧を喝破せむとす。到れり、且つ盡せり。而して三千風や、多少の特色なきにあらずといへども、依然として談林の蕾調に浸染し、詼諧狂奇に流れやすく、絶えて清高飄逸の姿趣なし。西鶴來山の諸輩と、同位にあれば、猶幸のみ。われはまだ彼の句集を見されども、行脚文集中の數百句を見て、この言の誤らざるを信ずるなり。左の數句、彼に在りては、比較的完全に近きものならむか。

錦宇詩の機織君や机蟲
俤のさくら物いふ碑銘かな
夢なく覺なく闇自ら梅白し
湯長女のたもとは蘭の枝折かな
温泉や湯女塚に立をみなへし
島原や蒔繪の鷗縫の鴈
嫉捨てし山の訴人か子規
都へは櫻に見するむすめ哉
沐する女追ゆくほたるかな
月今宵汲縄かろへつゝあくた川

然れども、是を今樣はむげにいやしき、そんじよそらの月並宗匠連のに比すれはなほ大に勝れるものあり、流石は古人なり、天質朴素、俗臭てふもの全くなければ、なり。

かれは又た好て歌をよめり、されはたゞ眞似方のみ。之を要するに、かれは文藻に於ては、元祿時代に嶄然頭角を擡くあと能はざりしや、明あり。彼は俳人として傳ふべきものにあらず、文家として崇むべきものに非ず、何ぞ況んや歌人としてをや。彼はたゞ畸人中の最畸人として、傳ふべかりしあり。ろの後年の奇聞は、明に之を證するあり。

かれは行脚の後、また松島の茅蘆に赴かず。しばらくはろの故郷の家にありしが、おゝじ元祿年間、書を遺して飄然出てゝ去りぬ。其書の端には一首の歌をかいつけたり。

無始以來の行脚の宿の喰逃を今六文で木賃すつめり

されど彼か五十餘歳の時あるべし。親戚ろの跡を尋ぬれとも、行方を知らず。六七年の後、その家の番頭、江戸へ下る途すがら、相州大磯の驛西なる一庵室の前を過ぎ、圖らず立寄りしに、机にもたれて物思はしけなる、一人の法師居たりけり。能く見れば、紛ふ方なき古主のなれのはてなるにぞ、大に驚きて寄りすがり、いかなれ

ば故郷を捨て玉ひて、かゝる地には在はす、といふに、法師澄して空嘯き、あは粗忽なる人かな、われは御身を知らず、御身のいふあと、兎毫ばかりも謂なしとて、いかに言葉を竭して勸むれども、聞かばあそ。番頭も詮方つきて、急き故郷へ馳せもどり、親族と談合して、再ひ大磯の庵室を訪ひけるに、あたひは全く見知らぬ僧の居て、さる人は知り侍らずといふに、親族はしめ居合せたる人々、力を落し、今は施すべきすべもなし、其人の思ふまゝに任しても止みなむと、夫れとはなしに、庵室に淨財を喜捨して、かの法師の事くれ〳〵も僧に賴みて、ろのまゝに引き戻せしとや。あの法師あろは大淀三千風其人にして、庵室を設けたる地は、名たゝる鴫立澤なり。かれが閑居の句に、

あの庵京へ知らすあ郭公

又た歌を作りていふ、

むろ路より通り手形の法語得て有路の行脚の關ろあけぬる

あの一話、かの惟然坊が久しき前に別れたる吾娘に行き遇ひて、袂に縋られ「重た

やの雪拂へとも〳〵」と吟したるに似て、いと哀あり。

抑も鳴立澤の庵は、寛文の始、相州小田原の隱士崇雪といふもの、あゝに幽栖を營み、五智如來の石像を造立したるに起る。同時に標石を立て、ろの古跡たるを知らしめしが猶世に知られずして、庵も亦た頽癈しき。その後、飛鳥井亞相雅章、關東下向の時、土民に舊蹟を問ひ、即詠一首あり。

あはれさは秋あちねとも知られけり鳴立澤の昔尋ねて

三千風、その清隱の地たるへきを愛し、かねてはかゝる名區の人に知られすして、堙滅せんあとを患ひ、あの亞相雅章の詠歌眞蹟を以て證とあし、新に一宇の庵室を建立し、遍ねく四方の騷人詞客の寄題を乞ひ、その吟詠を蒐めて世に公にしたりき。あれより鳴立澤の地、當國名所の一として、その名天下に聞え、雅人の杖を曳くもの多く、或は八景を作り、或は二十四勝を撰び、ろの詩歌又積て卷帙をあすに至れりといふ。鳴立庵、また秋暮亭、東往舍と稱す。東往は、三千風があの地に移りし後、自ら名せし雅號あり。又　鳴立庵の傍に、西行堂を營み、上人の木像を安置

しぬ。あは三千風か京に遊ひし時、ある僧より傳來せしものといふ。彼があの時の句に、

一聲は丈西行にほとゝきす

あれより、人呼て丈西行と綽名せしとや。又た別に一碑を立て、ろの自ら撰ひて、あの名勝の沿革を叙述したる長歌を刻しぬ。篇幅長ければ載せず。東海道名所圖會中にも引抄してあり、讀者就ひて見るべし。鳴立庵の境內、又た虎尼堂あり。三千風が三都の唱妓に勸化して、募りたる資金を以て設けたりといふ。是のみは信し難く、緣起に江戸吉原町娼家自得齋と號せしもの、本願主とありて寄附せしとある方、眞に近しとおもはる。

三千風か鳴立庵を營みたる年月、未た詳あらず。在世の日、自ら建てしかの長歌の碑に、元祿十三年二月と刻しあれば、畧ほ推知すべく、かれが六十餘歲の時あるべし。別碑に、

鳴立ち澤の庵を茸かへて心あき身の思ひ出にせむ

鳴立てなき物を何喚子鳥

生國勢州射和東往居士三千風墓

と刻す。後人の建てしものあるべし。而してあれ眞に彼の墓あるや否や。確證あし、諸書に、又た去て之く所を知らずと記しあればあり。

鳴立庵中今に掟書一篇を傳ふ、支干を記さゝれとも、あれ三千風か書きしものにして、俳諧者流、かれの餘風を慕ふて、あゝに相繼き閑居するものは、あれをしも法令と定めたり。

鳴立庵永々定の事、
出世僧不可居事、
本寺仕配不可取事、
此澤買賣致間敷事、
元來辻堂にて除地の事、
代々眞言宗の可爲道心事、

永々地福寺可爲旦那事、
道心者二人の外不可居事、
旦暮鉦鼓念佛可勤事、
麻の衣木綿の外不着事、
常夜堂間斷有間敷事、

右の條々堅相守侍れば、氷々富貴安樂あるべし。若自然の事あらば、時の名主年寄衆に相談有べし。分て平田氏の方人に隨ふべし。違背あらば、追放あるべし。

則此掟當所の萬年帳同前あり。

去て之く所を知らざる彼は、山にや入りけむ、雲にや乘りけむ、桂影蘿月、眼を娛ましむべく、松風濤聲耳を洗ひ得へき、あの閑地を以て、猶ほ浮世に近しとはなしたりしや、嗚呼大風流漢。

水寺鳥驚秋似夢。驛門柳瘦月如眉。高緇名妓俱千古。西上人碑虎女祠。高緇名妓す

でに千古たり。這個風流漢、豈亦た千古たらさらむや。

青葉若葉

みをつくし

夏の雲

五月雨の、ふる屋軒端のたまだれに、聽くや青山杜鵑おきしきるに、旅情轉た滋く、坐しては苔扉靜かに書を繙きて、幽思坐ろ閑あり、昨日今日の一夕、椽ばなに篩ひし松間の月かげ、是やひそかある嫦娥が垣間見に非ざりしは、起出でゝ今朝にも知るき大空の景容。『入梅晴の私し雨や雲ちぎれ』

哀れ何時とてか愛でぬとしなき久方の、天にわたる八重立雲の其中にも、所謂奇峰多き夏の雲、あれに於て、吾は尤も樂しきものを思ふ、大空にあめし昨日の薄雲、今日は一點の曇さへ影あふ、蓬々としてむらがり滔る青雲の、一碧萬里瞬くまに大千世界にしき了るを見る時、あゝいかに村肝の心地よくも吾は感じつゝあるよ。

中院芭蕉の風憩ひて、日己に亭午、折しもあれ一簇の白氣高く綠樹を萃めて、雲表に嵯峨たる、藍嶂、其半腰より吐き出されて忽ち浮々焉、飛んで柳絮の如く、撒

して黍の如く、飄揚として走るもの、儼爾として遊ぶもの、倏ち集ひて此に一大峻峰を壽くや、喩へば夫れ畏途巉岩攀づべからず、青天に上るより難き蜀道嶮にあらずんば、將に嶽然峨直として、長江に屹立する盧山高か。六月吹雪を飛ばして石矼に灑ぎ、碧潭深く漲ぎりて目爲に眩じおんとす、耶馬の奇巖とあり、木曾路の雲のかけ橋とあり、連嶽とあり、孤峯とある、百くさ千さま、崩れ崩れては幾たびか倦まず立直すあと急なる雲の峯の、更に熟圖すれば壁を一方に築きて壘を青雲に摩せんとするある白衣輩、悲哉我に利あらずして楚歌帷幕に萃り、將軍劒によりて悲歌すれば、虞姫數行涙暗き處、降らんか祖宗の塋空しく犬羊の蹂躪に委ねおん、死せん哉青草碧血を葬りて空しく英名の沒しおんを奈何。旆をまき兜をすてゝ、萬馬の中に闘入するや、早きは沛然として一陣のつむじ、徐かなるは悠然屠牛の歩みにも似たる、東海の大魚鰭をふるひて西山の鳳翼此に翥き、怒りて阿修羅の如く、嶋を負ひては虎、毅ひては裳にも似、延ては旗、抹しては奇石の如く、盆石の如く、之をわたつみの大海原に喩ふれば、點畫せられしは島あるべくや、岬灣は參差し、白帆

はノヘし、疊みてはさゝれ波の渚を洗ふのたり、荒ぶや巖をも碎く怒濤澎湃、進み退きもとほりたゞずみ、縈紆し逶邐し、繞りたゞよふ、迢々たる哉此心、離奇たる哉此景、已れ靜坐几によりて徐ろに此般卷舒變幻の樣を見やれば、長空を燒く火にも千石の凉味あり、えしらぬ感の胸裏にわき出でゝ、菅の根の長き夏の日も其長きを覺えざる也。

哀れ心あうして岫を出づと云ひけん、晨に狹霧さわたる松頴の山わひに立わかれ、夕の冥暗に包まれて行衛知られぬ白雲にきかまほしけれ、北海の龍王が玉輦をのせては幾千萬の隴畝に霖雨とふりしきるか、はた一聲の閃電に伴ひて天軸を傾斜し、乾坤を夾洗し盡し、翠樓玉閣の上、浮世の苦艱をば白眼に看過し、民の膏を肴核とし、民の血を綠酒とする、社會一流を凉哉に叫ばしむる白雨とやある、あはれ朝の白雲に向ひ、夕べの霸雲に對する時の吾れは思ふ、遮莫黃河千とせに一たび澄まんあとを、命の極みに叫びて、空しく呻吟しつゝあらんより、寧ろ疊々たる五百重の此雲間につゝまれて、五尺の眞骸長へに此穢土を辭び去るべき哉と、『吹風にたゞ

よふ雲のうきからを、いつまでよその物とかは見む』雲や雲や、吾れは汝に對して思ふあと多し。

緑りの木陰

顧眄する處、俯仰する處、いづれか滿眼の艶にあらざる、翠にあらざる、碧にあらざる、緑にあらざる、天は人間に向つて四時を授け、春に花あり、秋に月あり、冬に雪あり、よく快美の觀を視覺に味はしめて、嘆嗟の感情を挑闘せしむ。獨り夏に於てかの行樂するものあきか、娯遊するものあきか、夏に對し三季に對する時の何ぞ不權衡の甚だしき、夫然り豈夫れ然らんや。

今や一葉の素紙を索め來りて、試みに四時の色別を拵す、紅にして青と相映帶せるを春とあし、黄にして赭あるものを秋とあす、冬に至りては天の玄、地の白、抑之を奈何。已にして考ふ、吾人はかの染戸にあらず、色學士に非るも、只色彩に於て多少の嗜好を有す、混彩一刷之を巧手にせんか、天上の青、白雲の如き、緑水に漂ふ荇萍の如き、抹し得て調和配合頗る吟賦に値するあきに非れども、之を毫釐に

失せむか、即ち蕪穢班々目見るにも忍びざる事、田婦が化粧に於けるが如し。此れを以て仔細に點檢し來る、秋冬春の三季、其乾坤に占むる色彩甚だ快美に感ずるとあく、其或ものは所謂俗臭に堪へざらんとす、夫れ色素としての青色は、天地の色彩上最極美ある源泉として、且つや最廣大ある地歩を掩有す。已れ只是に擇び得たり、蒼や青や、一樣滿緑の夏の色の最美あることを。

更に思ふ、かの花の嬋妍や、月の玲瓏や、雪の白きや、よし天地にあれらのものなしとするも、いくばくの輸贏をか施すにぞ、是有りて適ま瞶々たる俗人が卑陋ある肉觀を分秒に聳動するに足らんのみ。只夫れ夏の時たる、炎熱蒸々、人は煩殺され、惱殺され、熱殺さる、此時に當り、肉體と心靈とを關聯して最大ある快美を與ふるもの、此に緑蔭あり、趣味の餘りに低度あるからに、俗人賞翫の視線をひく雪月花そあにあるが如く、餘りに高きが故に世人が毀譽の外に、超然たるべくして新樹はうあにあり、是に於てか知る天道果して非あらず、夏の與ふる所以のもの決して澆薄あらざりしを。

あゝ青葉といひ、若葉といふ、何ぞ其命題の趣味多きや、夫れ夏は『涼しさや椽より足をふら下る』べく、髪を散じて嘯嗷すべくして、襟を正ふし經を講ずる村夫子の頑屈を傲ふべきに非ず、若夫れ簷頭の鬼燐火を吐くの時、卿等須く去りて樹々の若葉莞々として暑を洩さぬ陰影、『木下闇地虫おがらの蟬の聲』底。蘚苔柔かにして きて裀に似たる處、一身を閑臥し來れば清風稷々、葉末の露を墜し去り、冷袗たゞに濕ふ時、かの蛙鳴の俗論と蟬噪の市聲と、亦いづくにかある。

夏日の讀書は須く胸襟を玲瓏あらしむるを要す、微を拆き、細を剖くは緑陰の避暑に於て到底要する處なき也。五分の利率か幾年にしていくばくの子を生む勘定に至りては、更に須る爲す所以にあらざる也。歴史譚よし、雜筆よし、紀行に於て最も佳に、詩文に於て更によかるべし、意志よりも感情に訴へよ、智能よりも美感を多からしめよ、古しへは梅酸に唾を饞かにせし英雄あり、文をよみ紀行を誦して、聯想の及ぶ處、峇嶠某の山、某の溪、泰山の雪を念ひ、氷を北氷洋に掬するの追憶に、身自ら栗して、齒牙爲に戰す、心理的避暑なるもの即ちおれか。

凡そ妍美を極むるとも、之を久しふすれば漸くにして其感美の減殺せらるゝは、皆然らざるはおけれど、吾暑齒喝々の頃ひ、常磐木松の青々たるを知初しより、自然を樂しみ始めしに屹りて、今日も衰へず、否一旦一夕其深興ある妙趣を覺ゆるとの、日一日より酷だしふおりまさらんとす。

己れおにがしの地にさすらひたりし夏の一日、丘とも名づくべかりし名のみの某山へと登る、寸許りの、緑草ふみしだき、くちおはの這ふ迂逕いくめぐり、太陽は自在に背を射て熱きと古譚にもありけん、かちかち山にも似つ、汗は衣に濕ほして拭ふに追おく、膚を傳へて巨瀑のたぎり落つる心地す、吳牛の喘ぐがおとく、鼎呂より重き歩趨は、不順序に落されて早いくばくか僕ひけん、佝僂せる背を伸べて首振仰げば、蒼雲と青松との尾の頂、咫尺の處に現はれぬ、嬉しきが餘りに茯苓も生じぬべき蟠根に、かけよると其儘腰べたりと落つき、扶疎たる老幹三四株の天風微かに毳々たる青蓋を渡るの時、松花と青釵は苔むしたる庚申塚の碑頂に墜つると繁く、眼前に當りて、緑碧一帶の長江、縈洄迂餘して白帆明滅の樣面白き、白壁青甍

水村山郭ろの間に介在したる、後には稻田遠く開けて、見わたすきはみ、針のお
とき秋風にそよぐ、仰げば山は高み碧雲直ちに木かくれにさまよひて、攀ぢあぐ天
門を捫すべく、吾また火食の人に非ず、我天か、天我か、四周の岑寂に人おく、天
おく、嘯吸すれば、湯々焉として崇高の氣に圍繞せられ了んぬ。

『冬寒み後に凋むと云ふあれど、かはらざりける』所謂水霜の節に於て、吾かれを
愛づるに非る也、『昔とてかたる許りの友もおき』いはゆる千年の壽に於て賞するに
も非る也、其蠹々として赭幹の雲表にそびえ、葉ぶりの蓁々として云ふべからざる
高美の姿致ある、遙望に於て我は美感する也。

若夫れ清泉潺湲としてせゝらぐ田舍道、梢も高き亂松の木陰に擔ひし扨うちおき、
胸毛鬱々たる肌押ぬきて涼むに餘念おき、いかに。

若楓のみづみづしき、いかに、梧桐亦いかに、疎大なる葉影飽まで青きが娑婆風に
扇ぐ樣たとへん方なし。

下に深井あり、色寒碧、石甃深く疊みて味冷冽、大夏涸るゝとおく、神龍接みてあ

りと云傳ふる、いかに。

月に落す葉影芭蕉に亞ぎておかし。

蕪村句あり『富士一つ埋め殘して若葉哉』

寒山子詩あり『有一餐霞子、其居諱俗遊、論時實蕭爽、在夏亦如秋、幽澗常瀝々、
高松風颼々、其中半日坐、忘却萬年愁』

云はぬ思

おのれかりそめおらず暮へ渡りし一人の乙女ぞありき、始めて相まみ見しし三年の
前、肝膈深く忍び入りにし吾おもひは、駿河おる富士の高嶺に焚ゆる煙の、暫しと
て消へぬべくもあらぬそれのみかは、却りて朝お夕おに夏草のいやにしげりゆく忍
ぶの亂れに、胸の八重波立さはぎて押えも得せず、敷妙の枕紙かみしめて、人知れ
ぬ涙にくれたりしも、幾百の夜ぞ、或時は遠くて近きてふ納言が筆の跡のたへおるを
しのび、文よみては浮世の柵にせかれて逢隈川の深き瀨もかれし古へに數々同情の
涙を灑ぎ、やはか丈夫に戀すべきと、雄々し心を振起すれども煩惱の犬は去らず、

藻にすむ虫の我からに悶ひ煩ひしあと、今更にいふもつらしや。

かの女が住居は、我寓を去る幾覺の徑庭にすぎず、芳齒花の今盛りある二八を過ぎて、僅かに一つ、早緑の糸の結ばるゝべう今日此頃は、かぞいろが膝下にありて、もかり鹽やく志賀の海人の暇をあみ、くしげの小櫛取も見あくに蠶桑にいそしみつゝ。

僂ふればいくよさの前にかありけん、夢寐忘られぬ曩々の嬢顏が、何とかしけん紗蘿燈燿たる螢火の火影かすかに、我蓬窓の前にと立現はれしは、そは背あにせる幼弟が爲に螢採らむとて來れるありしが、はや家にても寐ぬべければと、坐にも入らず。欻然として輝き飈爾として消ゑにし縮み單衣の立姿の、中々に見じと誓ひし我胸の皷動はいやに激し來りつ。

『春日山朝ゐる雲の居ぬ日あみ、卷まくほしき君にあるかも』萬葉の詩人はしかく歌ひぬ、げにや己れ一日とて渠を佗びぬ折とてあきと共に、『目に見ては、手には取られぬ月の内の、桂の如き君をいかにせん』かと思ひわづらひぬ。あゝ人は戀を苦

しと云ふ、片言唇を出でゝ事忽ち決すとせば、我はいひ出ん哉、いひ出づるは實にたやすくもあれど、さはれ深宵の缺月、徐ろに身邊を顧眄し來れば、あゝあゝ我は深く觀じぬ、己が此般の戀は、是未來永劫遂に成就し得べき圓滿のものにはあらざるべきを、磯の鮑の片思ひ片戀は是正しく我あの戀に對する前途にてありしを、吾現在はあの懸崖によりて事をあしつゝあるもの、若夫れ久戀の青山と頼むべくもあらぬ現在の地、早晩三寸青鞋の下に蹈すてつ、朝に岑頭を出で、夕には天翺るべき、行雲にたぐふ己が身の行末あらむを、渠が家は富み、渠が顏はうるはしき破瓜の齒、哀れ『かひなくも山鳥の尾の己れのみ、心長くも戀わたりて』一つ家居にも接み、朝夕の食をも嘗ては共にする三年の浮ふしの、好機前に臨み、すは乘ず可りし時の來るありし、而も遂に言ひ出でざりしものは『忍べたゝ知らせての後のつらからば、云はぬ思ひのあらじものゆゑ』然り吾はしらせて後のつらからんを恐れしは、箸を墜せしすぐれ人の、鳴神を恐れしより恐ろしかりければにて、あらず、是戀遂に成るべくもあらぬ悲懷の種ありしを知りつくしたればにそありける。思ひ去れは春

風の寢息吹渡りて緩やかなるに、圓かなる夢魂飄遙、ろもいづくにか飛べる。一宵の甘睡を輕帳の外に護りて、輝ける紗籠、かの夕の螢ある中々に羨ましかりしか、

もしろれ滿顏の愧羞を一蓋の綿帽子目深く、あれ見よかしに今日今夜、鶯衾の歡にと練行くある、渠女を見たる我胸は果してわき、我眼には涙あからんあとを得と人結ぶ多きをほのかにきゝて、我腸は果してわき、緑葉繁くして子を は思ふか、吾は一時も速かに此地を去らむとして轉顚反側、『聲はせで身をのみあが す螢あそ、いふより勝る思あるらめ』と焦れけん、源語に見えにし名も螢の君が、思をしのびしも見ぬ世の夢と諦らめんかと、自づとおのが心を押しづむるを期せし今日此頃の庭砌には、渠女が駒下駄の高き響きを絶えて宵やみにさゝらぐ裏の小川、亦童女と扇影とをうつす事あくありぬ。

只列星森然として高く、黝闇の穹旻に靜かなる夕、或は雨冥々の池畔、蘋花をかすめて飛惑ふて僅かにのあれる二三點の、夕殿に飛んで思悄然とはもろあし元宗の古おと、哀れ光りも薄らみ、力あげに、わびしげある其影の、絶えんとして縷の如

く、絶ゆべくもあらぬ我心にいみじうも似たるに哉。

夫よりひろき武藏野の月にもあらあくに、草より出でゝ草に朽ぬべき汝にも似て『行き行きてたほれ伏すとも萩の原』岩がねまきて草むす屍は世の大丈夫にも洩れぬ己かも、遮莫柳岸夏は來りて流光緑波に撩亂たる時しもあらば、誰かは當年のなれは去歳の夏に非るを、人は知らむや、はた將來の幸か、不幸か、われいさ知らず、三年の後將十年の後、再び此河畔にふまん折はありとも、渠女は長あへに當年採螢の乙女としてかぞいろの膝下に侍り、流水にうるはしの俤をうつしつゝありやあしや。

翔々の夢

『年々暑去皆有期、今年暑去何遲々、不知搖敗幾團扇、得到西風吹面時』火旗焰々天を燒ひて紅燃えあんとする、みあ月の空、旱雲凝りて動かず、日正に午に中せり庭砌苔陰の風死して神鎖し、體鑠かされんとする時に當り、南窓竹簟をうつして一肱を曲け夢里憩鄕の趣につくに誰か意あきものぞ、何者の木石漢か肯て嚴をてら

恪を飾りて朽木彫るべからずの酷語を弄せんとはする。

吾は眠を愛すると食と飲とよりも切也、否食と飲とは之れ人の義務也、已に義務ひある故に我は枯魚冷膾毫髪も辞する處にあらず、獨り眠りに至りては即ち糸々閑花を叩いて花に聲おき春、城の雨、殘むの燈挑けつくして、鐘鼓初めて長き秋夜、而もおほ足らざるを覺えて白日の坐睡昏々、傍人の失笑を値するを憚らずりしもの、況んや此時の坐睡に至りては、夫れ如何ぞや、十襲の珍書秘府の寶卷、以て我懶氣を驅るおと難く、偶毫を執れば頭は劉昆を學むで案上を屢叩き、手は數枚の畫を作りて汚痕縱横、觀て解するに苦しむ、所謂得意時代の一語寫し來りて蓋し適評『花月幽窓午夢長、此中與世暫相忘、華山處士如客見、不覺仙方覺睡方』とは湖上李笠翁が句、渠嘗て睡を論じて頗審か、其方を論じては曰く『勿有心覺睡、覺睡得睡其睡也不憩、必先處于有事、事末畢而忽倦、睡鄉民自來招我桃源天台諸妙境、原非有意造之皆莫知其然而然』其地を解ては曰く『地之善者有二、曰靜曰涼』節を論じて即ち曰く『長當睡之時止有黑夜、舍此皆非其候、然而午睡之樂倍于黃昏、三時皆宜、而獨宜長夏、云々、非私之也、長夏之一日可抵殘冬之二日、夏夜之一夜不敵殘冬之半夜、使止息于夜、而不息于晝、是以一分之逸、敵四分之勞、精力幾何其能堪此云々』時を論じては曰ふ『午飡之後略踰寸晷、俟所食既消而後徘徊臥榻』と。

渠が人を論ずるに至りては即ち最も我意を得たり、『至于可睡不可睡之人則分別于閑二字』と忙只『忙』、貴族的、故に五塵常に魂を縈繞するものあり、即ち是を青紗に船うけて網ひく漁人瞰下にする處、清風蓬々青簾をかすりて浸入する水樓の上あるは屏幪の若葉みづみづしく、天風簷端の風馬に音づれて鏗々の涼聲絶せぬと、ろ、之を美人春雨の懶眠にとりて午睡の矯起に撰ばず、只『閑』故に蒼蠅堆をおして群翺翔飛、面を憩り、四肢に集まる間にも、些子の關心おく、煩惱おく、六欲心地に印せざる田夫が午眠に於て、之を執るに躊躇を容れざる所以。

夏をもらさぬまでも深緑りに、隈おふも生ひしげりし夏木立の下、碧苔生絹よりも柔かに布つめし邃境、憚りもおく體を偃臥して何思ふともおく、悠々たる白雲を觀じつゝあれば、一氣忽ち靜岑、いつしか忘機の境にと入りつ、眼瞶し魄惚したる

、やがての夢魂は、涓々石泉のとよみに入れるか、白鶴に乘じて迢々揚州第一樓にあるか、此時此境、紅塵萬里の外に蟬蛻して、靜かゐると秋江の如く、假令江鄙へり石走るおとあるとも、ろは吾解する處にあらず、覺め來りて暑は遠く傾きつ、時はうつらいぬ、早いつにかあらむ。門外豆腐賣の叫ぶときあえて、蜩蟬閣々胡桃の青葉に亂鳴する折りしもあれ、清風一吹葛衣の袂を拂ひて、睡眠明かに發しぬ、涼清一味實にや午睡は長夏第一快爽のことに屬ずる哉。

あゝ吾は眠を愛し、午睡を愛す、笠翁又曰く『清睡起來常に午に過ぐるものあり、便知る七十年たゞ三十五年に當る』と、何ぞ必ずしも午起を要せん、三十五裘葛と云ふべき、我は思ふいかに樂しからまし、一榻此閑臥、遠く涼味油々たる天上の仙宮に會せる夢魂の、泊然として一百年又一千年、遼永に松風に通じて再び苦多き此浮世に覺め來るとのおからましかば。

茶の匂ひ

紅るは亂れ飛べり、江南江北の三千里、天女祠畔游舫の棹影を浮べずして、柳影

の綠波鷗鷺眠り穩か也、燕子は詹頭に飛むで急に石榴火を吐く今日此頃、只見る千畦の疇畝一樣綠りゐる處、相繡錯せる白き菅笠と、玉襷の紅るゐると、都人にもまかせまほしや、聲も一齊に清き歌謠の、風のまにまに音づるゝ歌調の、曲折斷續、一に何ぞ可憐ゐるや、俳人がいはゆる『花橘も茶の匂ひ』といひ『仁風暗結珠蔕蕾、先春抽出黃金芽』と詩人がいふ田園の一忙事、一雅觀ゐる新茶摘は、即ち是か、哀れ同じくは葉々玉枝を離れて楚囚たらむ身の、願くは一度可憐渠乙女子が纖腕に觸れて、そが玉指の頭に摘去らるゝゐとしもあらば、蒸沸焦熱いかんの苦艱も、毫髮といふ處にあらざるべし。

夫れ人の夏時に處して執るべきの道、先づ神心を閑澹にするにあり、曰く瀟洒、曰く冷靜、曰く安易、今此三道の雋味を調和し來りつ、霞に餐し霧を吸ふ渾然たる壺中の仙氣を恣にして、人を冷殺し、幽殺するもの、只夫れ一椀の苦茗か。念ふ竿籟自然に焦桐を鳴らす處、松葉風わたりて清陰寂たる處、紗巾脫し去りて低枝にかけ、石鼎石泉の水をうつして徐ろに陽羨星々の幾十片を煮れば、やがて紆々として

立登る篆烟に八音の外の音、一爐の濤起り、たきるや蟹眼の珠、一盞瞑着し來りて碧光碗面に凝り、群芳の暗に身にせまりて、五味外の味、兩腋風清きを覺ゆ、盧仝は曰く『一碗喉吻潤、二碗破孤悶、三碗搜枯腸、惟有文學五千卷、四碗發輕汗、不平事盡向毛孔散、五碗肌骨清、六碗通仙靈、七碗喫不得也、唯覺兩腋習々清風生』と、茶經に曰く『人飲眞茶能止渴消食除痰少睡利水道、明目益思除煩去、膩人固不可一日無茶然或有忌而不飲每食已輙以濃茶漱煩膩、既去脾胃自清、凡肉之在齒間者得茶漱滌之、乃盡消縮不覺肌去不煩刺桃而而齒性便苦、緣此漸堅密蠹毒自己矣然卒用中下茶云々』と若夫れ林壑の清客至るものあらば詩を談じ文を談ずるの、幽興や、抑いかむ、只問ふ我仙宮を辞ひて玆に幾日星、あはれ今日此清風を擁して天上遠く再び歸り去らむ哉。

吾は此に怪しむ、世のいはゆる素封豪戸あるもの、渠等が天地の涼味を一身にとるとの、百尺の水樓新豊の美醪を引いて、酡顏火よりも赭く、侍るに阿嬌あり、糸竹爭ひ奏で肴梁山積、豈是果してよく其術を得たるものあらむや。杜康のものたる

神機を挑撥して、情慾の邪念を發闡する、此より甚しきあらず、今玉巵を飛ばし、美姬を擁して、心を煩燥熱鬧の間におく、猶是湯の熱するを惡んで薪を加ふるの亞か、我は仔細に渣灑し來りて、又一片の涼味を其間に思ひ浮ぶ能はず。

あゝ茶ある哉、茶ある哉、何ぞ必ずしも石泉を覓めむ、水閣に立つを要せんや、燕子花の二つ三つ由緣の濃紫深く、紫蝶のまふにも似て立てる池汀、浮藻折々魚を躍らして、潑剌靜かある水のもに、幾圈の波紋を畫く處、涼風は庭の夏木立より、青疊を南より北と吹通ひ、軒の葱の露滴るも、見るからに涼し、朝餐喫し了へて何心なく池畔に立ちし壯年の、簿書刀筆の間に齷齪として、長官が一顰一笑に惴々たりし思の、今日はわが妹が新栽せる薩摩飛白の單衣のきおゝろと閑に、やがて母が烹る龍芽に爐を圍んで、一家圓欒四方山の雜話にうつる、其樂しさやろもいか許りにかあるらん、慈母が慈眸のにこやかなる、細かに伉儷が一擧一動に心をそゝぎて、其雙栖の輯睦せるをうれしむにぞあらむ、父が音容の何とおふ莞爾たり、輙然たるは、其子が膝下の拮据にはづるおくして、家聲の漸く高くからむを理想しつゝあ

るあらむや、若草の妻は良人が才高く愛情の濃かあるを感じ、子は雙親堂にいまして老來愈すあやかに、只あれ奉養の非薄あらんをおそる、人各思ふ處を異にして歸する所や一つ。融々たる和氣靄氣の四邊を纏繞して清風とゆるやかに、又浮世の風吹きもすさまず、浮世の怒濤高くもよせあず、一點の汚塵紅埃、其中を皺すを許さざる、這般一門和樂の景、凡て是れ詩、卿等もし書にうみ、俗にうまば、葛屐絺衣、翠微を攀ぢて座禪の僧を千年の古刹に訪へ、攢峰萬里鷄犬の聲遠く、白雲を隔てゝ晝靜に、白蓮紅蓮の青蓋綠りの波に映帶し、花は潑々紅裝し來りて異薰無限の幽味を知らしむ、或ひは青嵐長夏を閉じて、松影冷かに、所謂物外の蹤塵外の趣、片石觀空何切盡、孤雲對境幾年深、の邃寥、一椀の苦茗をすゝりて枰を鬪はし、禪を談ずる所、神を澄まし機を清ふする所以に於て、獲る所のもの決して少しとせず。由來茶味と禪味を、吾は確かに其間を關聯せる、一脈の冥契ありて存するを信ず。活淡寡慾共に其世塵の多に脱然たるとあろに於て。

云ひも出れば中々に心をいたましむる思ひ出にもある哉、已れ一日市にと出でし

歸り路、日は已に午に向ひて天青く、雲飄颻たる初夏の晴村、我辿りくる草逕に向つて、眼前に展開せられにし一帶の桑拓荒畦、其中に果あふも藐視せられき一群管笠の茶摘女の、吾は更に朧氣あらず認め得たり、あゝ餘念もあふ撥摘みてあれは面わは定かに知るよしあけれど、可憐妙齡の態度はかきつあやめの、引わづらふ可くもあらぬかの君あるとを、吾は勇士に轘をかえせし相如にあらざるも、何故となく愧かしき樣なる心地に逡巡し、躊躇しぬ、さばれ他に迂徑とてあき田落の一筋道、吾は雲時とても彼女を驚かすあとの何故となく厭はれて、さはれ乾路に鳴る高屐に渠は果しあふも花顏を仰きて一瞥をうつしぬ、吾は急に帽を脱して揖すれば、渠もいらへつ、されど一言を交えずして其まゝに行過ぎしが『管笠に茶摘むわきもが手の白き』とは當日歸來の一駄句にして、聊か繾綣の悒淤を洩したりし紀念、後幾日ありけん、其培爐によりて製されし月團の幾百片は、渠家よりの献芹の微意として、渠女が手によりて致されたり、己れ其鐺聲鏗々、玉椀に注がるゝ時、麗光の蒼々瑠璃の湛ゆるが如き以上鮮葉の芳馨以外、嚥下すると、神味の自ら他に異あるもの

ありて存するを覺えつ、靜平なるべき心の波動が中々に立さわぎしか。

已れ生れ得て煙を喫せず、村醪一榼に於ては猶目眩し、胸悶するの苦しみに堪えず、只茶を嗜む之より醒しきはなし、起來よし白書辞せず、昏夜可也、冷かなる氷の如き辞せず、沸々腸を爛かす最可也、渴して碧井の神水を思はずして、一碗の茶若をしたひ、嗜し來りて二三鐺を空しふする決して珍しとせず、此に於て『急須より注がるるは皆茶』てふ冷評も出で、我平生の此好癖を解するもの皆以て嗤笑の料となし、隱逸退去老翁の如しといふ、清風一吹吾亦關する處なき也。

『夏痩と答へて跡は涙哉』我や句中の人、句意我れを射るか『几によりて夏やせを嘲つ戀の人』とは我友拾骨が、已れを慰藉せし曩日の句、げにや我心火は爆燐五臓をつき來りて、八卦爐中の暑きより暑く、苦を否むで之を驅拂せんとすれば、萱草ならねくに、曩の甘くして薺の如きもの、今や即ち苦よりも苦し、あゝ。

うつせみ

『涼しさや岩にしみ入る蟬の聲』一誦し來りて我は假令紅塵堆裏大焦熱地獄の中にあるも、猶彷彿として紗巾葛履、千嶂万巒の白雲をふみ破り、千年の青苔濕ひて、土花香しき長松の下、倚りて徐ろに見ゆる青壁に衝擊し、震撼して千仞の銀河を倒まにし、漲り落る瀧津瀨の響をとよみ懸崖深く掩ひて、綠り若葉の繁きが中にあきたつる蟬聲をきく幽懷をぞ獲ぬる。

南より來りて火龍に鞭つ祝融が、二六時中の滔雪を逞しふしたり驕陽の暑も、やう〳〵に傾き行くまゝに、微涼いつしか青葉の梢にそよぎ、汗にまみれし綺衣の袂も快よくありまされば、人は轍下の枯魚、湖海に喝喰を得し快意にほつと息づくあとの、頓て、雲のたゝずまいます〳〵、くしく蚊遣火のくゆるにか、ばた飯炊く煙にや、伏屋の籬をめぐりて低迷する比ひ、かあたの畑の青桐のしげみ楓のあぬれ、せわしげにあきたつる『寒蛩』は洽ねく來らん人世の夕暮をつけて、いろしむ可憐の天使あるべけれ、假ひば松葉口に銜みて結伽跌座、專念寂莫行ひすまず白衣の行者が、折々にうちふる金鈴の音の飽まですめる夫か、孤亭の婆婦江心月の白きに翡翠衾の寒きに悲しみ、一撥彈し去り彈し來る銷魂の急絃にもたぐふ哉、透明に人の

肺腑にわけ入るとき、哀れ農夫は笠かたむけて麥を刈るにや、いそがはしき『日ぐらしのなきつるあべに日は暮ぬと、思ふは山の陰にぞありける』吳座背おひし旅人が草鞋重ふして、雲遠く此音をきゝつゝ、九折をりおやめる山路ふみさぐみ、泊にはいそぐ心のいかあるらん。

長笛漸く西風に入りて、楊柳黄ばまんとする晩景、悲秋の近く來るを遠丘に吟ずる『蛩蟟』の凄き、秋に對して尤も涙多きおのれ、またきくに堪へず。

蟬の羽衣とは世のうかれを淫れ女が、麗をつくし綺をきほへて血肉の臭骸を凉しふする今日此頃の裝へよ、生憎に蟬翼のろれより輕き澆離ある内心に、もゆる利慾の炎は此空の暑きにもいやまして、中々に名殘おうすかし見らるゝぞ笑止おれや、ましてや蟬のもろ聲よりも喧すしく、民よ民よと叫びにし十年の節操をうらうへに、獵官の名に狂する政客輩、渠等が、心の中のいかにあつくやあるらん、夫にもまして蟬よ、聞け、我は故郷ある身ぞかし、憶起す我故郷の幼時はいかに面白くもありつらん、犬息ひ草萎み炎風砂を煽れば街頭行人もおき酷熱の亭午にも、吾は母上

の晝寢の夢をかすめて、同氣相求むる惡太郎をよびつどひ、長竿蛛糸に粘せる繪網に罪おきおれを獲んとて、狂奔したりし、帽子もいたゞかず、履もうがたずて、今や一劔他鄉におちていくばくの年、旅にしあれば五百重山と歌ひけん、今や暑中休暇は來りて人は故鄉の北窓に快く枕らむも、我は歸るに家おく、長鋏叫ぶに甲斐しおければ、夏草しゞに生ふに御墓べの下、徐ろに睡り給ふ母上に省すにさへ叶はず、おれが孳々として舊時の遊びを誘ふ其聲音をきく毎に、追ふべからざるは年也、見る可らざるは親也と、皐魚が古おとさへ思ひ出られつ、耳を掩ひて思はず潸然の涙おくばあらずかし、哀れ生れて此世に用おき已れは、一日も早く空蟬の身を墳下にうづめんとすれど、故ありて叶はず、あゝ誰か蟪姑の一朝を短かしと云ふ、吾は中々に其命長きを羨やむもの也。

走る瀛車

草綠りに風かほりて晴日うららかおる初夏の朝、已れ一日の旅せんとて何がしの驛より瀛車にと乘る、瀛笛長鳴飈輪回轉し始めぬ、萬人萬樣の心胸をのせて殘りお

ふ、時しも農桑の忙時とて乘客室の半に滿ざるが、と見る三人團欒の一家族あり、老ひたるは祖母にやあるらん、二毛斑〻、幼きがふり下げ髪の可愛ざかり、そが姉と見ゆるは乙女にて、さして蛾眉綠鬢のうるはしきと云ふにあらねど、流石に妙齡二九三分の嬌態、七分の羞色を含み、紬の羽織脫して膝に載せ、絹雙子の袷に何とか云ひけん廣帶したりけるが、少女が嬉々として無心に戯るゝを折々に流盼しつゝ、物語りの絕間もおき乙女と、祖母とに靄々たる洋氣四邊をめぐりて、衆耳は悉くそに向ひぬ。思ふあれ遠き主人に仕へて嫁時ともおれるまゝに、惜まるゝ袂を强てふりきり主婦に泣かれ、朋輩に羨まれて、首尾ようも、おづかしき祖母少妹に出迎はれて、戀しき父母の膝下に歸らんあるべき、夜半翁が『記得す去年此路よりす、憐知る蒲公英、莖短ふして乳を泥む、むかしむかし切りに憶ふ、慈母の恩』底の景にやあるらん。

あゝ雙栖合歡、果して樂しきかな、我蕩焉として此に處女の運命を念ふ、失れ子女拱れていくばく、己に終生を他人に委すべき運命を有するからに、筒井筒振髪分の

頃よりも、瓦缸敗席よめ事の遊びに餘念おく、ましてや二七の春心つきしより、粉琢き香堆く、脂烘し鉛暈する濃施巧粧、鏡に向ひて日も猶足らず、姿容はあくまでもたをやかおらんを欲し、玉面は燥燒蟬鬢鴉鬢收め得て雲の如く、脈々羞をふくむの風情、とみに人人の懷ひを亂る、上ば金殿玉樓の令娘より、爨を執るの餘、夕の爐夏の扇を事とするの遑もおみ、絨を吐くの暇、只暮織晨春をきくのみおる、賤が家の子女に至るまで、皆是醪々として燕妁鶯媒の佳期良姻をまち得、富めるは叔孫通の如く、美おる藩安仁のうるはし夫に歸きおん、一日千秋の思ひ歸する處只此一燒黐に歸すべけれ、あゝ婚嫁と伉儷と果してかくの如く快事おるか、我朝の朝綱は曰く『昔纏羅帳雖慙骨肉之族、今背紗燈俄昵胡越之人、於是忽其初親其後、解單袴之紐更不知結、露白雪膚還厭醜』と、明の陳球は即ち曰く『孰料百年伉儷忽從一日遭逢、豈人力之强爲、乃天上之適令』ありと、所謂骨肉の族にはおけんもの、今胡越の人にゆるして、夫とかしづき妻と呼ばる、舅姑が豺目の光は能く針頭の纖にも及び、鬼千匹てふ小姑は嫉親反目、只夫れ少疵瑕の以て捃拾するに汲々たらば、か

の新婦たるもの其取捨と起座とそもいづくにかあらむとする、立瀬渚の一葉舟、汐干に見えぬ沖の石　人おそ見えね、其袖は乾かん暇とてあかるべきは、其然るべき行末にして、弟姑嫁し、大姑ゆきて、身漸く閑也と云ふ時は、麟趾か鳳雛か、われいざしらず、已に搾乳器とあり、世話女房とあり了して、いはゆる『愛』ある者亦いづくにか藏せる。

あゝ世の云ゆる『夫婦』あるものは、千古一摸型の道德によりて鎔鑄され、『男子は女子を以て妻とするもの也』てふ遮二無二的論理法に循據し、形骸を以て婚するが故に、内一臠々味の索然として尋ぬべきあく、斯して食ひ、かくして飲み、かくして寐ぬ、遂に一對青墳の主とありて、千歳の下誰か其名を知るらむや、詮じ來れば味氣あきものは世にいはゆる夫婦あるる哉。

若夫れ當世の妻を娶る、爭つて貌妍と否とに於てとる、己に色を以てし、之を衒勒する處の社會の制裁が、薄脆を極むる酷しき、色衰へ香うつふる、緑沼の蓮頭常に自ら並び、碧梧の鸞羽背て孤あらざるもの、夫いくばくかある、結髮已に五六歳

あらず、牛女參商とありて、空しく寒衾を擁するあとの多きは、是今日社會上の流に常に見はる處あらざるか、百結衣るに難く、自暴自棄、此に冷醪を呼むで、しばしの鬱悒を忘るゝも、妻は寒爐を擁して粗糲猶求むるによしあきを訴へ、子は饑餒に號泣して涙につぐに血を以てす、這般の生活が及ぼしたる心理的影響は、此に一家の亂濤を來して、坎坷困頓、破鏡再び合すべからざるの恨事多きは、我今日貧民の階級に於て最多きを見る。

我は婚嫁の價値あるものを疑ふと共に、處女が終生の爲一掬の派痕を記するものあくんば非ず。

あゝ戀ある哉、戀ある哉、君只妾を知りて妾亦郎あるを知るのみ、其唇は燃えて火の如く、其手は柔にして絹の如く、郎が肩にかゝる此時此情、吾又何ぞ肉體と精神とを解かんや、又底ぞ其清濁を問ふの遑あらんや、若し渠をして永遠に成就せしめば事新しく『族婦』の文字を須うるを要せん、只融々として天上の樂園に逍遙しむるものを、悲しひ哉や、依憑すべからずと云ふあかれ、世は兎に角『道德』あるも

のに支配せらる、雙互の情は假令縺綣して解くべからずと雖、かの道德あるものは横さまにろを衝激して、やにはに繫げる一綫の繩鎖を斬磔しぬ、千行の涙拂ひ去りて又萬行、其煩悶に絶えずして玉の緒を斷ち、蓮臺の半座を分つて彌陀の淨土に陶然たるは、小春紙治の如し、若し女は涙を呑んで他に嫁ぎぬ、郎只唯々として行雲流水、雲山杳に見れ共見えず、徒に悲懷の媒とおり、幽思營々として浮世に顚轉するものに至りては、何ぞ其情の悲沖にして其事の酸凄おるや、是戀、就す能はざる遺恨千年、遮莫郎が微かにかの女が面貌を理想に彷彿して、秋風さむき小萩が上に涙ちる夕、又何ぞ樂かしりし幾年の春夢を憶出て〳〵、綠葉蔭をおす渠女が涕泣の雨の如きあるを知らんや、よし地老ひ天荒れ、海枯れ石爛るゝ時はあらむとも、此情宇宙に磅礴して鉏研せられんおとのおからむ也。

あゝ氷絃長へに尙つて夜月を悲める『長安萬戸』の咏、軒端に音づるゝ秋風に『夜半にはいづこ』と嘆ける、たをやめの情も、いかで、いかで腸もえ心切おる戀の極みには及ぶべき。

あゝ其星眸をあふるゝ源に暮らしめて、旦夕の憂慮に花のかんばせ、半生の老を早ふす、志は言と伸びず、百年の苦樂只他人による、己れは到底三界に家おき身の、男子の玩物たるに終らざるべからずと悟めて、泣の涙を忍びつゝ、此世の不權衡不調和に順從する、女子の生海を觀じ來れば、我は只『人生婦人の身とおる勿れ』を唱して、我戀人の前途に滿眸の熱涙を濺す。

輾りは五分の運轉を止めて室の閉しば開かれぬ、かの一團は出でゝ腕車にうちのりぬ、乙女は一人にて祖母と少孫と、馳ゆく幌の上にも見ゆる高島田の、今や驅出にし我車と次第に遠ざかりぬ、早丈高く落しげれる樅の機がくれ、桃花流水かれは西に我は東に。

夏の河

河に於ける記憶の忘るべからざるもの此に二つ、曰く故郷に幼なおじみて瀨聲涓々今猶耳底に存するなにがしの川、曰く假のたびねの草枕に雁聲語櫓語一葦に棹して北に上りしくれかしの江。

おにがしの清流！哀れ髫齔の己が生活の、夏季のすべてか此中にありしは更にも云はず、異なる事例として今猶我記憶に殘れるは、素我家に飼養せし猫奴なりき。渠か體大きくおるまゝに、宵々の務をはせで、只管に庖厨人おき隙を伺ひては、盤肴炙肉用捨おく竊みつくして飽く事を知らず、果は牆を穿ちて維雞を屠り、籠鳥を斃し、慘掠止むおきより、隣保の責を被りしおと此に幾度、流石に惡き子程可愛き我飼猫のいにしても矯正せまほしく、五刑兼そおはれる夫おらおくに蕃椒をねぶらせ金鉛をつおげど、雙手と荆鞭と日に日に下れども、偸僻依然として枉直すべくもあらず、今は詮方もおければ河に沈めて命を絶つべく、選は已れに當りて、五七寸の春中かれか輕軀は已に籠蓋せられぬ、渠が命は一時の後おらずして絶たるべう、往く往く咿々の聲は悲しかりき、我元來いざ知らず、婦人の仁が齊王の哀か、薄翅霜にたえすで冷土にまみれある蜻蜓を見ては、立ちさり兼て四指の間に拾ひ上げ、息もて暖ため陽光麗しき青葉の上に安措するを辞ばず、篠をつかね劇雨やむで、螻蟻の一つが潦水に漂ふ時、我は木杪の一片を折りて、之を氾溺に極救する程おる、惻

隱の心の此時ひかで動かざるべき、もがき始め狂ひ始めし裂帛の聲にいやに我は心を鬼にしぬ。夕日は山にいらんとして、沙原と水面とを半つゝに色出り、行ける白帆の遠く見えて小濤汀に咽ぶ折しも、我は奮を開き、ろがなせる惡業數めて正に反ちざるを憐れみ、處刑を宣告して自が心の拙きに泣くべきを告げ、終りて首筋を抓むと共に目を睡りて力の限り翛然として投やれば、渠は數十間先おる波間に沒して再び浮び出でつ、游ぎ來りて命を乞ふげおる樣の哀れおるにも關らず、幾度も投じたる後には、殆んど向岸に沒して見えずおりしかば、流石にも憐れに蕭然として歸る比は、河柳をそよふく風寒く、白雲搖曳して、吾影坊子の永く地面に投ぜられたりき。

されど渠は其後死すおとおしに此岸の楊柳の下にありて、聲も悲しげに骨立枯瘦してありしとか、態々にも餘肴携へ行きて與へたるおともありしが、悴容枯稿眞に憐れむに堪へたりし、其後數日校に於て何心おく聞けば、渠は不幸か幸か、多くの碗白等が目に入りて捕捉せられ、波間に慘死したりとか、如是畜生發菩提心只汝の

心の拙あきに泣け、飼主に怨を及ぼす勿れ、南無阿彌陀佛。

已が嘗て鄉に歸るや、幾年相遭はざりし一友の幸ひに家にあるを訪ひ、言の他を避くるあるからに、共に携へて川涯に聳立するあにがしの丘へと赴く。迂徑苔路の木下闇をめぐりて河に對する半腹、氈の如き青苔しきて偃臥しつ、徐ろに世事を談し、過去を忍び、未來に泣き、悲泣清話、霎らくはやまず、向岸滿目の蕪隴にして麥其他の蔬菜の青綠一樣、見わたす限りきわみもあき其間、老杉のむら立ちに圍まれて、神祠の古字の現はるゝあれば、豆人點々として案拓に桑つむもあり、木橋遠く横る處、河水其邊りより瀠紆し來り、沓々たる波は白く、水は青く、此岸青松枝させる下に、釣童二三の綸をたれつゝあり、風は這般の清景に見とれつゝある已れを自在に吹きかよひて、午後の日光遠慮なく我等が面上を射ぬ、雲は逕々のべられて我等が頭にあり、互に默せる我等は只忘機の境にと入りしか。

くれがしの大江の洪水おろ恐しかりし。

山に登りて瞰下すれば、一望浩渺白からぬそあき、げにやさらでだに大河の汪曲

せる水川を合一するからに、畑を包み樹を滔して、汨々あがれ去る馮夷の勢ひ、丈高かりし桑樹の梢ほのかに現れて、田の面の大湖の如きおかしく、鞜鞋とうち寄する白浪立さわぎて、陂陀水嵩に次第の進みあり、市人は皆消防夫の裝いさましく、東西に奔馳し、土豚山の如く積み障林屏の如く立ち、夜は高張提灯賑はしく、澎湃の響きにまどろまれもせず、限りある肉體は勢茲につきて、一觥の冷酌わづかに精神を亢奮し、家ある幼老は今にも走り出べく荷擔して待つ、人心の洶湧は濁り渡れる河水の波動の如く、又血戰の今にも出來らん心もせられつ、只『凄まじき』の一語以て適評とすべし。

已れ夏の一夜草露を踏みて家路に旅せしとのありしが、そは洪水の五日後の夜にして、堤塘に竹柳の狼籍たる、そゞろ懷舊に心も冷か、天汗え月わたりて光隈もなう、影河心に投じては瀨々に碎けてゆく波早く、止水にうつしては玲瓏夜光の璧をどゞむ、空には只月あり地は只我あり、折しも向岸鼓、笛、の劉喨たるは神樂にやあらん、あゝ知んぬ、今日是れ水天王の賽日ありしを、神燈神々しく木の間もれ來

りし當夜の幽情、いとゝ忘れ難くて。

晴夏田間の小川亦稱するに堪たり、色飽まで黑く、骨飽まで太き童が手網提げて、游魚を漁する、稻の香ばしく水草の青きおど。

五月雨に水〇まさりて土橋をおえ、滿かつみの上に濁れる水瀨の早く、鯉鮒おどの、時得たりげに浮沈する、ましてや稚秧挿む乙女が蕭々の雨に歌ふ聲のおかしき、簑笠裝ひたる田舍男の馬にぬれて過ぐる、遠山里の如く、雲掩ひて見えざる又おかし。

豐太閤と能樂

大和田建樹

豐太閤三百年祭の行はるゝ將に近きに在らんとす。桃山の花と鴨川の水と。彼もし心あらば一滴の涙を濺いで往事を追懷するおと無からんや。

太閤もとは木下藤太郎より起り。一擧して羽柴筑前守と爲り再擧して豐臣關白と爲り。六十餘州を席卷したる勇を以て遠く海を渡り四百餘州をさへに威服せしめんとせし英雄おりしは犬打つ童も既に知れり。余が今紹介せんと欲するものは。其千軍万馬中の豐太閤に非ずして。此扇影鼓聲間の豐太閤にあり。豐太閤が能樂の奬勵者と爲り繼續者と爲り演奏者と爲りて。之を德川氏に遺したるは殊に味ふべき事蹟おらずんばあらず。江戸三百年の天下に取りては豈意外の賜と言はざるべけんや。抑も豐太閤の能樂に於ける。何の趣味ありて之を好みたりや。性もとより之を愛したるにも因るべしといへども。或は一種の政畧に出でしものおらんも知るべからず。

請ふ見よ。城中諸將相會するの狀態を。戰亂の世の常として功名を爭ふにあらずんば君寵を競ふの念おさへんとしても抑ふる能はず。よるとさはると拔かんとし刺さんとするの殺氣は武人社會に滿ち〳〵たりし世の中あれば、太閤あれを未然に防がんとして。與を能樂に假り以て鬱勃たる將士の心を此に集注せしめたるに非ざるか。果して然らば唯徒らに英雄の閑日月とのみは評し去るべからざるあり。

然れども太閤の希望は啻に是のみに止まらず。能樂を以て一方には將士の勇氣を鼓舞し尊君卑敵の一念を固めしむるの具と爲し。一方には戰の庭に斃れたる無數の幽魂を弔らひ更に又白刃の下に命を棒げんとする幕下將卒のために安心立命の念佛に代へしめしや疑おき事實ありけらし。

太閤記に曰く。『さるほどに太閤肥前名護屋の御陣中に在まして朝鮮軍事の左右を待たせ給ふ處に。いよ〳〵和軍勝利の由注進あり。文祿三年五月に明使來朝し太閤御目見相濟み。六月中旬立歸りければ。朝鮮在陣の諸將に歸朝すべきよし仰せ遣され。太閤は八月十四日名護屋を出立し給ひ。殊の外途中急がれける程に。同じく廿五

日大坂に御着船ありて御城に入らせ給ひ若君に御對面あり。淀君にも若君御誕生の御歡申上られ。又秀次公にも御下向あつて御歸城の御賀を述べられたり。太閤翌日御上洛御參內ありて天機を伺ひ給ひ聚樂の御所に入らせらる。云々。其翌日太閤大阪へ御歸城。其後九月中旬御城內に於て御能の御催あり。諸大名殘らず召しよせられ御酒宴あり。それより諸將皆御暇下され何れも歸國せられける。其翌年文祿四年吉野山に花見の御遊あり』と。

又曰く。『太閤殿下吉野の花を御覽じて暫く御逗留あり。御能あゞ興行し給ひ。種々の御遊宴あり。同年三月上旬御母堂御追善のため高野山へ御參詣あるべき旨を仰出されければ。山中掃除等嚴重にして待ち奉る。太閤御供勢僅にて大坂を御發駕。翌日御登山淸巖寺に御寄宿まし〳〵。木食に御對面あつて一山の衆徒を殘らず集め御両親尊靈への追福作善を營むべき旨を仰出されければ。上人承りて一山八千人衆徒を集め。両日が間御供養御燒香いかにも嚴重に爲し給ひ。數多の御施物御引出物おゞ下されければ。誠に御孝心の程を人皆感じ奉りけり。云々。さてまた淺野彈正長

政を召され。今度新作の謠五番能興行して一山の衆徒に見せ。勤學の欝を慰めんと仰出されければ。長政畏まり金春太夫暮松新九郎等を召し其用意に及びけり。又木食上人より一山の衆徒に觸れ示し。其日にありければ天氣快晴にして四方の風もおくいと靜かるに。老若の僧俗珍しき事に思ひ。清嚴寺門前に雲の如く集りて見物す。役者共舞臺に着座し。笛の音取おどゝ既に新作の能。芳野花見、高野參詣、明智、柴田、北條と名づけて五番太鼓つゞみを合せ。芳野花見の曲を奏し舞ひ出だし。諸人心を靜めて拜見しける時。晴天俄に搔き曇り濛々として天日見えず。人々いかにと思ふとおろに。高野參詣といふ能始まりしに。戌亥の方より黑雲一村覆ひ來りて惡風大雨車軸を流すが如く山中の樹木鳴動し雷電鳴り渡り。只今天地覆るかと思はれ諸人胆を消し頭を地に附けて一言を出だす人もおし。』と。

今おの二項の物語を讀みたる人は必ずや言はん。太閤が衆を集めて能樂を觀覽せしむるの熱望ある此くまでおるかと。而して其謂はゆる新作おる數曲には何事をか仕組みたる。長々しくも芳野花見と明智との全文を掲げて此に之を示さんとす。

芳野花見は一名を芳野詣とも云ふ。豐太閤天下を一統して芳野山の花見に物せしに。山神藏王權現あらはれて言葉をかはし給ふといふ仕組おり。山神をシテと爲し太閤の供奉をワキと爲す。

次第「影あきらけき日の本や。〳〵。國民ゆたかおりけり。ワキ詞「そも〳〵是は當今に仕へ奉る臣下おり。さても太閤大相國。本朝を心のまゝに治め三韓を平らげ剩へ唐土よりも懇欵をいるゝにより、武勇功をゝへ還御おらせ給ひ。山城の國伏見の里に大宮作りし給へり。又此春は芳野の花見として御參詣の御事おれば。只今供奉仕候。道行頃はは花の都の春の空。〳〵。風ものどけき淀川や。舟さしくだす明ぼのゝ。月を江口の跡に見て。大江の岸や住吉の。松の木の間の淡路島。堺の津をも打過ぎて。信太の森の梢より。猶白雲の立田山。越えて程おく名にし負ふ。芳野の山に着きにけり。〳〵。詞「急ぎ候程に。芳野山に着きて候。處々の舊跡をも尋ねばやと存候。

二人一聲「春は又花の都となりにけり。櫻ににほふ芳野山。ツレ「嵐も白き白雲の

。二人「梢を包む高根かな。シテ、サシ雲茫々花漫々。たいしゆ花にたとへば花に語あり。二人君が爲め開けはじめし天地の。久しき世々の花の色。淺からさりけるにほひかな。下、歌時つ風枝を鳴らさぬ春の日に。上、歌鶯の聲ほゝろぶる朝もよひ。〳〵。木々の梢の色々に。霞みわたれる川づらの。波にも山路ちかければ。花のうつらぬ水もなし。〳〵。

ワキ詞「いかに老人に尋ぬべき事あり。シテ詞「此方の事にて候は何事にて候ぞ。ワキ詞「されは都の人にて御座候が。當山の花はじめて御覽せられ候。此あたりの名所舊跡。又千本の櫻のいはれなど聞しめさるべく候間。近付きて言上いたし候へ。シテ詞「さん候都の雲の上人ならば。清見原の天皇の昔などは知ろしめされぬ事あらじ。又千本の櫻の事古人の歌にも。「むかし誰かゝる櫻の種を植えて。芳野を花の山となしけん」と詠じ給ふなれば。今は誰かは白雲の。色香を如何で答ふべき　ワキ、上、カヽル「あら面白の答やな。されども神代の昔より。傳へ言ひおく謂れはおきか。ツレ、上、カヽル「もとよりおゝはすべらぎを。隱すとい

へる宮どころ。シテ、上、カヽル「同じ勝手の神社。ツレ「深きめぐみは芳野川。シテ「岩きりとほし行く水の。二人「澄める心は神の代を。移す鏡と御覽じて。猶うたがはせ給ふおよ。ワキ「げにおとわりを木綿四手の。かゝる奇特を今聞くも。シテ「さもうとからぬ。ワキ「人おゝろや。上同「花の都のまれ人の。〳〵。衣の色も唐にしき。折から花のかざしにて。かざり車の下すだれ。猶たゞおらぬけしきかな。〳〵。

クリ地「そも〳〵此山と申すは。德漢土にかよひて道五臺山につゞけり。シテサシ「權現おゝにまし〳〵て。地「猶もろこしにあらはせり。シテ「然れば和歌の言葉にも。地「もろおしの芳野の山とよまれしは。事のたとへにいひながら。又故なきにあらず。クセ「かの五臺山はもとよりも。しやうりやうせんのあはひにて。氷雪のつねに滿ち〳〵て。おゝも寒力甚し。されば人倫道絶えて。おのづからある世の中に。隱家とおろ聞えけれ。シテ、上「大和路や芳野の山の奥はおほ。岩のかけみち末細く。人の往來のあらざれば。松よおたはり橋朽ちて。一鳥鳴かず山更

に。かすかおるとおろから。天くだります神心。賢き御代を仰がんの。誓の末の山高み。今を盛の花の陰。都の人の御車。よせくる道のすおほなる。御心ぞ有難き。御心の程ぞ有難き。

ロンギ地「かの老人の姿をば。〳〵。山のかせきと見しものを。心の花をあらはして。よしある今の物語。其名いかおる人やらん。シテ「今は何をか包井の。此瑞垣の内に住む。神とはいはじ千早振。みやつおと御覽せよ。地「そもや山路の奥ふかく。かくれて跡を垂れ給ふ。神躰おゝに現じつゝ。言葉をかはす不思議さよ。シテ「げにや天下の政事。ためし少おき御代おれば。神も守を添ふべしと。地「いひしもあらず山陰に。翁さびたる狩衣。日も夕暮の花曇の。雲にまぎれて登りけり。高根の雲に登りけり。

ワキ、上、歌「ふしぎや花の木の間より。〳〵。咲く花おがら中空に。花降り異香薫じつゝ。音樂聞え吹く風に。假寐の夢をさますおり。〳〵。

天女「あら面白や面白や、誰かいつし霜葉は二月の花よりも紅おりとは。車をとゞめてそゞろに愛せば色ころ花の木陰おれ、上、詞「天津乙女の天くだり。〳〵。五節の舞の羽袖をかへせば、花の色香は滿ち〳〵たり。糸竹呂律の聲々に。〳〵。妙おる舞樂の内に又。不思議や花の木陰より。金色の光かゝやき渡るは。藏王權現の來現かや。

後シテ、上「人老いて花をかんざしにして人耻ぢず。花は耻づべし老人のかうべにのぼる事を。花盛九重の雲の上。大位の光駕に月卿雲客おと〳〵く。袂をつらねて花やかおり。同「此をりふしを伺ひ給ひ。〳〵。藏王權現も形を顯し。運ぶ歩みもみつきおれや。本より芳野は千本の櫻。中に色よき一枝を。君に捧ぐる。まのあたりなる奇特かおる。

シテ「めづらしの遊樂や。同「めづらしの遊樂や。値はあらじ春の夜の。花は清香。月は霞める曙の空かけて。乙女は雲路によぢのぼれば。藏王權現は芳野の宮にとゞまり給ひ。都に還御の道を守り。都に還御の道を守りの。神德おそはめでたけれ。

明智は一名を朋智討とも云ふ。光秀討伐の事を作れるあり。秀吉をシテとし光秀をツレとす。

次第「いそぐ行衛は駒の隙。〳〵。雲井にかける心かな。シテ詞「是は羽柴筑前守秀吉なり。さても我君征夷將軍信長公。西國追討の事其仰を蒙り。天正十年の春より。備中表敵軍對陣候處に。明智日向守逆心を搆へ。將軍を討奉る由注進候間。急ぎ光秀が頭を刎ねうずるにて候。サシ「頃は水無月初つかた。多勢の敵を從へつゝ。既に打立ち雲水の。流れて早き年の矢の。勇む心にまかせゆく。跡はる〳〵の備中や。備前表を顧みて。道行「五更の天も明石潟。〳〵。須磨の浦風立ち迷ふ。雲より落つる布引の。瀧の流れも遙なる。蘆屋の灘も打過ぎて。難波入江のみをはやみ。芥河にぞ着きにけり。〳〵。シテ詞「暫く此處にて諸卒を揃へ。敵の中へ切つて入り。彼逆徒を討つて將軍の孝養に備へばやと存候。いかに誰かある。トモ「御前に候。シテ「皆々近う寄つて物語を聞き候へ。

クリ地「ろも〳〵人間界と申すは。佳月光をあらはせば狂雲これを妬み。王者明るらんとすれば又讒臣これをおほふとかや。シテ、サシ「さて光秀が行跡といつぱ。外には柔和忍辱の姿。同「内には逆心無道の心の奥は白眞弓。シテ「もとより君の身を任せ。同「やみ〳〵討たれ給ふ。御運の程あそ淺ましけれ。クセ「されば秀吉は。名におふ城の高松に。水せきかけて攻めて寄る。浪に沈めてうたかたの。あはれを掛けて後詰の。其猛勢に取り向ひ。攻伐すでに半ばるに。將軍討たれ給ふぞと。注進ひそかにありしより。肝たましひも消えかへり。涙に咽ぶばかりなり。心よわくて叶はじと。いよ〳〵陣を取り寄せ。味方の胸を靜めんと。一首の歌にかくばかり。シテ「兩川の一つにありて落ちゆけば。同「もり高松も藻屑なりけり。よむ言に違はず。城主腹を切りぬれば。其援兵も退けて。文武の道を兼ね備へ。涙の屯を引き拂ひ。夜を日に繼いで登りつゝ。敵を討たん志。感せぬ人はよもあらじ。シテ「然るに楚國の懷王の。項羽に討たれ給ふ時。漢の高祖は之を聞き。烏江の流れ打ち渡り。主君の敵を討ち給ひ。四海を靜め給ふ事。是

れ天命に非ずや。それは七十餘度の戰ひ。今は一戰にて本懷を。達すべきとの武士の。やたけ心ぞ恐しき。

シテカヽル「時刻うつして叶ふまじ。日影を見れば斜なる。雲の旗手の天つ空。水なき月の水無瀨川。山本づたひ山崎の。宿の東に打ち出だし。敵陣近く寄せて行く。

ワキカヽル「抑是は明智日向守光秀とは我事なり。詞「某一たび天下に心を掛け。名を後代に留めんが爲め。將軍を討ち奉りて候。然る處に羽柴筑前守駈せ向ひ候間。カヽル「一戰に及び勝負を決すべしと。同「言ひもあへぬに寄手より。〳〵。おへ〳〵鬨を作りかけ。及腰揃へてかゝりけり。ワキ「其時光秀は。〳〵。先勢早く崩るれば。叶ふまじとや思ひけん。まづ勝龍寺に逃げ籠り。日も吳竹の夜に入りて。物あひ見えず爲りはてゝ。敵の人數に打ち紛れ。淀鳥羽さして落ちゆくを秀吉おつかけ給ひつゝ。いづくまでかは逃すべきと。甲の眞向打ち割り給へば足弱車の。廻る因果は是ありけりと。思ふ敵に白波の。よりては打ち歸りては打ち。疊み重ねて。百たび千たび打つ太刀に。今ぞ恨も晴れて行き。天下に名をも賜る身の。忠勤こゝにあらはるゝ。威光の程おそ勇々しけれ。

二曲いづれも由己法橋の。命を奉じて作れるもの。文の拙劣なる意匠の淺薄なると共に固より見るに足らざる作なれども。一讀以て太閤が抱負の偉大なるを證して餘ありといふべし、かの芳野花見に『中に色よき一枝を君に捧ぐる』といひ。明智に『雲井にかける心かな』といへるが如き。如何に聽者の心に震動を傳ふるの電氣たりしか。或意味より言へば。當時の軍歌として十分價値あるものありしが如し。太閤また好んで自ら舞ひたり。請ふ先づ文祿二年の十月五日。禁裡に於て天覽に供へたる番組を示さん。(笛以下の囃子方は姑く畧して掲げず)

初日

式三番　翁　千歳　暮松新九郎　長命彌右衛門　三番叟　下與　右衛

弓八幡　秀吉公　ワキ　ツレ　春藤六右衛門　金春太夫

秀吉公

芭蕉　タキ　如丈

秀吉公

皇帝　ワキ　甲田帶刀
貴妃　岐阜中納言殿
羽柴筑前守（前田利家事）

源氏供養　ワキ　如丈
岐阜中納言殿

千壽　ワキ　春藤六右衛門
ツレ　小性
江戸大納言樣（德川家康事）

野々宮　ワキ　淺野彈正少弼
秀吉公

山姥　ワキ　下村宗巴

秀吉公

三輪　ワキ　下村宗巴

二日

式三番　翁　暮松新九郎
千歲　長命彌右衛門　三番叟　木下與右衛門
秀吉公

老松　ワキ　甲田帶刀
ツレ　金春太夫
秀吉公

定家　ワキ　春藤六右衛門
蒲生氏郷

鵜飼　ワキ　下村宗巴

耳引　秀吉公
家康公
羽柴筑前守
丹後少將（京極高知事）

遊行柳　ワキ　長井
秀吉公
大會　ワキ　下村宗巴
備前宰相（浮田秀家事）
楊貴妃　ワキ　春藤六右衛門
丹波中納言（豐臣秀勝事）
東岸居士　ワキ　甲田滯刀

三日

式三番　翁　小春太夫
千歳　長命彌右衛門　三番叟　本下與右衛門
秀吉公
吳服　ワキ　春藤六右衛門
ツレ　金春太夫
秀吉公
田村　ワキ　甲田滯刀

秀吉公
松風　ワキ　如丈
ツレ　金春太夫
羽柴筑前守
江口　ワキ　池
ツレ　筑前守小性
家康公
雲林院　ワキ　永井右近
秀吉公
杜若　ワキ　下村宗巴
岐阜中納言殿
紅葉狩　ワキ　羽柴筑前守
ツレ　小性二人
岐阜中納言殿
通小町　ワキ　淺野彈正
ツレ　小性

秀吉公

金札　ワキ　春藤六右衛門

見よや太閤のシテを演せしもの一日五回の多きに居るあるを。其好むところ尋常からざりしは以て知るべきあり。中にも芭蕉の如き定家の如きは、徐歩緩舞きはめて位しづかある曲。觀る人をして轉た睡眠を催さしむる程のものあるに。太閤すゝんで之を演じ。剩へ松風杜若の如き優にやさしき女物をさへ試みたるは。謂はゆる英雄日月に非ずして何ぞや。今ぞ知る太閤の能樂は我好むところを人に施して政略上に使用せしものある事を。

さても能樂は足利氏に起りて德川氏に大成せり。而して其間に出でゝ之を繼續せしめ之が奬勵を爲したるものは豊太閤あり。聞く三百年祭に三日間の能樂ありと。知らず演者中よく當時の金春八郎暮松新九郎の如きものありて神靈を地下に慰むるに足る可しや否や。

夜雨莊を訪ふ記

無量劫道人

大磯の昔ぞ忍はるゝ長者林、一代の豪奢を極めたる琴絃歌舞の巷、黄昏鳥雀の悲むを聞くのみあらんや、颯々たる松風に和して歌ふ太平洋の磯邊を洗ふ浪の音、徒らに昔しの榮華の夢を語るのみ、

淋氣の見ゆる松の小森のその中に一棟の新らしき風雅の家、何人の住家そ、その主人ぞゆかしき

構子戸を押し開けて物問へば、出て來る小童、刺を通すれば奥へとぞ申さる、質素あれど逸雅の小座敷、見回せは夜雨莊の額は欄間の上に懸かりぬ、夜靜かにして松風の蕭々たるを聞く雨の襲ふかと疑はる、莊號の起る所以か、

そも主人は何人ぞや、大根器、大智慧の士、昂藏的丈夫、一度び天下の樞機を握り、畫策經營の業成り、相宰の位を一擲して弊履の如く、思を水澄珠瑩の際に肆にし、志を風清月白の時に放ち、白眼超然、徐ろに世運の轉遷するを觀覦す、何人ぞや

此の達人は、

水邊林下の吟咏笑談、酒素より無かる可からず、即ち酒を呼ひ、万引大盃す、談は則ち遍く沙界に滿ち論は則ち纖塵の微に轍す、或は世道人心の機變より、人邦興亡消長の哲理に及び、千古英雄豪傑の成敗利鈍を講して世運一轉の機を微茫の裡に覗る、或は當世經國の大務を説き渾圓球上に於ける建國將來の鴻圖を論ず、高妙玄著其論説縷述する處、一代を睥睨するの慨あり、胸襟廓落として光風霽月の如く然り、彼に滿腔の抱負あり、經綸あり、而して彼今ま凝然杜默す、渠豈に徒らに水邊林下に吟咏するものならんや、清風皓月に志を賦して止むものならんや、『行藏自有時』是れ實に渠が心事也、

世俗は俗を追ふて走り、世は流れに隨て流る、渠は常に一世を達觀す、渠はビットの如く經論を有する政治家也、渠は又タレーランの如く世運の轉移せる機を微茫の裡に觀取するの明あり、渠は今杜默す、其杜默するの時なるか故に杜默するのみ、然れとも天下豈に久しく渠の杜默を許さんや、渠は今湘南の別業に閑臥す、其閑臥

するの時なるか故に閑臥するのみ、天下豈に久しく渠の閑臥を許さんや、

快譚時は移る、乃ち辞して去る、夜雨莊の主人とは何人ぞや、無邊先生其人也、

女詩人班婕妤

白河鯉洋

『新裂齊紈素。鮮潔如霜雪。裁成合歡扇。團々似明月。出入君懷袖。動搖微風發。常恐秋節至。涼飈奪炎熱。棄捐篋笥中。恩情中道絶。』温柔敦厚、至情寔に人を動かす、沼々たる支那幾千の詩人が、豪俠を衒ひ、憂悶を裝ひ、強いて自ら詩人を以て居るものに比すれば、其差天壌万里。是れ豈所謂肺腑より出でゝ自然に節を成すものにあらずや。此詩を作るものは誰ぞ、班氏の女、漢王の婕妤。

班婕妤は其名を詳にせず、左曹越騎班況の女、班彪の姑なり。賢才通辨の稱あり。成帝位に即きしとき、選ばれて後宮に入り、始めて少使となる。俄にして大に幸せられ、遂に婕妤となる。成帝後庭に遊び、嘗て婕妤と輦を同じうせんと欲す。婕妤辞して曰はく、古の圖畫を觀る、賢聖の君皆名臣の側に在るあり、三代の末主に至りて、乃ち女嬖あり、今ま輦を同じうせんと欲す、之れに似るおきを得ん乎と。上其言を善しとす。彼れは優婉の美人、別に這の般の氣象を有しき。

詩を誦して窈窕、德象、女師の章に至る毎に、必す之を三復し、進見する毎に、上疏必ず古禮に依りしと云ふ。彼れ亦到底支那の女性なり。婦道と稱する一種の束縛に甘んじて、女性の眞情を抂ぐるおしとせす。而かも怨歌行一篇、常に秋扇とおりて、恩情の中道に絶えんおとを恐るゝの意に見る。好箇温柔婉雅の佳人を描き出して、誠に遺憾おし。彼れ遂に其天性に反つて、其情の眞を吐けるか。何ぞ人を動かすの深且切おるや。

鴻嘉の後より、成帝稍女寵に荒む、婕妤乃ち侍者李平を進む、李平幸せられ遂に婕妤となる、彼れ少しも妬まざりき。此時に當りて宮庭頗る亂る、趣飛燕姉妹尤も寵幸あり、飛燕等太だ驕妬、遂に婕妤を譖訴す。彼れ敢て辨せず、強いて考問す。乃ち自若として曰はく、妾聞く、死生命あり、富貴天に在り、正を修むるも尚ほ未だ福を蒙らざるに、邪を爲して何をか望まんとする、且鬼神知るあらば不臣の訴を受けじ、如し其れ知るなくば、訴ふるも何の益ぞ、故に爲さすと。口に天命を言ふて、敢て譖訴を辨せざりしと雖も、彼れは斯時、身の既に秋扇とおつて、篋笥の中に

棄捐せらるゝを自覺したりき。愛か、愛か、彼れは成帝の婕妤、單に婕妤として成帝の愛を望みたりしか、あらず、彼れは一個の女性として其夫を愛したりし也。而かも今や終に望むべからず。乃ち万斛の泣血を蔽ふて、優然として東宮に退きぬ。彼れは東宮に在るの間、賦二章を作りき。其一に曰はく、

承祖考之遺德兮。荷性命之淑靈。登薄軀于宮闕兮。充上陳于後庭。蒙聖皇之渥惠兮。當日月之盛明。揚先烈之翕赫兮。奉隆寵于增成。既過幸于非位兮。竊庶幾乎嘉時。每寤寐而累息兮。申佩襍以自思。

何等敦厚の詞態ぞ。

悲晨婦之作戒兮。哀褒艷之爲尤。美皇英之女舜兮。榮任姒之母周。雖愚陋其靡及兮。敢舍心而忘茲。歷年歲而悼懼兮。閔繁華之不滋。

寔に宮庭淑女の言也。

豈一人之殃咎兮。將天命之不可求。白日忽以移光兮。遂奄莫而昧幽。猶被覆載之厚德兮。不廢捐于罪郵。奉供養于東宮兮。託長信之末流。供酒掃于帷幄兮。永終死以爲期。願歸骨于山足兮。依松栢之餘休。

其二に曰はく

潛玄宮兮幽以清。應門閉兮禁闥扃。華殿塵兮玉陛苔。中庭萋兮綠草生。廣屋蔭兮帷幄暗。房櫳虛兮風冷々。感帷裳兮發紅羅。紛粹綵兮密覩處。君不御兮誰爲榮。俯視兮丹兮、思君履兮纂。仰視兮雲屋。雙涕下兮橫流。顧左右兮和顏。酌羽觴兮消憂。惟人生塵一世。忽一過兮若浮。已獨嚮兮高明。處生氏兮極休。勉娛精兮極樂。與福祿兮無期。綠衣白華自古兮有之。

沈靜氣人に逼るを覺ゆ。佳人隆寵の末路。痛むべく哀むべきもの、生々人目に映し、千百年の後をして猶ほ其人を懷はしむ。

成帝崩ず。丹墀を俯視し、靈屋を仰視し、一日も其人を忘れざりし彼れは、空しく失戀の好文辭を遺して、溘然其迹を追ふて去りぬ。

劉向頌して曰はく、君予謂ふ、班婕妤同輩を辭するの言は、蓋し宣后の志也。李平を同列に進むるは、樊姬の德也。詛祝の讒を釋くは、定姜の知也。供養を東宮に求

むるは、寡李の行也。其の賦を作るに及びては、哀しむで傷らず、命に歸して怨みず。詩に云ふ、有斐君子、如切如瑳、如琢如磨、瑟兮僩兮、赫兮喧兮、有斐君子、終不可諠兮と、其れ班婕妤の謂也と。婕妤は蓋し其過賞を辭せんか。されど、此の温柔優婉の佳人を目して詩人と稱するもの、我も亦罪を此人に得んかな。

新体詩押韻の事

越智處之助

新体詩押韻の事は曾て言へりしかども全く空論に出でたりしあり。今年にありて後、自ら之を試みたるに其結果は意外の事多くして、或は前の空論と撞着するあとさへあり。故に實驗の結果を左に記して文學者の一讀を煩さんとす。新体詩に韻を蹈みたるは新体詩鈔の中に一篇ありしやうに覺ゆ。其後は有りや無しや知らねど、近時の雜誌には餘り見當らず。

日本文の構造は押韻に適せずとは人己に言へり。吾も爾か思へり。蓋し日本文にて一句の終りに來る者は「てにをは」助動詞、動詞、形容詞等多く、中にも最も多き「てにをは」助動詞は其語數極めて少く、動詞、形容詞語尾畧一定せるを以て、韻の變化を得ざるあり。裏面より言はゞ語尾の最も多く變化せる名詞を韻に蹈む能はざるあり。

和歌を見るに毎句の終りに名詞を用ゐたるは少し。（散文より多きは言ふを俟たず）

近時の新体詩を見るも（藤村を除く外は）一句の終りに名詞を置く者極めて少し。あれにては到底韻を踏む能はざるべし。新体詩鈔中にありし押韻の詩も名詞は少かりきと思へば多くは作れぬわけあり。日本にて古來韻文の体を成す者にて句尾に名詞多きは俳句あり。只俳句は一首の長さ新体詩の一句位あれば長さの點より韻を踏む能はず。今新体詩に韻を踏まんとせば多少俳句の構造を學ばざるべからず。又俳句の構造を學ばんには新体詩に韻の踏めぬ事はあるまじと思はる。

新体詩の押韻は極めて難事ありと思ひあがら作り試みぬ。或は全く出來べからずとさへ思ひし押韻も、思ひしよりは容易に出來上りぬ。詩の巧拙は姑く置き韻踏み得し點に於て嘻しかりき。是に於て新体詩に韻を踏み得べしとの望高まりたり。

實驗の結果出來上りたる新体詩は從來の者に比して句法は著く曲折多し。是れ名詞副詞等の句尾に來りし故にして、世人は或は佶屈聱牙とか支離滅裂とか文法に違へりとか評するかも知らず。然れども散文よりも佶屈聱牙なるは韻文の常なり。散文に比して支離滅裂の處多きも韻文の常なり。散文の文法を固守するに反して多少文

法を破る傾あるも韻文の常なり。支那の詩然り。英國の詩然り。他の諸國の詩亦當に然るべきを信ず。而して日本の新体詩を見よ。其句法の平易にして文法の正しき殆ど散文と擇ぶ無きあり。例へば

都に近き山里にいやしき翁すまひけり。竹とるわざをたつきにてみやつこ磨と名を呼びぬ。

猶みあゝろやかゝりけむ女ひとりのたばかりにいかで負けむと宣ひて翁を召させたまひけり。

みかどの仰せかしこまり翁あたへて申すやう我子と假に名のれども變化の人に侍るあり。

の如き散文的に書き下せば散文とも讀まるゝあり。句法の平易にして文法の正しきを嫌ふにあらねど、それがために韻文固有の趣味を失ひなば韻文として何等の價値も無かるべし。吾作を以て佶屈晦澁とあす人は澹泊無味の散文的句法に偏する人にはあらずや。或は吾作を見て解し難きとさへ評るす人あり。作の拙劣なるがために

人に解せられざる處も多かるべけれど、中には古來ありふれたる散文的和歌のみを讀みし人の韻文的句法に馴れざるがためおるべしと思はるゝ節もあり。吾作を見て解し難しとする人は俳句をも解せざるべし、支那の詩をも解せざるべし、西洋の詩をも解せざるべし。日本の人漢學に深からずとも漢書を讀みて一通りの義を解する人は多し。されど漢詩を讀みて如何に考へても解せられずと思ふ句少からず。是れ强ちに古書古語の解し難きものあるに非ずして猶然るは韻文的句法の佶屈おるがためのみ。漢學に深き人といへども詩を學ばざるものは詩句を解する能はざるおとあり。西洋學者も亦同じ事おるべし。日本の普通の新体詩を標準として佶屈と許する者は必ず佶屈に非るべし。且つ韻を蹈み調子を合すために曲折多くなるは詩の常おれども、韻と調子のために曲折多きをおらえるには非るあり。縱ひ韻と調子とに關係無くとも、曲折多きは韻文をして趣味多からしむる所以あり。俳句には比較的には曲折多し。和歌者流が俳句を目して佶屈晦澁とおす者も亦韻文を知らざるあり。ヲルヅヲルスは詩語を厭ひ散文的韻文を好む者あり。其作亦平易にして尋常あり。

然れども平易尋常といふは他の詩人に比して言ふ者にして日本普通の新体詩に比すれば猶曲折多きを免れず。酷に言へば今の新体詩は韻文に非るあり。（韻の有無に關せず）今の新体詩にして韻文と謂ふ可くば馬琴の小説も盡く韻文と謂ふべきか。ある詩人は杜甫の「將軍魏武之子孫。於今爲庶爲清門。」の句の散文的なるを賞し、ヲルヅヲルスも亦グレイの

I fraitless mourn to him that cannot hear, And weep
the more because I weep in vain.

等の句の散文的おるを稱す。吾はヲルヅヲルスの論を何處迄も正しとは思はず、されど散文的韻文が韻文の一種として存ずべきは論を俟たず。只韻文おるを許さゞるおり。

實驗の結果、名詞を韻にするおとの難きと。名詞を韻にせざるべからざる必要とを認めたり。難といふは從來の平易おる句法を破らざるべからざる故あり。從來の平易おる句法を破りて名詞を下に置けば吾おがら佶屈に感せらるゝおとあれど、そは

多く耳馴れぬためあり。漸く作るに從ひ漸く耳馴れて終には何とも感せぬ程にありぬ。

韻とするに最も便利あるは副詞（又は代名詞、間投詞）あるあとをも認めぬ。例「實に」「夫れ」「其の」「何」「すわ」「はや」「今」「さも」等の語あり。蓋し副詞は文章の構造上、尤も動かし易き位置を持てるあり。

又押詞の上より倒句法の必要をも認めぬ。例

魔に取られしか、逃れ得ず。

の如し。逃れ得ずして魔に取られしかの意あり。又「てにをは」動詞、形容詞を韻に蹈む時は對句を作るあとの容易あるをも認めぬ。

又「し」「き」「り」「る」「て」等の韻を用うるの必要多く、且つ此等の韻の用ゐ易きあとをも認めぬ。

韻の量に付きて種類あり。西洋にては最後の母音（其母音の後に子音來る時は其子音をも併せて）を繰り返すあり。

go, show, 又は chain, main; の如し。支那にては一字の音を全く繰り返し又は半ば繰り返す者なれば西洋の韻と同じ量か又は之より少し多きあとあり。例へば「リン」「ギン」といふ韻は西洋と畧同じく、「シウ」「シウ」といふ韻はSの子韻だけ西洋のより量多し。西洋にてもSir といふ一語を幾度も繰り返して韻とあすが如き變例無きに非ず。支那古代の詩には普通の韻の下に更に「之」「兮」等の字を加ふるあとあり。此場合には韻の量は一字半若しくは二字とある。

日本の語は總て母音を以て終る者あれば支那、英國あとゝ稍異あり。故に其量に付きて三説あり。

第一、最後の母音のみを韻とする者（あ、か、さ、た、な等皆同韻あり。此説に從へば僅に六種に止まる。即アイウエオンあり。）

第二、最後の一字だけを韻とする者（「い」と「ち」、「か」と「か」、「ぶ」と「ふ」、「ん」と「ん」、「きョ」と「さョ」の如し。此説に從へば韻の種類八九十ある筈なれど實際に用ゐ得べきは四五十に上らざるべし。）

第三、最後の一字と其前の字の母音とを韻とする者（「きん」と「りん」、「つく」と「すく」、「よる」と「のる」の如し。此說に從へば韻の種類は非常に增加す。）日本語は母音を以て終る故にいくらでも句尾の音を永くするを得。例へば「すべッて――、あろんで――」といふが如く「て」「で」の聲を長く引く時は此兩字の下に「エ」の韻も生るゝあり。斯の如くすれば韻の量西洋と同じくして第一說は効力あらん。然れども日本人の詩を誦するを聞くに必ずしも句尾を永くせず。若し普通に言ふが如く「お」「も」と短く讀まば殆ど韻を生ぜず。是に於て第一說は缺點あり。故に第一說に從はんとすれば初より句尾を長く引けとの注意を爲さゞるべからず。第三說は西洋の韻法より來りしものゝるべけれどの韻量は西洋のよりも多し。新体詩鈔中の韻は此種の者ありきと覺ゆ。

吾が今迄の實驗は第二說を取れり。是れ唯此量を適度と信じたるに因る。若し句尾を長く引くものとすれば第二說も量の多きに過ぐる感あり。此場合には第一說に從はんか。

韻の距離といふもとも一問題あり。今迄實驗せし押韻の距離と配置とを圖に現せば左の如し。（尤も調子は五七調又は五七調を用いたり）

甲
○○○○○○○、○○○○イ
○○○○○○○、○○○○イ
○○○○○○○、○○○○ロ
○○○○○○○、○○○○ロ

乙
○○○○○○○、○○○○ハ
○○○○○○○、○○○○ニ
○○○○○○○、○○○○ハ
○○○○○○○、○○○○ニ

丙
○○○○○○○、○○○○ニ
○○○○○○○、○○○○ホ
○○○○○○○、○○○○

ヘ　○○○○○○、○○○○ホ
○○○○○、○○○○○○ヘ
○○○○○、○○○○○○ト
丁　○○○○○、○○○○○ヘ
○○○○○、○○○○○○ト
○○○○○、○○○○○○ヘ
○○○○○、○○○○○○ト
戊　○○○○○○○、○○○○○○
○○○○○○○、○○○○○チ
○○○○○○○、○○○○○○
○○○○○○○、○○○○○チ
○○○○○○○、○○○○○○
○○○○○○○、○○○○○チ

己　○○○○○○○、○○○○リ
○○○○○○○、○○○○○ヌ
○○○○○○○、○○○○○ヌ
○○○○○○○、○○○○リ

韻の距離の尤も近き者は甲にして尤も遠き者は巳の「リ」なり。韻の配置は一調終りて一韻來る者と二種の韻錯綜して來る者との二種あり、一韻の數は二又は三なり。(此外多少の長短句を具へたる者あれど畧す)

韻の距離遠ければ遠き程作るに易し。

韻の配置は作る上に關係無し。但甲は作るに難く乙は作るに易し。おは配置よりも寧ろ距離に關す。

丙は乙に比して更に易きを見て知るべし。英詩を見るに乙の押韻法の如く二種の韻錯綜して來る者比較的に多きが如きは作り易きが爲なるべし。蓋し甲の押韻法に從へば作者の思想を自由に現すべきは第一句のみ。第二句は第一句と韻と合さんとす

るために束縛せらる。乙の押韻法に從へば第一句第二句と續きて作者の思想を自由に現すを得べし。第三句第四句と續きて束縛せらるれども其方は實際上左迄苦しからず。殊に日本語にては前に「雨の」といふ句尾を用ひ次に「人の」といふ句尾を用ゐるが如き場合に、甲の如く續けて用うれば甚だ聞き苦しけれども、乙の如く一句隔てゝ用うれば左迄耳立たず。されば新体詩には乙式の方甚だ用ゐ易し。日本語にては韻の數三以上を用ゐんは最も困難あるべし。戊の式にても多少の困難を感ぜり。丁は猶更の事あり。若し三句續けて韻を押さば一層困難あらん。

韻の効力は主として距離の遠近に因りて相違あり。距離近ければ強く。遠ければ弱し。配置とは關係少けれども二韻錯綜して來る時は幾分か効力を弱くすべし。韻の數は多き程効力强からん。（韻の量はあゝに言はず）

韻の効力は七五、五七の毎句續けて蹈むとも强きに過ぐとは思はず。西洋の詩の毎句に蹈めるを見ても爾か感ず。之に反して一句又二句を隔てゝ韻を踏む時は韻の効力甚だ微弱あり。微弱あるに拘らず一句二句を隔てたる例支那西洋に多きは半ば形

式に流れたるに非るか。

韻が調子に於ける効力を除きて、更に押韻の一事が作者に對する影響あり。押韻が文字を束縛し從つて思想を束縛するは作者に與ふる害あれども、作者に與ふる利も亦少からず。其利を擧ぐれば

第一、狹き範圍に在れば却つて自己の技倆を現すに適するあと

第二、言語の範圍を限らるゝがために却つて思想の上に惑を生せず早く作り得るあと

第三、限られたる韻語を探して韻語より思想を得るがために却つて奇想警句を得るあと

等あり。此利益あると古法を保守するの精神あるとより、縱ひ形式に流るゝも猶押韻を廢せざるものか。日本の詩人が漢詩を作るに支那音を知らずして却つて韻を踏むも亦此故あり。（こゝに列擧したる利益は押韻より來るに限らず。字數を合せ、調子を合するも亦同じ。但第三は押韻より來るあと尤も多し。）

吾は調子の上より新体詩に韻を踏まざるへからずとは言はず。されど今の散文的新体詩を韻文的あらしむる一方便として韻を踏むあとを勧むる者あり。韻を踏みたるがために佶屈聱牙ともあらん、支離滅裂ともあらん。佶屈聲牙も支離滅裂も刺激劑として必要ありと信ず。今の新体詩家にして韻を踏み得る者はろれ藤村か。

人生の風流を懐ふ

枇杷坊

國破れて山河在り城春にして草木深しとは天地の姿ありとす。うき草のさだめあき人間萬事紛々としてきのふはあなたにさまよひけふはあちらの岸にたゞよひ、世を擧げて干戈兵馬の勢に心を驚かすの時といへども天地悠々として鳥啼き花落ち水ながのづから流る。萬里の長城長からざるにあらず、埃及の「ピラミッド」高からざるにあらず、巴里の凱旋門壯あらざるにあらず、英雄の敵を殺すや豪あらざるにあらず、壯圖の國を覆へすや偉あらざるにあらず、いかんせん長城長しと雖も萬里を越へず「ピラミッド」高しと雖も數千尺を出でず、凱旋門壯ありと雖も天を摩するに足らず、敵を殺すも限りあり、國を覆へすも亦限りあり。退いてかぎりあき人生を味ふときは月小ありと雖もあめつちを照すにあまりあり雨細しと雖も宇宙をうるほすにあまりあり、悠々として照日の影もうつろい花と落ち雪とそゝぎ、とおしあへに幾千年の風情をつくすもの、あれ之を風流といふ。

人生風流多し。しかも風流の戀に越へたるはあらす。雷音洞主はこれを以て風流悟とは呼びけむ、今天地の姿を風流とおし風流の姿を幽玄ありとせば、西行芭蕉ウオルヅウオースの見て以て幽玄のさかひとおせるところのものシエークスピアが見て以て幽玄のさかひとおせるところに異おれるものあるが如し。西行の和歌に於る芭蕉の俳諧に於るウオルヅウオースの詩に於る彼等は生れ得て月を尋ね花を尋ぬるものに似たり。此故にきさらぎの花の下にうづもれ、白河の秋風にはらわたを晒し、郭公鳴く「ライダル」の山頭に立て天地の間に幽玄の風情をさぐる。シエークスピアはしからず、彼が見るところ物として月にあらず花にあらずといふことなし、故に尋ねずして心すでに月とおり花とおり、身は天地と一にして萬物おとゝく幽玄のドラマに入る。さればすゞしきもの濁れるものを問はず、ありとあらゆる戀を納めて之を月花の袋に入れ身と天地とドラマと一におりて靈心千年の風流を吐く。矢れ戀は言ひ難きが如く論じ難きものおり、予やみだりに之を論ずるおとを好まざるものおれど、ひろかにおれら故人の杖にすがりて暫く人生の風流をたどらんか、

人生風流の粹なる戀を懷はんか。

そも〳〵人のおの世にあるや、長じて六尺を越へず、居數尺を出でず、日に行くおと十數里に過ぎず、浮生を托するおと百年に及ばず、蝸牛の殼を負ひ蓑虫の蓑を荷へるがおとく、くたぶれて五十年の宿を月と花との影に借り、飄々として天地の間に飛ぶ。遇ふとおろのもの必ず敵に非ず、友とするとおろのもの必ず故人に非ず。おの故にくるしむときは親を懷ひ、かおしむときは同胞を思ひ、黨を結び、國を立て、君を尊び、あるひは松風の下明月の前かぎりあるの友にあきたらずして佛を無想のさかひに求め、ミユーズを月花のかげに尋ね、理想のきはみに造化大鈞をさぐる。されば人の戀を求むる亦おれに外おらんや。化して骨とおるべき姿にあきたらず無限のさかひに戀を尋ねんとするは人の性おり。人は生れ得て明おるものに非ず、きふの賢者必ずしもけふの達人たるおとを定めがたし。人は多く盲目おり。おそるべきものを抱いて之を無二の友とあやまり、心を臭骸にまどはしてしば〳〵「エンゼル」のおもかげを罵る。よしや〳〵かの戀人を尋ね得たりとするも、あるひと

は之と共に色情の魔界に溺れて腐腸を天地の間に晒し、あるひとは之と共に三更月下一たび躍て無我の「パラダイス」に入る。まあとにその間一髪の機を容れざるものに似たり。嗚呼惡魔と「エンゼル」の人間を相去ること僅に數歩の餘地をのあすのみあるは何ぞや。

天地の間二個の怪物あり、あれを名けて塵といひ精といふ。ろの戰ふや野に於てせず、山に於てせず、必ずや人間の心中に戰ふ、奥羽白河のほとりつはものどもの夢むあしく一面のくさむらとはあれるとあろ人もしあれをもて源氏史中の古戰場ありとせば、文覺上人西行芭蕉菴桃青あれみあ天地といへる歴史に於て大ある古戰場にあらずや。ろの戰ふや敢て干戈劍戟のたぐひを用ゐず、しかも見えざる劍を振ひ、見えざる戟を擊ち、その相觸れて閃光を放つや之を詩といひ歌といひ發句といひ、ろの相觸れて音をあすや之を樂といひ「ミユージック」といふ。一篇の山家集千五百六十八首、誰かあれを以て天地の古戰場にあらずとせん、誰かあれを以て落日古城の悲慨を懷はずとせん、誰かあれを以て東洋風雅の殘壘にあらずとせん。形あれば

數あり、數あれば限りあり、さればうき世の敵は盡すべきも心中の敵は應にすべからず。一敵すでに斃れて一敵また來る。かれ百尺の鋭を振ひ、精いよ〳〵天に達するときはこれ亦百尺の鋭を振ひ、精いよ〳〵地に踞る。戰つて勝たずんば止まず、勝て穀さずんば止まず、殺して墳墓の中に投せずんば止まず。しかも五十年の間に於て氣滿ち神高く肉肥へたるのあかつき彼等が人間のうちに相挑む、これ實に戀の戰にあらずや。

あの戰に敗れたるものはまことに戀の無限なるあとを味ふのいとゞ無きものなり。けがれたりと知りて尙塵を甘しとし、くされたりと知りて猶芥を尊しとし、いたずらに臭骸に愚弄されてあやにくにその肉に心をとゞめろの骨におもひをのあし、肉のほか骨のほか又戀あるあとを知らざるに至る。彼等は戀のうろたへものあり。あゝろみに書をひもときて吾國二千年來の風雅を懷ふに、山家の寂をして多く幽玄を自然に觀せしめ蕉門の詩人をしてしばらく古池の水の音に浮世を避けしめたるものは塵中の戀を以て詩神を汚すに忍ひざりしにや。嗚呼難波の奇才をして肉戀を畫く

にとゝまらしめ、吾國の戯曲をして多く肉情と戀とを混せしめたるもの、そも〳〵あれ誰の罪ぞや。俗と呼ばれ俗と嘲られ猶臭骸の忘るべからざるか。慾情は「モータンタル」にして肉戀の腐敗せざるべからざるあとを知りながら、尚吾國二千年來の詩人を俗殺して「ミューズ」をして富嶽のかげに嘆せしめざるべからざるか。

嗚呼俗人よ〳〵。汝は到底天地の美妙を感じ能はざるか。汝は到底戀の無限あるあとを味ひ能はざるか。汝はカーライルをしてありとあらゆる痛罵を擅にせしめざるべからざるか。塵界に營々するはあれ汝の本意あるか。汝の四肢五躰は西行芭蕉に異るとあろあるか。汝の八孔九竅はダンテ、ウォルヅウォースに異るとあろあるか。汝は黄金と名利とを拜するとを知りて更に詩神を拜するとを知らざるか。汝は五十年の泥土を貪るとを知りて無限の天地を貪るとを知らざるか。

狂夫ウオルヅウオース「スコットランド」に旅寢して谷間のほとりにあはれある少女を見たり。かの仙潭のむかしあらねどあやにくに其面影を忘れかねてあれが爲に詩

を賦せしあと前後數篇に及ぶ。彼は「ライダル」の山家に糟糠の妻ある風雅の隱士、人あるひはウオルヅウオースを以てうの少婦を忘れたりとせんか、その情を變せりとせんか、風流の志なしとせんか、はた人生を輕んずとせんか。

ウオルヅウオースは滄浪の君子あり。節を騷壇に持して白髮六十年、かつて世俗に媚ぶるとを知らず。彼すでに世に媚ぶるとを知らず、いかんぞ己れの情に媚びんや、いかんぞ「スコットランド」の一少女に媚びんや。しかも其面影の忘れかねて野花一輪のあはれなる風情に風雅の心を驚かすは何ぞや。

かぎりあれば衣ばかりをぬぎかへて
いゝろは花をしたふありけり。

西行

あれすあはち人生のまあとに非ずや。花を慕ふものにして始めてまあとの花に逢ひ、天地に旅寢してまあとの宿を尋ぬればあそ、くたぶれて宿かる頃や藤の花とはいふあれ。天下あにものか風流にあらざる。しかも之を尋ぬるあとあくんば千年を待つと雖も來ることなし。人生いづれの時か戀あからん。しかも尋ねずんば遂にかの

戀あるものを知る能はざるあり。滄浪の間に枕してあしたに月を思ひゆふべに花を慕ひ、かの詩神を尋ぬるあといよ〳〵深くして、いよ〳〵詩神の味ひ難きを見る。あれ詩神の無限あるが故あり。誰かほとけを知り盡したりとせむ。誰か風流を尋ね盡したりとせむ。誰かエホバを窺ひ盡したりとせむ。かの戀あるもの亦然り。いよ〳〵之を尋ぬるあと深くして、いよ〳〵その味ひ難きを見るに至らずんば戀は遂に無限ありといふあと能はず。一旦相微笑したるの故をもて之を戀と名け戀の成就とせんか、うらむらくは是れ未だ戀に格らざるあり。ウオルヅウオースが「スコットランド」に少女の面影を見たりといふは、彼がまあとの戀を尋ねんとするの志を示せるのみ。

人すでに戀を尋ぬ。されば人の戀するや必ず始より之を尋ね得るものに非ず。軒端に花の白きを認めて花を尋ぬるの心を止むるものは是れすでに花を愛するあとを忘れたるあり。あれを男性にしては彼を戀ひ是を戀ひ、あれを女性にしては彼に慕はれ是に慕はれ、あゝに始めてダンテはビートライスを知るに至る。ダンテ必ずしも

始めよりビートライスを尋ね得たるに非るべし。幾多の女性に逢ひて幾多の戀を知り、かくの如くにして人は始めて戀に進む。何ぞウオルヅウオースを以て其情を變せりといはむ、何ぞ人生を輕んせりといはむ、何ぞ風流の心あしといはむ。蓋し五十年六十年の間人多くあの經驗に逢ふ、かの名けて初戀といふがおとときものは之を楷梯として更にまあとの戀に進むの路あるのみ。これあるが爲に戀をけがすが如く思ふはあやまれり。更にあゝにとゞまらんと欲するはあやまれり。きのふ迄戀と認めたるとあろのもの、必ずけふの戀といふべからず、けふの戀と思へるもの、いづくんぞ他日の戀に及ばざるを知らむ。戀はあゝに至て始て無限に入らんとす。戀を味はんとするものは必ずあゝに始めざる可らず。

五十年の生涯に向て智德の圓滿を望み、朽つべきの骨に向て朽ちざるの無限を求むるは丈夫の恥づるとあろあり。無限あるものを味ひ無量あるものを得んとせば須く死肉を辭すべし、須く朽骨を離るべし。人は到底五十年の生涯に於て限り無きの滿足を得べからず、限り無きの滿足を得んと欲せば限りあるの世界を沒してあゝろ月

とあれよ、花となれよ。かの滿足なる一語は多くあれ戀を殺すものに非ずや、つれ〴〵の法師と共に久米の仙者を笑ふのともがらと雖もおのれ又久米の仙者に遠からざるも鮮あし。遠からざるに非ず、あれ人の常あり。かの久米の仙者と雖も心まあとの戀を慕はざらんや。心に故人の腸をさぐりて區々たる肉情を脱却し天地の間に意中のおもかげを認め來りて陶然として微笑するもの、一旦その一諾によりて吾戀の成就ありとせんか、惜しいかな其戀あるものあゝに至て死す。

誰か圓滿の女性を慕はざるものやある。誰か圓滿の丈夫を思はざるものやある。然れども五十年の常は無常の常あり、この世はよしやさもあらばあれと西上人をして嘆せしめけむ、あゝろみにシェークスピアの戯曲を見よ、戀は多く人の理想を奪ひ去りて英雄あゝに少女の友とあり賢女あゝに小人の友とある。オヘリヤは必ずしもハムレットの理想を充たしむるものに非ざるべし、ハムレットのオヘリヤに於る豈又然らざらんや。されど人の笑ふとあろ嘲るとあろ皆彼等があはれの種となるらむ。かりに之を名けて小微笑の境といはんか。

夫れ人の小微笑界にあるや、必ず互に肝腸を傾くるものに非ざるが如し、傾くる能はざるものあれ人生の姿に非ずや。項羽のあらくれたる胸中は悉く虞氏の知らざるとあろ、ウオルヅウオースのあめつちに驚いたるは必ずしも「スコットランド」の一少女の知らざるとあろ、しかも萬軍を叱咤すべき傲漢をして別れを惜んで千行の涙を濺がしめたる、氣節カーライルを驚かしたる詩人をして谷河のほとりにあはれをとゞめしめたる、あれを詩と呼ばんか、發句といはんか。兼好文覺西行芭蕉の徒はいふも更あり、あとふりたるに似たれどパイロン、ウオルヅウオース、チニソンの徒いづれか之が爲にうたれて始めてまあをを幽玄天地に視開きたるに非ずとせん。丈夫の志戀するにありといはんや、さもあらばあれ戀は人間を導いて遠く「パラダイス」に歸らしむ。

然れども形骸を出でゝ靈界に進みたるの戀は又靈界を出でゝ形骸に歸らざる可らず。みにくき形骸を出でゝ見る目すゞしき形骸に歸る、あれを小微笑界の妙致とす。あれを五十年の戀のまあとゝす、無常あれ常といひ、さだめあきころいみじけれと

いひ、變轉迅速のうき世にたゞよひて風流の姿といふものはあの境に非ずして何ぞ。

ダンテの「ディバインコメディ」をうたふや、分て「ヘル」、「プルゲートリー」、「パラダイス」の三境とあす。「ヘル」は肉界あり醜界あり、夢想兵衛の所謂色慾國なり。「プルゲートリー」は然らず、一歩天にあり一歩地にあり、形を出でゝ靈に入り靈を出でゝ形にかへる。あれ實に小微笑の境に非ずや。然りと雖もあれを以て直に「パラダイス」と爲すは未だダンテの心に非ざるに似たり。あれ未だ五十年の戀を脱せざるが如し。未だ全く解脱したるの戀といふべからざるが如し。未だ無限に進むべき路をたどりて全く無限の境にあらざるが如し。未だ小微笑界に風狂してかの大微笑界に入らざるが如し。

戀は形骸を輕んずるものに非ず。誰か戀人のすゞしき眸子を慕はざらん、誰か戀人のすゞしき聲をきかざらん。しかれども眸子の愛すべく聲の愛すべく、はた眸子といはず聲といはず其間に溢れたる香味の掬ふべきは形骸の香味としてあれを愛するあり。形骸の愛すべきは到底天戀の愛すべきに同じからず。みにくきは形骸を卑むと共に、見る目すゞしき形骸を味ふは、まあとに小微笑界の妙致なりと雖も、あれを以て直に「パラダイス」の天戀を窺ふ能はざるに似たり。小微笑界には小微笑界の妙あり。肉慾界には肉慾界の致あり。大微笑界には大微笑界の韻あり。されば形骸の趣は形骸の趣あり、天戀の趣あるもの形骸の趣に異あらずんばあらず。人の此世に浮生を托して暫く宿を形骸にかり、形骸の妙を愛するに誰か風流を知らずといはん。然れども形骸の愛すべきを以てあれを天戀の妙とあさば戀は遂に無限ある能はず。誰か五十年の後、白骨と化し泥土に歸するものを以て無限天地の靈趣に比するものあらんや。月は暫く雲と相交るとありと雖も、雲は到底月の伴侶にあらず。天戀は暫く其おもかげをうつして形骸と相交るとありと雖も、形骸は到底天戀と伴ふべきものにあらず、形骸の如何はすあしも天戀に影響せざるあり。

まあとよ人の小微笑界に入るや、必ず戀人を現世に求む、必ず時を同ふするの人に求む。かの大微笑界に入るはこれを古往今來天地の間に求む。すでにあれを現世に

求むとせばかの小微笑界の戀人あるものは必ずその年齢を問ひ、その時機と場所とを求め、その聲の已が意にかなふを喜び、その姿のわがおもひに適せるを悅ぶ。人かの雷音洞主のいふが如くまあとの戀人は自己の戀しとおもへる人の顏面頭顱を見得るものにあらずとは須く小微笑界に逍遙したるの人について問ふべきなり、未だ始めよりその美しき眉を見ずその清き眼を見ずして小微笑界に入りたるものはあらず。骸あれば形あり、形あれば別あり、この故に嫉妬といふものその間に起り、慾情といふものその間に高し。大微笑界は則ち然らず。まあとの無限なるものは始めなく終りなし、歲月を以て斷つべからず、時間を以て制すべからず、靈は無形なり無形なるが故に彼我の別なし、時を想像し得るものは未だ天戀の境にあらず。彼我の區別を考へ得るものは未だ天戀の境にあらず、彼我の別なければ慾情の乘ずべきなし、彼はあれ我、我はあれ彼、むしろ天地と戀と我とを一にして、あゝに故人なく、のちゝに後生なく、妙機ひとたび到て陶然として互に微笑す。これを指して天戀の境といふ。一人の戀を出でゝ一人の骸に進むは形骸をもて論ずるときはこれ節を變

じたるなり、これ情をうつしたるなり。されど靈界なは無限なるが故に其戀なるものは進むに非ざれば退かざるを得ず。形骸は花を抱かんとするに、天戀は美を抱かんと欲す。形骸は髑髏を抱かんとするに、天戀は無限を抱かんと欲す。是に於てかいよ〳〵無限に入らんとせば、いよ〳〵舊衣を捨てゝ新衣を着するの必要あり。靈界に數なし、小微笑界の戀には「ペルソン」を主とすれど、靈界なんぞ「ペルソン」を主とせんや。小微笑界の戀人は老莊の如く孔孟の如く西行の如く芭蕉の如く如來の如く基督の如く、大微笑界の戀人は虛無の如く仁義の如く風雅の如く詩神の如く眞如の如く造化の如し。小微笑界言ひ易かちんや、況んや大微笑界をや、嗚呼庶幾くはあゝに始めて天戀の無限なるを味ふべきに近からんか。かのきぬ〳〵のうつり香に蘭麝のあろもを飄へし、秋雨のほろ〳〵と落つるを聽いてあやにくに巫山のむかしをあはれみ、あしたにけふりに燻いて魂を反さんとし、ゆふべに蓬萊をたづねて白骨を驚かすもの、彼等は風雅の盜人に似たり。されど心なき身にもあはれをとゞめては花の雨にぬれて共に蓬あつめんあとをたのしみ、名月のひかりに心も澄み

ておきて見つゐて見つ蚊屋のひろさかおとはいひけむ、天より盗みたる塵中の美にはいかで自然の薄命なからずやとはシェークスピアをして嘆ぜしめたるも、げにや人目をつゝむ小微笑界のあはれなるらむ。かの大微笑界に至ては然らず、塵のすがたに風雅の匂ひをあつめたるにあらねば美の神の嫉みを受くべきにあらず、仰いで天にも恥ぢず、俯して地にも愧ぢず、百花潭水則滄浪、嗚呼滄浪の風情あろかの大微笑界のおもむきに似たりけれ。小微笑界に於ては人互に肝膽を傾くるあとを得ず、思ふとあろいよ〳〵多くして言ふとあろいよ〳〵少なく、目を以て問ひ目を以て答へ、僅かに微笑してあやにくに忘れ難きものあれど、大微笑界に於ては互にその肝膽を傾けつくし、敢て聲を以て云ふとにはあらねど思ふとあろ悉く言ひ、言ふとあろ必ず合ひ、とあしなへに語りとあしなへに微笑す。あの故に小微笑界に入るもの互に理想の全く合するを要せず、合せざるとあろあれ小微笑界の妙致あれ、人もしあの小微笑界を出でゝ更に大微笑界に入らんとせば、其理想するとあろ互に相付着せざるべからず。理想の相付着するに非ずんばいつくんぞ彼を我とし我を彼とし、

其間一點無差別の戀にすゝむあとを得ん。あの故に共に小微笑界に入るの戀人は必ず共に大微笑界に入るの戀人にあらず。あの故に共に大微笑界に入るの戀人はあれを古往今來天地の間に求めざるべからず。もしあの戀人と時を同ふして相逢ふあとありとせんか、互に肉眼を以て相見るあとありとせんか、あれ實に千歳一遇あり。然れども人は直に「パラダイス」に歸るものに非ず。人は直に大微笑の境に入り得るものに非ず。未だ小微笑界を經ずして大微笑界に入りたるものにあらず。あゝろ風流を恥とせざるもの何ぞ形骸を輕んじて大微笑を得たりといはむ、何ぞ小微笑を賤しめて大雅の誇るべきをいはむ。かの「美」あるものを見よ、落ちて花とあり流れて水とある。春の花、秋の水、あれみな天地の姿にあらずや。戀の小微笑界に於る亦然り。かしなにその化身を示し、あゝに風流の姿をあらはす、かの小微笑界あるものは畢竟大微笑界のおもかげのうつれるのみ。花は落ち、水は流れて、かの「美」あるもの天地を去らず。人は死し、骨は碎けて、かの戀あるものとあしなへに存ず。人もしあの大微笑界に入て顧みて小微笑界の戀人を見よ、更に小微笑界に入

らんとせし初戀を見よ。嗚呼あの際また形骸の二字を言ふものあらんや。解脫、未解脫、俗、非俗、慾情、至聖、あれらのもの皆風流のうちにつゝまれて、美人もなく髑髏もなく、紅顏もなく白骨もなし。更に顧みて人生を懷ひ見よ、怒るもの、泣くもの、笑ふもの、東に走るもの、西に戢ふもの、金殿に悲むもの、破屋に憤るもの、英雄といひ、豪傑といひ、君子といひ、賢者といひ、才子といひ、奇物といひ、通人といひ、すねものといひ、愚といひ、俗といひ、小人といひ、匹夫といひ、誰かあれを見て風流のうつろひを觀せざらんや。更に顧みてシェークスピアの戲曲をひもとき見よ、嗚呼あゝに於て誰か戀人の戀ふべきを思はざらん、誰か風流のおそるべきを思はざらん。嗚呼戀よ、誰か汝を戀と呼びそめたる。そも〳〵道を貫くとあろ風雅の極まるとあろ理想のいたるとあろ、無量無邊無限風流眞如はた造化ついにその赴くとあろの東にあらざれは西、南にあらざれば北、人生の極致と宇宙の命運とあとおとく彼と我との心に往來し、あゝに於てか微笑全く戀に歸る。古今の遠き天地の濶き人間の小微笑界に逍遙するもの蓋しろの數を指し得べし、大微笑界

にいたりては遂に其數をいふ能はざるべし。

嗚呼大微笑界に入る人はむしろ互に相尋ねて肝膽を傾くるといはんより、天地の間にしばらく相別れたるもの一閃の靈機を待て再びむかしに歸るといふべきが如し。その時はじめて戀人と呼び戀人喚ばるゝに非ず、むしろ無限の戀人にしてたゞ一刹の稻妻により再び微笑すといふべきが如し。かの大微笑界はあれダンテが所謂樂園に非ずや。「パラダイス」に於ては人間悉く戀人に非ずや。花いたづらに落ちず、鳥いたづらに啼かず、況んや人間造化のふところに躍り入り戀といひ戀といふ豈に偶然に非ずとせんや。天豈にいたづらに戀を横へてわづかに五十年の旅客を困むるものあらんや。嗚呼區々たる小微笑を大微笑のうちに沒了せよ。沒了し沒了して月とあれ、花とあれ。故人の風流あゝに始めて語るべきに近からんか。」

春夜彈琴を聞きて

小東洋子

實にや一刻千金と惜みし彌生の空の春の日も、漸く暮おんとして、咲きも殘らず散りも初めず、今をさかりと咲き匂ひて、軒端近く雲かと紛ふひともとの櫻花に、夢の如く淡き月さへ掛りて、影朦朧と四邊をおめ、その景色さおからに薄絹にて包みたらむ如し。燈火の影にそむけて、妾は獨り端居して心靜氣く月霞む軒端の花を眺むるほどに、今しも浮雲の絶間もる月は圓々として花の梢に現はれ、心ありてや、花も又一入の風情を增しぬ。

はしおくも心に浮びしは、一人のはしき友め事おり。去年の春のことおりき。妾かは最も親しく睦み交せし友は、遠く千里を隔てゝ、西方の國へ旅立んとする前夜、霧か許を音信ぬ。妾は共と共に咲き滿ちたる花の下蔭にて、別れを惜しみつきぬ名殘を餞の小田卷くり返し〳〵して悲しみ、共に身の果敢おく幸おきを嘆きて語らん術もあらばおそ、かたみに手を握りて、熱き涙の中に又の逢瀨を誓ひしは、實に去年

の今宵にて、恰も其の夜の月は、今宵の如く淡霞に遮ぎられて、曇りも果てぬ朧夜とおり、只梢の花のみ朦朧けに雲かと見ゆる夜なりき。思へは心も千々になりて、無限の感に沈みし折しも、誰か心すさびの調べにや、遙彼方より哀に妙おる琴の音の聞ゆ來ぬ。謠ふ聲は清く澄みて、爪音ゆかしき小督の一曲おり、彈きゆく音は遠く澄みて、谷間を流るゝ清水の巖に激して碎くる如く、或は輕風の靜に春草を撫づるが如く、或は漕々として降しく雨に似つ、或は切々として大珠小珠の玉盤に落つるにさも似たり。かくて此の絃の音やみて爪音さへ絶え、暫聲おき其程はそゞろに哀の催して、聲あるよりも中々に風情を添ゆ。折から再び續く琴の音は、銀瓶碎けて水迸り、高峯の松に夜半の嵐すさむにも類へつべく、一斷一續綿々として調ぶるに、謠ふ聲は益々哀に、琴の音は愈澄みまさりつ、やがて調べも終らんとして、爪音輕く靜に只一聲彈き收むれは、餘韻は長く花の梢に殘る心地して、調ぶる人は今宵の月にうかれ、花を愛で興じてのすさびおらんも、妾も常は調べ拙おき身おがら、花面白き朝、月清き夕には、心つくしの琴に向ふ事もあれども、如何にしけん今宵

は此の節哀に調べ妙なる琴の音を聞きて餘所ならぬ悲さの月に浸み〳〵とふかくなりて、物語るに人もなく、ひたすらに去年別れにし友を忍びて、又今更らに人知れぬ涙に袖の絞られてなむ。されば古の立田の歌に合せて、みやびの心を動し、或は雲井の月に調べて猛きますらをの袖を絞らしめしもさては實に此の琴の音の餘韻深き故なりけむと、思ふ折しも四方靜氣く、小夜ふけて朧月のみ名殘惜しけに軒端邊にさまよふも、あゝ哀れ。

美文載文

閑雲野鶴　終

明治三十二年十一月廿五日印刷
明治三十二年十二月一日發行

（定價金三拾錢）

編輯者　高松正道
發行者　岩崎鐵次郎　東京神田區堅大工町五番地
印刷者　池田良藏　東京神田錦町二丁目三番地
印刷所　知足堂活版所　東京神田錦町二丁目三番地

版權所有

發兌元　東京神田區堅大工町五番地　大學館

文學士
白河鯉洋君序
宮崎來城君著

楊貴妃

楊貴妃が一代の行事は人の知らんと欲する所、今回宮崎來城先生が流麗無雙の筆に由りて點染せられたり一讀ば柳腰花臉と妖言媚行とを目前に見るの感あらむ、茲に楊貴妃が柳態花顏は、世人皆な之れを知り、一代の履歴も又皆な之れを知る、然れども此唯だ正史上に散見せる尋常の行事のみ、其隱微の妖言媚行に至りては、蓋し天下知悉するもの至て稀なり、余さきに臺灣に官遊し、轉じて吳越に出で、多く奇書珍本を携へて歸る、中に貴妃の歴史に關するもの十數部あり、みな斷簡零帙に屬すと雖も、而かも貴妃の言行は復た言ふを俟たず、當時宰相の面目より、天下の趨勢に及んで、一讀瞭然、眞に人をして奇々呼ばしむるもの少なきに非ず、因て試みに此一篇を綴りて、以て世人の未だ貴妃の全豹を窺はざるものに割愛す、

一篇中或は他の宮嬪を叙し、他の將相を叙し、他の文人騷客を叙す、貴妃に關する所少きに似たりと雖も亦當時の事態を詳悉せしめんと欲してのみ

一此篇は、もと宋の史官羅貫中が著はす所の隋唐志傳を以て骨子と爲し、別に正史と野乘と諸家の詩文集とを取り、綜錯混化縱横に鋪張し、筆を胭脂に染め、涙を忠孝に灑く、人以て一篇の間文字とするも可、春秋の意ありとするも可、紅情綠意の已む能はざる所、之を唐史の品題に托すとするも亦可なり、但だ篇中叙する所の朝政の得失、文人の聚散は、皆な時地を確考し、兒女の鍾情と、賓客の解嘲とに至りては、稍や點染ありと雖も、而かも烏有、子虛の比に非すして、畧ぼ初清の云亭山人が侯雪花の李姬傳を鋪張し、一部の桃花扇傳奇を作れるの類に屬す、

東京市神田區堅大工町五番地

大學館發兌

十一月廿日發行
正價 金貳拾錢
郵稅 金四錢

美文散文

白砂青松

白砂青松は名家文庫の第一編として現はれたるもの、書中藏る所は現代の文豪が各潛心の筆を馳せ、駢辭麗句、風雲を鏤め、月露を畫き、一讀人を寒殺す底の妙文を蒐めたるもの、天下好讀の士、一書を繙て清絶凉絶、坐して白砂青松に遊ぶの快を取り併て文の妙趣を味ひ以て練文の資に供せよ

正價 參拾錢
郵稅 四錢
郵券代用一割增
紙數三百三十頁

掲載目次

○十年前の夏……正岡子規
○富士行者……久保青琴
○雲のいろ〳〵……幸田露伴
○豆相遊記……東海散士
○村居漫筆……島崎藤村
○旅のつゝれ……破蓮
○湖心亭の記……大野酒竹
○磯うつ涙……佐々木信綱
○讀書漫言……茫々生
○七部集……高濱虛子
○玄武朱雀……泉鏡花
○試驗……瓜島崎正岡
○歌反古……藤村子規
○瀧……紅葉
○風流妄語……尾崎紅葉
○學海漫筆……依田學海
○孔子と馬琴……大町桂月
○夕の里……土井晚翠
○曼珠砂華……高濱虛子
○片影錄……雨庵
○奇童子……春雨
○賢博札記……遲塚麗水
○金剛杵……齋藤槐南
○夏期の追懷……末松謙澄
○菊女想夫の文……古文
○詩歌に於ける音意の諸調……
○あはれ〳〵此月……
○獨眼龍の歌……
○夜半……大和田建樹
○靜御前……戸川殘花
○うつし世……武島羽衣
○斷片十種……江見水陰
○客作雜興……田岡嶺雲
○哀歌……土井晚翠
○海棠……赤松國祚
○利根の夜船……三日月藤村
○妙義山の月……與謝野鐵幹
○鏡影……笹川臨風
○湘南雜興……久保田青琴
○松嶋遊記……武島羽衣
……中村秋香
……國府犀東

發兌 東京神田區堅大工町五番地 大學館

賣捌全國書肆雜誌店

名家文庫
第二編

美文散文 清風明月

本書は鎖夏好侶として將た練文の良師友として編したるもの、書中名士文豪の奇拔雄壯の健筆あり、秀麗奇景妙畫の如き紀行文あり、悲哀胸を割くの悲哀歌あり、讀去り讀來り文の妙味を味はんか、清風徐ろに衣袂を掃ふて明月中天に懸り夜色秀快の感益し鮮少ならざらん。

●靖國神社に詣づ……福本日南●沐猿の冠……島田三郎
●夢に釋宗演を訪ふ……三宅雪嶺●讀史雜感……大町桂月
●我をもしろの記……馬場孤蝶●青衿依舊……志賀矧川
●横井小楠と藤田東湖……徳富蘇峯●拿翁一世……中西牛郎
●あきあいせ……樋口一葉●禪榻獨語……國府犀東●荒灘の月……田岡嶺雲
●放言十則……大町桂月●避暑の妨害……三宅雪嶺●疑古放言……依田學海●英雄不欺人……白河鯉洋
●人物論……陸羯南●鄙の長路……久保琴青●消夏錄……杉浦重剛
●故人題夏の句……高濱虛子●絹繆小記……故勝海舟●膽汁餘滴……内村鑑三
●一夕話……渡邊子爵●松と蓮……鹽井雨江●夏草……島崎藤村
●風土短言……志賀重昂●八間獨尊……緒方流水●噺水閑話……原抱一庵
●人參畑の先生……鈴木天眼●花の郷……半仙子●陸羽俳遊記……小島烏水
●梅雨鬱陶誌……陸羯南●閑中適意……田岡嶺雲●刈萱日記……小島烏水

●正價三十錢
●郵稅四錢
●紙數三百頁
●爲替振込
●神田今川橋局
●郵券代用一割增

發兌　東京市神田區竪大工町五番地　大學館

名家文庫
第三編

美文散文 巖下滴泉

「日本人」主幹　香川怪庵君序

正價金三拾錢
郵稅金四錢
紙數三百二十頁

名家文庫の第三編として現える、想を養ひ文に熟せんとするの士い必ず一部を座右に具へ、以て練文の摸範となせ

奈破翁の墓に詣つ……福本日南　巢林子が同情……後藤宙外　新俳句を讀む……高草琴村
明智光秀の謀反……三宅雪嶺　詩人に告ぐ……高濱虛子　忘れ草……緒方流水
萬葉集に於ける宗教……大町桂月　四百年前後の東京正岡……風俗論……長澤別天
伸士と國民……松村介石　東京の風物……高草琴村　須磨明石……露月
新年二十九度……正岡子規　あだ波……馬場孤蝶　病中藝語……杉浦天台
批評家に望む……島崎藤村　復依田學海先生……有爲　偉大なる俳句……高濱虛子
北窓善趣……杉浦天台　梧窓漫錄……古孝庵　苦熱談……杉浦天台
智識界の停滯……尾崎學堂　松蔭神社を訪ふ……紫安清巖　人材の地理的配付……志賀矧川
羅江東……笹川臨風　大學俊髦に檄す……笹川東花　賈似道論……陸羯南
鹿笛……竹の里人　蕪村と曉臺……岡野知十　哲學大觀の序……三宅雪嶺
南歐詩話……上田敏　聲……大野洒竹　歌……福本日南
夜の両面……緒方流水　雪つぶて……蛇足堂

發兌　東京市神田區竪大工町五番地　大學館

名家文庫
第四編

美文
散文

水村山郭

正價金三拾錢
郵稅金四錢
紙數三百二十頁

掲載目次

◎日本今後の文學と文章……朝比奈知泉
◎五十三亭記……石井露月
◎明智光秀……戸川殘花
◎方今最大憂患……尾崎學堂
◎茶祖利休居士……星野天知
◎古白の墓に詣ず……竹の里人
◎死を論ず……大町桂月
◎紀の路の旅……松居松葉
◎王陽明の後に題す……陸羯南
◎沼津十八景の記……三島中洲
◎康有爲……志賀矧川
◎西嶺戰記……石井露月
◎嵯峨野……

◎紅樓夢の序詞……森槐南
◎あづま山……田山花袋
◎眠れる蝶……北村透谷
◎極樂は地獄の隣り……半一重
◎牧老人廣澤先生小傳……東海散士
◎蘆の湖の夕……生田葵山
◎陸奥宗光を論ず……松岡國男
◎花かげ……森田思軒
◎歸省雜記……緒方流水
◎士風論……星野天知
◎斷腸の記……
◎月に瞑して撿校を追ふ……

發兌　東京神田區竪大工町五番地　大學館

正岡子規君序

美文
散文

紅葉青山

正價金三十錢
郵稅金四錢
紙數三百二十頁

名家文庫の第五編として現はる、詳しくは左の目次を見よ

◎以古爲鏡……三宅雪嶺
◎江の嶋鎌倉……大和田建樹
◎月明の夕……笹川臨風
◎德川家康を憶ふ……杉浦重剛
◎富士山……林甕臣
◎三保の富士……大橋乙羽
◎瀨戸内海……長澤別天
◎嵐山花見の記……木下幸文
◎初旅……太田元綱
◎林毛川……陸羯南
◎天長節……井上頼國
◎舞子の濱……大橋乙羽
◎須磨の浦……河村文芽

◎豐公の相貌……河村文芽
◎志の子……一葉女史
◎男兒處世の道……三宅雪嶺
◎春夜……長尾雨山
◎夏の朝……波文子
◎秋景……國府犀東
◎冬季の樂……志賀矧川
◎壯士論……大庭春峰
◎軒のしのぶ……落合直文
◎國家最大の憂……柴四郎
◎明治社會三變說……長澤別天
◎病牀鑑半……正岡子規
◎征清紀念碑……井上哲次郎

◎奥州人と九州人……陸羯南
◎龍淵洞隨筆……本莊搦水
◎俊半の嵐……小中村義象
◎宇内的日本人……松村介石
◎湖の文明……志賀重昂
◎文學者の資格……近藤泥牛
◎多感の詩人……田岡嶺雲
◎成敗の標準……松村介石
◎秋風吟……琴洋漁史
◎我鄕の山水……紫安清巖
◎皮一重……小金井君子
◎巴理の情交……風流鶴客

發兌所　東京神田區竪大工町五番地　大學館

名家文庫第六編

美文
散文

江山烟雲

正價金三十錢
郵稅金四錢
紙數三百三十頁

掲載目次

◎不二の高根……遲塚麗水
◎幽寂……德富蘇峰
◎英雄論……三宅雪嶺
◎自然の面影……嵯峨の舍
◎詩人と運命……紫安清巖
◎可憐兒……宮崎湖處子
◎鴨の早贄……國府犀東
◎旅行特に登山に就て……久保天隨
◎塵のちまた……落合直文
◎無名の英雄……德富蘇峰
◎今の武藏野……國木田獨步
◎尼法師……福地櫻痴
◎烈眞虞の譬喩談……石橋忍月
◎歷史の詩趣……緒方流水
◎遺羽子……河東碧梧桐
◎つれ〳〵……白河鯉洋
◎我眼……河村文芽
◎はれ小袖……小杉天外
◎佛國革命史を讀む……松本君平
◎奈破裂翁の死面……池邊鉄昆崙
◎帝の臨終……陸羯南
◎詩人ゲーテと奈破崙……犬養木堂
◎題字……尾崎學堂
◎題奈翁一世の肖像……松村足堂
◎題奈破翁像……島田沼南
◎題奈翁一世死顏面の圖に對して感あり……釋宗演
◎題那翁肖像……山田奠南
◎題奈翁像……國分青崖
◎題奈翁像……竹の里人
◎題奈翁假面の圖を見る……

發行所　東京神田　堅大工町五番地　大學館

新體詩指南

緒方流水君序　石橋忍月君著

新體詩の性質を明にし、其作法を詳說し、附するに之が摸範たる作例と之を組織すべき資料たる類語を蒐集したるもの、新體詩自修の指南車たる本書を措て何れにか之を求めん

正價金三拾錢
郵稅一册四錢
紙數三百二十頁

目次

◎總論
◎詩の定義
◎詩の過去
◎詩の將來
◎詩と現在
◎詩と歌
◎英詩の種別
◎類語及作例
◎春の部
新年
早春
春の日
春の花
春の夜
暮春
◎夏の部
夏の夕
夏の月
夏の花
納涼
晚夏
◎秋の部
秋の夜
秋の月
秋の花
秋興
暮秋
◎冬の部
冬の朝
落葉
木枯
冬の夕
歲暮
◎戀
◎別離
◎雜の部
天體
詠物
詠史
懷舊
吊歌
◎英詩作法
◎緒論
◎詩の發音の抑揚及詩脚
◎詩の行及詩の停止
◎韻及節
◎詩の破格

發兌　東京神田　堅大工町五番地　大學館

韻文花天月地

全一冊　七月十日發兌
紙數　二百八十頁
正價　金貳拾五錢
郵稅　金四錢

春の日

春の月……島崎藤村
春の夜……松村男
柳の糸……大町桂月
花すみれ……河井酔茗
はなれ駒……太田玉茗
離れ小島……佐々木信綱
遼東の春……與謝野鐵幹
春の夕暮……大町桂月
桃さく宿……宮崎湖處子
菫の床……太田玉茗
潮音……島崎藤村
殘雪……武島羽衣
山の影……大町桂月
山家……宮崎湖處子
花に嵐……太田玉茗
舞子の濱……佐々木信綱

夏の夕

この夕……島崎藤村
此緑……佐々木信綱
蛙の聲……土井晩翠
夏の夜……島崎藤村
氷うり……佐々木信綱
蛙……宮崎湖處子
緑の蔭……土井晩翠
里の夕……緒方流水
廣瀬川……土井晩翠

秋の夜の夢

秋の夜……國木田獨歩
秋の蝶……塩井雨江
むしの音……天眞
ひとつや……田山花袋
朔風……宮崎湖處子
年のくれに……武島羽衣
秋風の歌……島崎藤村
朝がほ……太田玉茗
魂まつり……武島羽衣
冬の夜……與謝野鐵幹

戀

戀……武島羽衣
湖畔雜吟……田山花袋
夕月夜……田山花袋
園の清水……松村男
雞……島崎藤村
もり陰……田山花袋
月の夜……松村男
我がさほ姫の君に……

別離

別れ路……馬場孤蝶
うしろ影……河井酔茗
僧元恭を送る……與謝野鐵幹
さらば君……河井酔茗

雜

四季……竹の里人
山からにて……武島羽衣
わが友……國木田獨歩
母を葬る歌……島崎藤村
山中の石……與謝野鐵幹
はてなき海……國木田獨歩
淡路少女……大和田建樹
梅花鏡痩堂に題す……與謝野鐵幹
髑髏舞……武島羽衣
蒼苔を懷ふ……竹の里人
彼君……國木田獨歩
墓上の花……土井晩翠
故經……島崎藤村
俚歌に擬す……正岡子規
遊の歌の中……大和田建樹
籠鳥の感……土井晩翠
中野道遙を憶ひて……佐々木信綱
母の遺骸に向て……與謝野鐵幹
墓……田山花袋
やぶれ琴……鹽井雨江
漁翁の娘……大野洒竹
題圖……與謝野鐵幹

附錄

新体詩に就きて◉新体詩の近況◉新体詩人會◉竹の里人◉新体詩界

新体詩集「韻文花天月地」成る、收る所は皆當代有名の新体詩人の作にして其華を拔き其精を選びて之を集む、其數七十有余題。或は春の花下蝶に戲れ、或は夏の夕水邊涼を輕維にはらませ或は秋夜明月の下淨几に倚りて心耳を澄ましめ、或は冬朝窓前六花の紛々を眺むるの思あらしめん當に是れ四時花鳥風月の友天地の有情を敎ふるものは即ち之れなり

發兌所

東京神田區堅大工町五番地

大學館

文學士○高等師範學校講師宮本正貫君序　岩崎鐵次郎編纂

作文必携 助字用法詳解

全一冊　○正價　金十五錢　○郵稅　金四錢

本書ハ●也、矣、焉●乎、哉、耶●耳、爾、已●殆、幾●蓋、夫、抑●則、乃、即、輒、便●猶、尚、仍、等●助字數百ヲ集メ之ヲ決定辭（也矣ノ類）、怪疑辭（乎哉ノ類）、發問辭（誰孰ノ類）、願望辭、禁止辭、命令辭、被命辭、分別辭、形狀辭、想像辭、發端辭、歎息辭、指示辭、接續辭、推致辭、關係辭、反動辭、假設辭、動作辭、時刻辭、併列辭、分量辭、比較辭、反對辭、發着辭ノ二十五章ニ類別シ以テ各字ノ意義、用法、區別、實例等ヲ詳說セリ

文學士高等師範學校講師　宮本正貫君序　岩崎鐵次郎編纂

漢文速成 和文漢譯秘訣

全一冊　正價　金十五錢　郵稅　金四錢

和語ヲ漢語ノ語勢ニ變更スル練習法ヨリ復文十數例ヲ擧テ實字虛字助字ノ用法及語句ノ轉倒配置ヲ一字一字詳說シ又譯文ノ異同ヲ識別シ譯文ノ運用變化ヲ會得セシムル爲メ同一文ヲ數種ニ漢譯シタル名家ノ和文漢譯例ヲ示ス又歐文論評編ニハ譯文ノ方法秘訣ヲ詳說セリ

法學士　加藤正雄君序

書法秘訣 習字速成圖解

全一冊　正價　金十五錢　郵稅　金二錢　挿圖　三十二個

本書ハ永字八法●草字筆法●一文字五形修練術●忍返シ筆法●執筆法等ヲ總テ圖ヲ以テ詳說シ其他●執筆、運筆、姿勢、習識、四修、習情、文字之懷、筆勢、筆拍子、去頑、黑色、生字死字病字等ノ秘訣●魏太祖、王羲之、晉成帝、柳公權、東坡等ノ書法極意ヨリ●書體ノ種類筆道用具ニ至ル迄詳ニ說明シタレバ如何ナル惡筆モ本書ニ因テ練習スレバ期月ノ間ニ妙筆人ヲ驚スニ至ラン

發行所　東京市神田區竪町五番地　大學館

實用英語

第壹號ヨリ毎號取揃御注文ニ應ズ

第拾壹號七月一日發行　毎月二回、一日十五日發行　毎號紙數菊版形八十頁

英作文添削 博言博士

活用自在

實用會話 イーストレーキ

豪傑逸事

和文英譯 毎號擔當

英語試驗問題

英語答案

英語難問

質疑應答

英文和文

英文法講義

英學大家　高橋五郎擔當　法學士愛堂生

和譯指南

オリエント主筆　杉村廣太郎擔當　ジャパンタイムス勝俣銓吉郎擔當

英譯指南

フランクリン　目叙傳詳解　●ロングマン第四讀本註釋　●ナショナル第四讀本註釋　●ユニオン第四讀本註釋　●類語異同辨　●書簡文練習　●慣用語句集　●同語異品詞　●時と助動詞　●應用英文典　●英字新聞研究　●同音異字（九號ヨリ左ノ註釋ヲ載ス）

プッシング　ツー、ゼ、プロント註釋

一冊八錢●六冊四拾五錢●十二冊八十四錢●廿四冊一圓五拾六錢●郵稅一冊壹錢

英語自宅獨習

●壹ヶ年完成●正則假名付●

初學

●ナショナル第一讀本●ロングマン第一讀本●スペルリング詳解●發音詳解●各種の單語●日用單語（イーストレーイキ）●英習字圖解

第壹號ヨリ毎號取揃御注文ニ應ズ

發行所　東京市神田區竪町五番地　大學館

文學雜誌 活文壇

毎月一回定期發行
正價一冊金拾錢○六冊五圓七錢○十二冊壹圓八錢○郵稅一冊金壹錢○紙數壹百頁以上

第壹號 十一月三日發行

論說
○山水風月の二大意義……島村抱月
○海文學を鼓吹せさるべからす……國府犀東
○鏡花と眉山を論ず……緒方流水
○應接室……柳川春葉

小說
○稻むしろ……（久保田齋藤小綠塊）雨葉

美文
○酒保小話……小栗風葉
○幻往來……泉鏡花
○鞍馬の鹿……生田葵山
○舞踏番號……德田秋聲
○殘の雪道……久保田天隨
○田園詩人……風雨樓主人
○旅硯雜筆……河東碧梧桐
○新體詩談……正岡子規
○おのが秋……田山花袋
○冬の山家……國木田獨歩
○秋風集……佐々木信綱
○一口針……大野洒竹
○秋十句……高濱虛子
○冬十句……河東碧梧桐
○秋六句……尾崎紅葉
○旭山精舍清暑雜詠、朝日山望海……木蘇岐山
○行郡雜詩、名媛二咏、津川納涼次韻……安田泰堂
○西遊小稿……久保田青琴

和歌

新體詩

俳句

漢詩

發兌 東京大工町五番地 東堅禪田區 大學館